

第18号

実践女子大学



生活文化フォーラム

新生・生活文化学科誕生へ

- I 生活心理専攻 スタートにあたって
- II 幼児保育専攻・特別授業から
- III 生活文化学科の学びの風景

I

生活心理専攻 スタートにあたって

平成26年4月 生活文化専攻は生活心理専攻へ(名称変更)

* 生活文化フォーラム「生活を創る心理学」
平成26年1月11日開催

生活を創る心理学…………… 2

塚原 拓馬 本学生活文化学科 専任講師

講話 1 生活心理学と女子教育…………… 4

細江 容子 上越教育大学 教授

講話 2 彩り豊かな生活を創る心理学…………… 12

長崎 勤 筑波大学 教授

講話を受けて…………… 20

富田 洋三 本学生活文化学科 教授
井上 千枝子 本学生活文化学科 教授
乙訓 稔 本学生活文化学科 教授
田中 正浩 駒沢女子短期大学 教授
南雲 成二 本学生活文化学科 教授
水野 いずみ 本学生活文化学科 准教授
渡辺 敏 お茶の水女子大学附属小学校 教諭
松田 純子 本学生活文化学科 准教授
長谷川 恭子 本学生活文化学科 助教

生活を創る心理学

本学生活文化学科 専任講師

塚原 拓馬



生活心理学のこれから

生活心理「学」と言えるほどまだ研究も積み上がっているわけではありませんし、体系化されているわけではありませんので、できれば将来私たちの力で「学」と言えるぐらいまでに発展させていければという希望を持ち始めていこうと思っております。専攻という形で平成二十六年四月からスタートします。われわれが生きていく日常生活、社会生活の中でさまざまな生活課題がありますが、それらのものを心理学という一つの学問的な視点・手法を用いて理解し、解決していこうということを目指しています。そして、カリキュラム構成をし、実際に提供する教育内容も「社会・家族・健康」に関する生活課題を柱にして学生教育をしていきたいと考えています。また、それを学会、社会に対して発信していきたいと考えております。今とこれから生きる生活人・社会人を、この専攻を通して輩出していきたいと思っております。

生活心理学とは何か？

生活課題に対してはいろいろ尽きないものがあると思います。虐待、いじめ、不登校、こういったものは教育問題としていままでもありましたが、特にこの時代の教育の中では大きな一つの問題だと思えます。それから、うつ病、過労死、この辺りも産業生活を送るなかで、いままではどちら

かというところと隠されてきてしまったのかもしれない。働く者のメンタルヘルスというものは企業の中で一つの本当に大きなリスクヘッジとして、大企業になればなるほど取り組まれていきます。私はうつ病で休職している人たちを診ていますが、うつ病になると一年間ぐらいはどうしてもリタイアするわけです。一年休職して、さらにまた同じポストに戻るということに対して、企業側はとて高いハードルをつくっています。また、再発の可能性もありますし、戻るといことが現実的にかなり難しいのです。やはりそういった問題も実際問題として大きな社会テーマになっています。

また、自殺率の高さもその背後にはあります。今年は若干三万人を下回りましたが、いまだ三万人近い状態が平成十年からずっと続いています。戦争をしていない国なのに年間三万人もいる。これもまた大きな社会問題です。それから、医療の問題、雇用形態の問題、ドメスティックバイオレンス。さらに、育児不安、これは女性にとって自立した社会生活を送り、また家庭人になっていく女性にとって、特に大きな問題であると思います。これらの問題をどのように理解し支援していけるかということが、生活心理学の大きな一つの中心テーマとなります。そして、高齢化社会、これはもちろん社会問題として挙げられていますが、老老介護や独居老人の問題がこれからますます社会問題化していくというのは言わずと知れていることです。これは、一人の人の力ではどうしても解決し得ないものがありますので、何らかの共同体・コミュニティといった

体制が整っていないかと、高齢化社会の問題は解決されないと思われます。

また、発達障がいの問題。これは幼稚園・小学校の先生方の尽力もあって、平成十七年に発達障がい者支援法が施行されてから、約十年間で周知され、教育の中にも降りてきていると思います。しかし、実は裏の問題としては、成人に対する発達障がいの支援のあり方が見過ごされています。ここ数年、失業率が四パーセントぐらいいとどまっています。成人の発達障がいの方の就業率は約三割ぐらいいです。そのうち八〇パーセントが大体給料にすると十五万円以下、五〇パーセントは十万円以下ぐらいの就業形態です。ですから、非正規雇用がほとんどです。よく若者が三年で退職するとかという問題が叫ばれて久しいですけれども、この裏には成人の発達障がいの問題などもまだまだ社会問題として野放しにされているというのは（少し言い過ぎかもしれませんが）、対策が急務であることに間違いありません。いま幼・小の段階の子たちはある程度支援を受けられているのかもしれませんが、いま成人以上になつて二十代三十代以上の人たちというのは、当時支援法がまだ施行されていないときでしたので、あまり周知もされていませんでした。そういう問題がまだまだ尽きないと思われまます。

例えばですが、問題をざっと挙げればこれだけの生活課題がまだ山積みになつていくわけですね。全てではないですが、われわれのそれぞれの先生方の専門領域の視点から専門的な技量をもってこういった生活問題に取り組んでいく。それを総合していけば何か一つの形になるのではないかと私は思っております。生活の営みと人間の生涯発達を総合的に捉えていき、それを理解し支援していくことがこれからの時代に求められることであろうと思えます。

生活心理学の基盤領域とは？

いままで、個々の問題として話してきましたが、専攻の立ち上げから三つのカテゴリーを大きく取り扱うという方針を立てました。一つは、『家族領域』。家族が生きるその集団、家族生活、そういった問題が一つ挙げられます。そして、『健康領域』。何はともあれ心身の健康がないと何を行ってもうまくいきません。そして、人々が生きる社会や産業、地域生活上の問題を考える『社会領域』。これらの三つのカテゴリーを創りまして、専門領域としてこのような問題を扱っていくということが生活心理学の三つの柱だと捉えていただければと思います。場合によっては進んでいくにつれ、生活心理「学」に近くなつていけば別の視点が必要になるかもしれません。学問は議論され、反証され、批判されることが必要なことですので、いまのスタート地点ではこの三つを挙げておりますが、この先もつと別の視点が増えられる、その必要性があるということも十分あり得ると思えます。また、私としては学生と一緒に考えていきたいと思っております。あまり専門の視点だけでこうだと決めつけるのではなくて、やはり若い十代二十代の学生からの視点というのも非常に大切ではないかと思えます。学生からの意見や考え方というのが意外にこちらでは思いつかないことを言うかもしれないので、それらのものを吸い上げて、教育内容や生活心理学というものに反映させていきたいと考えております。そうした心理学を四年間かけて教育し、学生は実習や実践というものを体験し、学んでいく。自分が社会の中でどういう職業に就いて社会貢献ができるのだろうかということや四年間の中で感じて実感を持ち、一人の自立した社会人へと向かつていけるような専攻を、私たちはこれから始めたいと思っております。

講話 1

生活心理学と女子教育



上越教育大学 教授

細江 容子

まず、学生に伝えておきたいこと

今日は生活心理学のこれからということ、二〇一四年スタートの生活心理学という領域で学生たちをどのように教育していく必要があるのかというようなことについてお話しさせていただきますと思います。なぜそういう視点をもっているのかというと、学生たちが入学してきて、その学生たちを社会に出していくというプロセスが大切だと考えているからです。では、どのようにしてその優秀な学生に目的意識をもって勉強してもらおうのかというようなことについてお話をしていきたいと思えます。

まず「女性が社会を変える、世界を変える」という学祖下田歌子さんの言葉ですけれども、非常にいまの時代にぴったりと感じております。では、社会を変え世界を変える女性というのはどういう女性たちなのか。Virginia大学の臨床心理学者、Meg Jayによれば、二十代で蓄積したアイデンティティ・キャピタルを将来の自分の資産にすることのできる女性ということになります。これまでの社会通念ですと、二十代は自分探しの時代というようなことがいわれていたのだけれど、そんな自分探しをしていたのでは、いまの時代にはついていけないというようなことです。二十代のうちに努力をしてある種のスキルを身に付けて、社会的ネットワークを広げてアイデンティティ・キャピタルを増やしていく。そして、いわゆるアイデンティティを積極的に構築するための時間やエネルギー、それから、お金を自己投資していくというのはすごく大事なことだということです。

しかしながら、採用できる戦略により将来に差があります。達成度が

違います。「十年二十年三十年、そうすると、未来のあなたはこういうふうになります」とかいう話をしますと、学生は「そこそこでいい。教員採用試験は難しいし、一回ぐらいいは記念に受けても、無理なら実家に帰って親と暮らしながら、そこそこの生活はできる」とか言ったりします。お金持ちと結婚する、なんていうとんでもない学生もいます。自分の将来なのに、です。

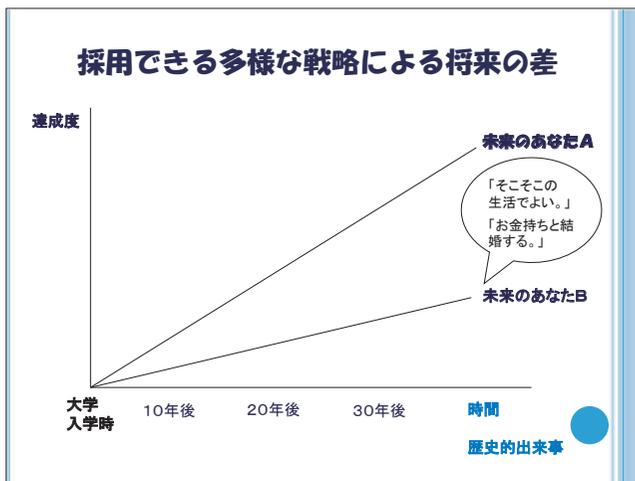
しかし、そこそこの生活でよい、お金持ちと結婚すると言ったとしても、「安定的にそこそこの生活が可能な時代なの？」というふうに学生に問わないといけない。「本当にお金持ちと結婚できるのかしら、あなたたち」というふうに問わないといけないわけです。そうすると、ジニ係数(Gini coefficient)という数字がはじき出されていて、「日本というのは格差拡大社会なのよ。あなたたち分かるわね。そして、相対的貧困率が極めて高い世の中なのよ。子どもの七人に一人ほどは、相対的な貧困の子どもたちなのよ。もし教員になって行つたときに、あなたたちの目の前にいる子どもたちの七人に一人ほどは相対的貧困の家庭の子どもたちなのよ」という話をきちんと理解しないといけないし、自分たちだつて努力しなければそういう状況になる可能性もあるということなんです」と話します。

それから、お金持ちと結婚できる時代、本当かしらということです。明治安田生活福祉研究所のデータなどでは、「四百万から五百万未満、最低だつてそれぐらいの収入が欲しい」などと言うような女性たちが三割以上いるわけですから、野村総合研究所の調査なんか見ると、二十〜四十九歳までのいわゆる離婚を経験していない未婚男性、年収七百万以上の男性はわずか二・八パーセント。年収五百万は七・七パー

セント。四百万以下に下げたとしても、一六・一パーセントしかない。「あなたたち、この数字分かるの？ 理解できるの？」という話になります。

『婚活現象の社会学』という本に書かれているんですけども、婚活は独身女性による、わずかな高年収男性の競争なんです。もう徹底的に競争しないと勝ち抜けない。ただ、中央大学の山田昌弘先生と一緒に仕事をしている白河桃子さんが「セレブ妻になれる人、なれない人」という本を出していますが、なれるかしら？ なれないよね、という話です。

そうすると、「こういう時代をどのように捉えて、どのように生きていくのか」ということをきちんと考えないといけないんじゃないの？ あなたたち」という話からやはりスタートしていかなければいけないんじゃないかということ。そういうことをきちんと分かると、では自分の人生をきちんと設計して、生活課題というものを考えながら生活していこうと考えると思います。そこで、いまのことと関わるライフコース論、生活課題、ライフプランという三つの視点から次に簡単にお話を



させていただきたいと思います。

女性のライフコース

ライフコース論ということですが、私たちは時代の制約を受けて生きていくということです。ライフコース論をご承知の先生方も多いかもしれませんが、いわゆる人間の一生を誕生から死までの全過程として捉えて、そのプロセスが時代や社会構造の影響を受けるといような形で研究をしていくというエルダーの理論です。そのライフコース論で四つの視点が出てきます。人間は制約・制限をもってこの世に生まれてくる。その中で、個人の目標志向は大事なのだと学生たちに言うわけです。それから、社会関係、人との関係性は大事だから、きちんとよりよい関係を構築していく。自分の発展に関わるような、目標到達に関わるような人たちとも十分に関わっていく。それから、時空間的な位置ということも考えたときに、きちんとそこで自分自身というのや目標をもって生きていくとか、人生のタイミングというのは大事なのだ、とかいう話をするんです。

そうすると、学生たちは何を言うかというと、「目標？ 夢？ こんな時代に目標・夢ってかつたるいよね」とか、「どうせ、私たちの生きている時代って全然景気いいわけじゃないし、お父さんだってリストラザれちゃったし。目標・夢なんて考えてもいいわけ？ こんな時代に。ちよつとかつたるいよね」とかいうような言い方をするわけです。関係ということでも、「楽な関係だけでいいじゃない。楽しい関係でいいじゃない」というような言い方をする。

ですが、やはり生活心理学専攻の学生に目的をもたせ、夢と希望をも

たせて教育をしていくということを考え、差別化を図って、社会の中に出していく。企業が採用して、「生活心理の学生はすばらしかった。実践の学生はすばらしかった。また採用したい。こんなすばらしい学生は」というふうにしてもらえよう学生を育てていかなければいけないということを考えます。まず一つめとして、目標志向というか、どんな人生を歩みたいのか、どのような目標を定めるのかということ、きちんと考えてもらわないとだめだろうと思います。そうすると、どうもロールモデルがない。女性で成功した人を見ていない。成功した人を見て、ああいうふうになりたい、こういうふうになりたいというふうにしてもらうというのが大事だろうと思うのです。

それから、二つめですが、結び合わさる人生ということですが、どのような人々と関わって、どのような関係を結ぶのか、個人・家族とどのような関係を考えた時にはすごく大事なわけです、やはり自分かどういふ人生を歩んでいくのか、どういったキャリア形成をしていくのかということも考えたときに、その目的のためにどのような人々と関わって、どのようなネットワークを広げていくのか。いろいろな他領域の人々とつながりながら、自分の人生にプラスになるようなネットワークを広げていくことによって、自分のキャリアにもプラスになっていくということがあるわけです。だから、そこところはすごく大事なのだらうと思っています。

三つめは、時空間という話なのです。実践女子大学の生活心理学というようすばらしいデザインがあつて、その中で人生の大事な時期に学ぶということの意味を積極的に考えていくということです。私たち教員も積極的にそういったものの情報を発信していかなければいけないの

でしようけれども、学生たちもその意味を積極的に考えていく必要があるだろうと考えます。

それから、四つめは、人生のタイミングということで、戦略的に敵を知っていかなければいけないということです。どういうことかといいますと、外部の出来事、時代的・歴史的なものをきちんと理解して、それに反応して、行動を意図して、利用できる資源を用いて出来事に対処していかなければいけないということです。特にライフイベントについてですが、就学であるとか、就職であるとか、結婚であるとか、出産であるとか、子育てであるとか、教育であるとかを、どのようなタイミングで、どういった形でそれを達成していき、そして、自分の目標・人生の目標をクリアしていくのかということを考えていかなければいけないということです。そして、最後は資源をどのように蓄えて、どのように得て利用し、仕事をして、家族をつくるとかということを、やはり採用できる多様な戦略でやっていく必要があるだろうと思います。

そうすると、外部の出来事とか歴史的・時代的なものを考えたとき、大体課題が四つぐらいにくくれるのではないかと思います。

歴史的・時代的な外部の出来事と個人・家族

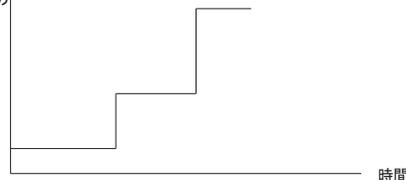
まず、最初は社会と科学技術の強い関連性、知識・技術のレベルということです。かつては、緩やかなカーブを描くような時代だったけれども、いまは何か新しい知識や技術が発見されていくと、階段のようなさまざまな形で変化していく時代なわけです。そうすると、求められる新しい知識というのも違ってきていて、問題をいち早く発見して解決できるような、そして、さまざまな知識を組み合わせたいけるよ

うな、極めて創造的な能力というものを培っていくような教育がとても大事になる。そうすると、問題をいち早く解決できるような知識、そして、さまざまな知識を組み合わせたいけるような創造的な能力を学生たちにもち合わせていかないと、これからやはり社会に適応できない、企業も採用してくれないということになるだろうと思います。だから、私自身も含めて教員自身の意識改革というものがとても大切な時代なのだろうと考えています。どういうふうな教育によって、こういった力を学生たちに付けていけるのだろうかということも関わってくるだろうと思います。

二つめは、グローバル化と競争的経済環境です。経済のグローバル化の中で競争ということですが、いわゆる格差の拡大の中で雇用の二極化が進んでいくというような時代、安い労働力が全世界から入手可能になってくるわけです。中国が生産基地になっていった時代から、今度はそれがまたほかに移っていくような時代の中で、日本がどういった形で特

①社会と科学技術との強い関連性

生きていく時代
知識・技術の
レベル



求められている新しい形の「知識」→科学技術と個人・社会

- 既存の知識の枠組みを超えて生じているさまざまな変化に対応し、問題をいち早く発見し、解決する「知識」
- 固定したものではなく、さまざまな知識を組み合わせたいけるような創造的な能力

化していき、企業がその中で生き残っていくのか。その生き残っていく中でどういった学生たちを企業は求めているのかということも、やはり私たちは考えていく必要があるだろうと思います。

専門能力の高い専門職の人々と、それらを束ねる管理能力の高い人々、この人たちは長時間労働で高収入を得ることになるわけです。あと、マニユアルどおり働く多くの単純労働者というふうに分かれてくるということになってくる。そのような時代において、その家族・個人というのは経済基盤というものを不安定な状況に落とさざるを得なくなる可能性が非常に強い社会だということをきちんと学生たちは理解して、自分はどういった目標をもつて、どういった人生を歩んでいくのかということを考えていかないといけないと思います。

三つめは、エネルギー環境制約の問題。これはよくご存じのように、3E時代といわれるもので、持続可能な社会が大事な時代に生きているということを生きたちに理解してもらえればいいだろうと思います。

四つめは少子高齢化・人口減少社会の問題です。高齢人口が非常に増えてきて、高齢化率、これもよくご存じの数字ですけども、二〇一三年には四人に一人、二〇六〇年には二・五人に一人が高齢者、その間に後期高齢者が増えていくということになりますから、後期高齢者が増えるという介護の問題、認知症の問題等さまざまな問題が出てくる。これらの問題は社会問題として出てくるようになるわけで、家族社会学や家族関係学の領域のところできちんと学生たちに理解してもらう必要があります。

少子高齢化・人口減少社会において何がいわゆるかという、家族が不安定化する中で、女性が労働力として活躍してもらわないと、国が立

ちゆかなくなる。女性にとつてみれば追い風なわけですね。だから、国の政策的な展開の中で女性も仕事がいやすくなってくるだろうと思えます。そうすると、「昭和婚」ではなくて「男女共同参画婚」を目指すということになるわけです。

「昭和婚」というのはいわゆる性別役割分業によって、女性は家事・育児、夫は仕事という形での結婚生活です。学生たちの親もどちらかということといった志向が強いかと思うのですが、いまはそうではなくて、男女とも社会に参画し、経済的に自立を図り、仕事も家事も育児も協力して、というような形で参画していくような「男女共同参画婚」を目指すような時代になってきている。だからこそ女性たちも、きちんと自分の目標をもつて生活していかなくやいけないんだということ、十分に理解してもらうことが大切だと考えます。

新たな時代の生活課題

このような新たな時代の生活課題というのは何かとなったときに、やはり問題があります。個人・家族にとつてみればリキッド・モダニティというような問題です。これはどういうことかという、Giddens, Beck, Baumanが言うような個人化の進展ということですが、「選択肢の増大と選択主体の確立」という問題です。かつては伝統があつて、その中で伝統に従い規範に従い、いろいろなものを選択していくことによつて割と楽に生きていけた。しかし、自由な選択が許される過程の中では、どれをとつてみても、どういった選択をしてみてもいい、個人の嗜好による選択の時代なわけです。自分の好きな形で選択していくわけですけども、ある意味では自己責任というような形で、自分がどんな責任

をとっていかなければいけない時代です。

その中で、理想的家族形成というのも極めて困難になってくる。どうということかというところ、リキッド・モダンティという概念で説明すると、新たな伝統の創造なき解体の時代であって、かつてであれば家族のモデルがあつて、そのモデルのとおりには家族を営んでいけばよかった。しかしいま、そのモデルがない時代です。そして、新たな関係性を構築するというところを考えたときには、やはりネット社会の中でどういった関係を構築するのか。場合によっては危険な関係性が構築されていく場合もあるわけです。そういった社会の中で、自分自身が選択して家族をつくっていくことが非常に困難な時代であるといえます。逆にいえば、多様なモデルを提供することによって、職業的なキャリアの中ではこういった形でこういった選択をすることによって、キャリア形成がプラスになったりマイナスになったりするというようなことを、学生たちにきちんと理解させていかなければいけないだろうと思います。先行的家族モデルを考えたときには、いまの若い人は「自分の好きな仕事して、好きな相手と結婚して、好きな趣味に励んで、経済的にも情緒的にも豊かに暮らしたい」とか言い出しますが、なかなかそれが難しいということをきちんと理解してもらい、どのように自分の生活課題をクリアしながら家族をつくっていくのかということを考えてもらう必要があると思います。

ライフプランのために

最後に申し上げたいことは、いままで述べてきた社会的変化の中でどのような夢を持ち、自分がどういうふうな家族をつくっていくのかと

いうことを考えていく必要があるだろうということです。また女性も労働力として社会に貢献する時代ですので、どのように自己のキャリアプランを構築していくのかという点も重要です。そして、最初にお話をしたように、二十代のうちに努力してある種のスキルを身に付けていく、ネットワークを構築していく、アイデンティティ・キャピタルを増やしていくということがすごく大事になっていく。いわゆる自己への投資。お金だけでなく、多様な投資をしていく必要があるのだろうと考えます。そして、何度も申し上げましたように、ライフイベントのタイミングを考えていくということになってくる。例えば、卵子の老化の問題とか高年齢出産のリスクの問題とか、いろいろな問題が関わってくるのだろうと考えられています。結婚とか出産のタイミングをいつにもっていくのか。いわゆるライフイベントのタイミングをどのようにしていくのかというようなことが、やはり学生たちにとってはとても大事になってくるのはなからうかという気がしております。

最後に、「ライフプランのために」ということですが、生涯発達し続ける自分というものを認識することなので、これは生活心理専攻の枠組みにきっちり沿っているかと思えます。外部の出来事をきちんと理解して、利用できる資源を用いて、ライフイベントのタイミングを図りながら自分の目標を達成していく。学生たちが、いわゆる受動的ではなくて能動的に適応していくように考えていく必要があるのではないかと思います。そして、採用できる多様な戦略をもって進んでいく必要があるのではないかと、このことを学生たちに伝えていくことによって、自分で水を飲みたいと（飲みたい馬に水を飲ませることは困難だということ）というふうな思ってくれるような学生を授業で創っていくかなく

てはいけないと思っています。学生の潜在的自由度を増やしていく。教育資産であるとか、取得できるようないろいろなものを増やしていくということがすごく大事になってくる。

そのためのプランを行う。これはよくご存じのPDCAサイクルの中で捉えていく必要があると思いますが、計画して、実行して、評価して、改善していくような、そういうことを行っていくことで、自己のライフプランを非常にうまく展開していく、戦略的適応を図っていくということが必要だろうと思います。そういう戦略の中で女子学生たちが就職ということになったときには、ブラック企業ではなくてホワイト企業に就職をいただくといいことがすごく大事になってくる。就職と絡めて、学生たちにはそのようなことについての知識を持つ必要もあるだろうと考えます。

最後に、ヤン・カールソンの『真実の瞬間』というところに出てくる二人の石工の話をしたと思います。

ある日、一人の旅行者がバルセロナのサグラダ・ファミリアを訪れます。二人の石工が石を削っていた。それで、旅行者が問うわけです。「あなたはいったい何をしているんですか」と。一人は不満そうな迷惑そうな感じで、見て分らないのかという様子で、「このいまましい石を削っているんだよ。邪魔だからとつとと向こうに行ってくれよ」というような言い方をするわけです。しばらく歩いていて、もう一人の石工に問うわけです。「よくぞ聞いてくれました。私はいま世界で一番美しい大聖堂の基礎をつくっているんですよ」ともう一人はこたえます。

こういったふうな意識をもたせて仕事ができるような学生を教育して育てていく必要があるのではないのでしょうか。まかり間違っても、「石を削っているだけだ」とか言うような学生を育てないように。本当にすばらしい仕事をしているのだというふうに思うと、やはりそこから夢や希望が出てくるし、自分のキャリアをもっともつと高めていこうというようになると思います。

以上です。ありがとうございました。

求められている新しい形の「知識」

高等教育の中でどの様に自己の能力を培って行くか？

■教育現場における教師の意識改革

■学生自身の学ぶ姿勢

- 既存の知識の枠組みを超えて生じているさまざまな変化に対応し、

問題をいち早く発見し、解決する「知識」

- 固定したものではなく、

さまざまな知識を組み合わせるような創造的な能力



講話2

彩り豊かな生活を創る心理学



筑波大学 教授

長崎 勤

生活を創ること

今日は生活心理学を築いていくために何を考えていったらいいのだろうかということの材料を少しお話しさせていただいて、ご意見をいただければと思っています。

今日の構成としては、少し大きな言い方ですが、生活心理学の理論構築のためのプロット、こんな観点で考えてみたらということと、後半のほうでは生活心理学の実践、生活課題ですね。塚原先生や細江先生がおっしゃってくださったようないろいろな課題があるわけですから、その問題解決としての生活心理学ということで、その二点から考えていけたらと思っています。細江先生の話とつなげようと思うと、すごくつながるかなと思っています。それは最後のコラムの話です。同じ作業をしている二人の石工の人は、行動としては全く同じですが、その意味付け・価値付けが全然違っていたということです。最後の人はしっかりと何のための石削りなのか、つまりゴールというものをしっかりと働いていた。もう一人の人は、「おまえ、これやっておけよ」と言われたのかもしれないですね。この石が何になるかということも知らされていないでやっていたのかもしれない。ゴールを見失ったプロセス、そこだけをしていたと。そのことと今日お話しさせていただくことは実は非常に関連しています。

生活心理学の理論構築のためのプロットとして、まず生活っていったい何だろうかということですね。その共有できる部分を増やしていったらと思っています。そのために先ほどのコラムは、すごくいいイントロダクションだったと思います。

生活あるいは生活を共にする他者には二つの側面があると思います。一つは、生きていくための手段としての生活です。やはり人間は生物で

すので、食べなきゃいけない、眠らなければいけないし、お金も必要です。だから働かなきゃいけない。これはゴール・オリエンティッドな生活というふうに呼べると思います。「目標志向的な生活」です。目標のために働くということですね。そのときには他者というのはとかく手段になってしまふという傾向があるということも押さえておかなければいけないです。

一方、もう一つは、生きていくためとすることを離れて、目的としての生活の楽しみというのがあります。生物としてというよりも、例えば趣味をしたり散歩したり旅行に行ったりというように、旅行すること自体が楽しいわけですね。別に旅行しなくても生きていくことはできるわけですが、そういつた生活は実は私たちの中にはあるということです。ですので、訪問する場所はどこでもよかったですというわけです。その観光地を訪れるのが目的というよりも旅行すること自体が楽しい、だれかと一緒に旅行することが楽しいということですね。それはプロセス・オリエンティッドというふうに呼んでおきたいと思いますが、「過程を志向する、過程の楽しみというものを志向する」ということです。そのときの他者というものはむしろ目的、一緒に過ごすとか、一緒に歩くとか乗り物に乗るといふ、目的としての他者というわけです。

つまり他者というのとは手段であつたり目的であつたりという二重性といえますか側面をもっていますし、そして、一緒に過ごす生活も手段であつたり目的であつたりということですね。

こんなふうに一応分かりますが、実際の生活というのは実はゴールとプロセスが交差しているだろうと思います。交差する場としての生活なのだろうと。分かりやすい例として、一日何回か食事をするわけですが、食事をするという生活の行為ということ

で考えてみると、ゴールは栄養補給です。死なないための栄養補給。ですが、それだけで食事をしていくわけではないです。プロセスとして、調理を一緒にする、食事の準備を協力する、食事しながら会話する、コミュニケーションも楽しむ。食事をするしながら、そこで会話をしたり一緒につくったりということを楽しむという、そういうことが両面同時に進行しているということがあります。つまり多くの生活はゴールとプロセスの両者が織りなされている共同行為のルーティンであるということです。

そこで不思議なことに、生活や他者は手段でありながら目的である。一人の同じ人が栄養をとるための手段でありながら、でも、共に食事をするための目的であるという、そういう二重性をもっている。それが多くの私たちの生活であるし、人間は五百万年かけてこういう文化・カルチャーがある意味でつくり上げてきたのだろうと思います。それがいまはちょっと崩壊の危機にあるかなと思うのですが……。

「心の動き」の2側面

3) Goal とProcessが交差する場としての生活の中での「心の動き」の2側面

<食事>

● 欲求: 食欲 (I want.....)

● 共有: 誰かのために作る、一緒に食べる **楽しみ**、テーマの共有による会話 (We.....)

→ 子ども: この場で様々な学習 (認知、コミュニケーション・言語など) がなされる

→ 大人も様々な「心の動き」、ナラティブ

Goal とProcessが交差する場としての生活

食事をするという生活の行為 (台所、ダイニング)

● Goal: 栄養補給

● Process: 調理・食事準備の協力、食事をするしながらの会話・コミュニケーションを **楽しむ**

→ 生活はGoal とProcessの両者が **織りなされる** 共同行為ルーティン (生活・他者は手段であり、目的である)

「私の一番好きな場所はキッチンだ」

そして、更にこのゴールとプロセスが交差する場としての生活の中で多くの心の動きがあるということです。心理学ということだけがボンとどこか空中にあつて、その動きがどうなのかということを検証する科学のように思われがちですが、そんな心の動きというのはあり得ないですね。必ず何らかの生活の中で心が動くのです。

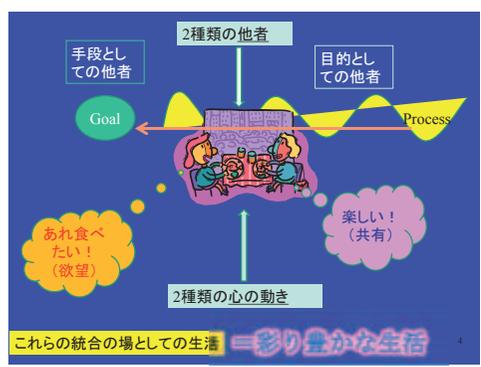
これを食事の場面で考えると、欲求というものがあります。おなかがいいた、あるいは、食べたいな。食欲です。主語は「I」ですよ。[「want, I need」という部分です。しかし一方で、先ほどから言っている共有という心の動きがあります。だからのためにつくとか、一緒に食べる楽しみとか、テーマを共有した会話。主語は「We」ですよ。[「We discuss, We eat」とかです。こういったことは一つの食事の中で同時に起きている。こういった心の動きが同時に起きているということがすごく大事だと思います。

そして、子どもはこの場でさまざまな認知やコミュニケーションや言語の学習がなされる、発達の場であるということ。また子どもだけでなく、一緒に食べる大人にもそこでさまざまな心の動きがあります。最近家族と一緒に食事をするという頻度がものすごく減っているといわれているのですが、従来、人間の文化がつくり出してきた食事場面、家族が四、五人夕方集まって、「今日こんなだったよ、あんなだったよ、大変だったよね」とか、その日の出来事を互いにとばで語る(ナラティブの)場であつたはずなのです。あるいは、そういう文化を人間はつくってきたはずですが、その場面が崩壊しつつあると。のちほど出てきますが、ある大手企業の調査では、家族そろって食事をする回数は「週に一・五回」だということですね。あとはばらばらの食事か、たまにそろつてもみんな大

型液晶テレビに向かって食事をしているということですね。食事の場でのナラティブというのが頻度としてもすごく減ってきているんじゃないか。

このイラストを昨日夜中につくつてみました。食事という場には、栄養をとるというゴールもありますが、一緒につくつたり一緒に準備をしたりというプロセスがあります。これは時系列でこんなふうに行進していくわけです。プロセス・オリエンテッドとゴール・オリエンテッドの両方重なったものです。つまりそこでは他者は手段であつたり目的であつたり、その二種類の他者性というものを経験するわけです。そして、あれが食べたいなという欲求・欲望があり、一緒に食べて楽しいな、お話しできて楽しいなという共有というものがある。こういった大きくいうと二種類の心の動きです。欲求・欲望の部分と信念・共有の部分ですね。これらが交差する、織りなされる場が例えば食事の場面です、これらの統合の場としての生活なのだと思います。つまりこ

れは非常にある意味では複雑なプロセスですが、彩り豊かな場なのです。人類が五百万年かけてつくつてきた一つの人間の暮らしのありようだったのです。そこはいろいろな要素が組み込まれた彩り豊かな生活の場であると思います。しかし、そこがいま大きく崩れつつあります。ゴール・オリエンテッドだけでも、あるいはプロセス・オリエンテッドだけでも危ういということが言えると思います。例えばいまの学生た



ちのゴールは唯一、より偏差値の高い大学に入ることになっていて、それ以上考えている学生は本当にまれです。これは大学の水準によらず、どの学生も偏差値の先のゴールということを考えるのは本当にまれになっていますし、偏差値の先のゴールを考える学生の比率はどんどん減つていくように思います。ですから、ゴールの設定が妥当かどうかということも重要です。ゴールの設定を学生たちに考えろと言っても多分難しい問題があつて、それを文化や歴史がつくってきたのだと思うのです。子どもたちが何をゴールにするか。それこそモデルというものがあつて、ああなりたいなというゴールを子どもたちは設定できたわけですが、そのゴールがもう消失しつつあるのですから、子どものせいではない。教育も、そういう教育はしてきていないですよ。ただ勉強しろと。小学生には中学校に入るため、中学生には高校に入るため、高校生には大学に入るため、大学生には就職のために勉強しろと言うだけであつて、この勉強がいったい何になるのか。勉強することは人間の文化の継承のためなのだよ、というよな、そういう教え方はしていないのではないかと思います。ですから、ゴールの設定が妥当かどうか。変なゴールの設定をすると大変なことにつながるということも、歴史は証明しているわけですよ。

トマセロというドイツの発達心理学者は、ゴールをポジティブに捉えて、子どもたちは生得的に協同可能な存在であると。生まれもって一歳前後ぐらいから大人と協同活動ができるように生得的前提が備わっているのだという、そういう主張をしているわけですけども、必ずしもそうでないという人もいるわけです。もつとも子どもというのはデザイナーアブル(欲望充足的)だという人もいるわけですが。

他者をゴールにした場合、ゴール・オリエンティドの一つの落とし穴は、

他者を手段化してしまうという可能性があります。ゴールのために常に目の前にいる他者を手段化してしまうということがあります。

それから、変なゴールを設定すると、逆に欲望の抑制(欲しがりません勝つまでは、ぜいたくは敵だ……)ということが起こってくるわけです。そういうことをドウルズ／ガタリあたりが、人間ってそうなるわけのうのだ、どうしてなのか、ということを非常に詳細に考察しているわけですけども、このゴール・オリエンティドにも落とし穴がある。

それから、プロセス・オリエンティドにも落とし穴があつて、これは他者を目的とすることは可能なだけども、しかし、ゴールを見失つてしまう落とし穴がある。いまの学生たちの友人関係なんか見えていますと、身近な友達とは非常に仲よくできるのですけれども、長期的な中期的な自分のゴールというのを見失ってしまうということも見受けられるわけです。ですから、ゴール・オリエンティドだけでも、プロセス・オリエンティドだけでも危ういわけですよ。これらがうまく統合されていく。これからの学生の教育を考えると、この辺りがうまく統合されるような教育ができないのかなど。しっかりと目標をもちながらも、ここで学友や先生たちと目的としての他者という関わりができる。そういう教育ができたらいいなというように、細江先生の話をもっとも思いました。

「私の一番好きな場所はキッチンだ」、これはよしもとなという作家の小説の一節ですが、キッチンというのはそれだけ豊かな場なのだということですよ。そこにはいろいろな人間の存在のあり方が全て含まれていると思います。逆にその人の生活が本当に生き生きとしたものであるかを見ると、キッチンや夕飯の実態を聞けば、そこには相当なことが、その人のあり方というのが反映されてくるのではないかと思っております。

生活の中での支援を！

さあ、その中で生活の中での発達と支援ということになります。生活様式(フォーム・ライフ)が意味の源泉だということを、ドイツの哲学者ウィトゲンシュタインが言いました。これが言語コミュニケーション研究の出発点になったわけですが、それから、ブルデューという社会学者はハビトゥスという概念で、生活の諸条件を共有する人々の間には特有な知覚と評価の傾向性がシステムとして形成されているというふうに言っています。

その中で人は発達をしていくわけですが、生活共同体に参加していく過程の活動に埋め込まれた学習をしていくというのが子どもたちなのだということ、レイヴ／ウエンガーたちが言っています。生活を大事にして、子どもでいえば、その生活を豊かにしていくことが発達を豊かにしていくということであるし、いろいろな発達のいろいろな問題や課題を抱えている子どもたちの生活を豊かにしていくことが、その発達支援につながっていくというふうに思っています。

そして、生活の観点から見えていくわけですが、それは生活だけではなくて、社会、世界、ときには人間とか哲学とか、そういったものにつながっていくことだと。ですから、キッチンというミクロな観点から出発しますけれども、そこを通してマクロな観点へと考えていくことができると思いますし、またマクロな観点からミクロな観点へとというふうに戻ってくることもできると思います。私の話はどちらかというとキッチンの話でしたから、ミクロな観点なのです。細江先生のお話はマクロの観点だったかもしれないですね。それは両方、二ウェイが必要だろうと思うわけです。

そして、生活心理学の実践という部分です。問題解決としての生活

心理学という後半の部分なので、さまざま子どもや人間の問題・課題の解決を目指す学問であるということです。いろいろな課題が出ていくわけですが、先ほど言いましたように、ある大手企業の調査では、父親が家庭で夕飯を食べる回数は週に一・五回です。家族そろって食事をするのは週に一回か二回だということです。週末か土曜か日曜のどっちかということですよ。だから、ウィークデーはほとんど父親が家庭で一緒にご飯を食べることはないというような現状です。

それから、やはりある企業の調査で、親子、母親と子どもが外遊びする回数は週に一回ぐらいだという調査も出ていまして、驚いたわけですね。これは例の放射能の問題なんかも多少関連しているかもしれませんが、外に行って遊ぶということができなくなっているというのが現状ということ。これはなかなか深刻な問題ではないかなと私は思います。

このように心を宙にポンと浮かんだ存在として見るのではなく、また、心の支援をカウンセリング室の中に閉じ込めるのではなくて、生活を豊かにし、生活の中で心の動きを育てていくことが重要だろうと。

また、クラスの一〇パーセントから二〇パーセントの子どもが発達障がいや「気になる子ども」であるということです。一〇パーセントがいわゆる特別支援が必要な子どもです。生物学的に障がいをもっている子どもが大体一〇パーセント。巡回相談の結果からすると、あとの一〇パーセントは社会・経済的な支援が必要な家庭環境、経済状況、先ほど細江先生からあったような貧困の問題とか、虐待を受けている子どもたちというのが一〇パーセントくらいいるという印象です。つまり二割ですから、三十人子どもがいたら六人はそういう問題をもっているわけですから、私はそういう専門でないからできませんというわけにもいかなくなってい

るわけですね。ですから、そういう子どもたちのクラスや保育の中での活動の中で支援が必要となってきたということですね。そして、生涯発達の中でだれもがいつかは障がいを抱えるというわけですね。その中でもう障がいと健常をすっぱり二つに分けることは難しく、連続的に捉える、スペクトラムに捉えるという観点が必要になってくる。インクルーシブとかユニバーサルという、そういう観点が必要になってきています。

そういった意味で、生活心理は今後大きな可能性をもった分野になり得るだろうと私自身は感じています。いろいろな諸課題を解決する大変大きな糸口を生活心理は与えることができるだろうと思います。では、具体的にはどういうことかというところ、コミュニケーションや言語あるいは認知発達や学習が、生活の中で行われるということですね。

そして、社会性ということでも、やはりこれも宙にポンと浮かんだ能力ではなくて、人とつながる力と自己理解というものが生活の中で学習されていく。生活様式の中に埋め込まれた学習なのだという事です。家族と夕飯の準備を手伝いながら、人とつながる力や、僕はこんなことが得意だな、こんなことが苦手だなといった自己理解が育っていくということですね。ですから、そのために生活がうまくいくことを支援するということが重要で、生活様式の中に埋め込まれた、人とつながる力と自己理解を支援していくことが必要ですし、それはこの生活の力、生活にはそういった力があるのだというふうに思います。

それから、特に発達障がいの人たちが増えていて、支援には生活心理学が非常に重要だろうと思います。一つ事例をお話しさせていただきましたが、通級指導を受けている発達障がいの子どもたちでも、ほとんど土日は家でゲームしかやらないという生活になってしまうことがみられます。

臨床発達支援の在り方

今日ご紹介する中学一年生の発達障がい児ですが、小学校の高学年ぐらいから不登校ぎみになってきました。知的には高いのですが、小学校高学年になりますと、やはり自分の障がいに気付くわけです。僕って何かちょっとほかの人と違うなとか、何かみんなから変なふうに見えるなとかいうところで、大体放っておきますと不登校になって引きこもってしまう傾向があります。この生徒もそうで、中学校には進級したのだけれども、ほとんど不登校ぎみだったわけですね。

それで、土曜日に少しお出かけツアーというのをやってみたらどうかと。大学生のお兄さんにボランティアとして加わってもらい、ちょっと計画しようよということ、ツアーを組みました。ある駅で待ち合わせて、近くの自然公園まで歩いて行って野鳥観察をして、その後大きなショッピングセンターまで歩いて行って、ちょっと買い物とかお昼を食べようという、ささやかな三時間のコースのツアーを組んだんですね。駅で待ち合わせしたのですが、生まれてこのかた家族以外との外出は初めてだったんです。自然公園に大学生のボランティアと発達障がいの生徒が出かけていきました。その後、ショッピングセンターに行って、ファストフードのハンバーガーでなくて、ちょっと高めの八百円ぐらいのハンバーガーを注文しようというプランです。一応、事前にネットでいろいろ調べて、値段とか種類を調べて、カウンターに行つて注文したのですけれども、予定した金額と違っちゃったんですね。八六〇円が八五〇円だったりとか、そのままフリーズしてしまつたのです。また、店員さんは親切心で「飲み物はいかがですか。コーラもありますし、ジュースもありますよ。いかがですか」と。それでもうフリーズして全然動けなくなつちやつた。自

分の想定したものとちよつと違つと困惑してしまつたのです。

そんなエピソードがたくさんありましたが、家に帰つてから、「ツアーはとても楽しかつた」と家族に話したそうです。そして、翌週から登校し始めたのです。つまり嫌なこともあるけど、世の中には楽しいこともあるみたいだよ、みたいなことに気付いて、その辺りから登校し始めて、いまは何とか普通高校に進学しています。

教育は、学校に来ていふこと中心に考えますが、子どもの生活つて学校といふのは一部分なわけですね。その辺りの生活をどう構築していくかということが大切でしょう。特に土日は、小学校高学年ぐらいになりますと、親を離れて子ども同士の関係の中で遊びに行つたり集団をつくつたりしますが、発達障がいの子どもたちはそれができないために全くネットワークが途切れてしまつたのです。そして、引きこもらざるを得ないような状態に置かれていふ。そこを何とかできたら大きく変わると思つたのですね。大学生はいつぱいいますから、何かそういうことを組織でやれたらなど。

精神病治療の中でも大きな変化が起こつていふように、認知行動療法の関連として生活改善療法といふのが注目されていふようです。これは昔はいわゆる生活療法といふのがあつて、それは随分批判されたようですよ。つまり管理性といふか、いかに病院の中できちんと生活させるかといふところに重きを置いていたのですが、もつとコミュニティを含めた生活改善療法、そういうことが大変効果があるといふふうにいわれているようです。それから、MP法といふのもあつて、できたこと・楽しめたことを毎日記録していくといふことでも大きな効果があると。鬱病治療の中でも、日の出とともに起きる、日中体を動かす、太陽光を浴

びて汗を流す、共同体の中で暮らすとか、助け合う文化、感謝するとか助け合うとか、そういう部分を強調していくといふようなことがあります。

それから、災害支援といふのは私たちがいつとも考えていかなければならないことなのですが、この間の東日本大震災(三・一一)でもいろいろな経験をさせていただきました。私は臨床発達心理士会といふところに所属してまして、会として、小さいことだけれども何かできることがあつたらやつていふことと考へました。原発事故被害の町の福島県双葉町からさいたまアリーナに村ごと何千人か避難されてきたので、臨床発達心理士会埼玉支部がその支援を行ひまして、私も伺ひました。廊下に段ボールを敷いて、そこに布団を並べて休んでいらして、その廊下の端に「あそび広場」といふのをつくりました。そして、いろいろな遊び道具をボランティアのお兄さん・お姉さんたちが置いて、その避難していふ子どもたちが少しでも遊べるような空間を用意したわけですね。行つてみて、騒然とした中で、うるさいのですが重たい沈黙が支配していたのですね。その端に「あそび広場」といふのがあつて、積み木やボードゲームなどが置かれたところで子どもたちが風船バレーをしていたんですね。それで、その一画だけが子どもたちの笑い声が響いていふ、非常に不思議な空間でした。ほかはうるさいのだけど沈黙の場なですよ。子どもたちが笑つていふ、でも、私は責任者として気になつたんですね。隣のフロアは双葉町の高齢者福祉施設の方々が丸ごと避難されておられました。それで、私は心配になつて、施設の責任者の方に、「うるさくないですか、子どもの声」と尋ねたところ、「いや、子どもの笑い声が心地良いのです」とおつしやつてくださったのですね。そういうことから、子どもたちにとつては水・食べ物と同様に遊びといふのは不可欠なのだといふふうを実

感をしました。災害支援を通して考える生活支援のミッションとしては、空気や水の重要性はもちろんなのですが、食事や睡眠や遊びのある当たり前の生活の重要性というのをもう一度再確認したいと思います。

それから、やはり絆、コミュニケーションということですね。それから、地域コミュニティの重要性。そういうところで新しい価値、新しい暮らしの模索というのが震災を通して私たち日本人が気付かされたところではないかなと思います。これらを創造していくという役割、それから、支援・被支援という、あるいは、クライアント・専門家という分け方ではない互恵的な関係性。両方が両方から学べる、相互がエンパワーメントされるような支援のあり方ということを考えさせられました。

それから、最後に人と人のつながりの再構築ということですね。つながりが断絶化しているわけですけども、そのためには子育て支援とか虐待の増加への対応が必要なわけですけども、これは二〇二二年の朝日新聞の朝刊で児童虐待が六二パーセント増加しているという記事があり、全くその同じ日の家庭欄では子育て塾に集うわけということで、ついに子育て塾が発足したということですね。歌遊びの仕方を塾で教えてくれるというような、週一回通って遊び方を教えてくれるというような塾が始まったというようなことで、非常に希望者が多くて、ウェイトイングリストが多く大変なのだというようなことでした。その母親たちのアンケートでは、立ち話の相手もないというのが二四パーセント。四人に一人が本当に孤立しているのだということですね。

そして、内閣府のアンケートで、自殺がずっと多いわけですけども、二〇二二年一月に行われた二十歳以上の三千人へのアンケートでは、本気で自殺したいと思ったことがあるという人が二三パーセントだという

ことで、さっきの、立ち話の相手がいないという方が二四パーセントでしたよね。本当にそのぐらいの比率で孤立化が進んでいるというふうに思います。人と人のつながりの断絶化が進行している。その背景としては、一九九〇年以降の冷戦後の経済のグローバル化や産業のIT化の中で、旧来の素朴な血縁・地縁・会社などによる人間関係の絆に依存する比率が著しく低下してきている。つまり人が人として生きていける生態系（生活様式）が大きく変化してきている。しかし、まだそれらに代わる新たなオルタナティブ（代替的）な関係性とか生活様式を、私たちの文化はまだ残念ながら見出していないのではないかなということですね。人類が五百万年かけて創ってきた様式が急速に崩壊しつつあるけれども、新たな様式や関係性を再構築できていないということですね。そこを何らかの新たな生活様式を私たちが創っていかねばいけないだろうと。そういうあたりも生活心理にはあるだろうなというふうに思います。

まとめになりますが、ほとんど心の動きや心の問題は生活様式の中で起こっていると。その問題解決のための生活心理学の理論と方法論が求められている。そこには基礎研究と実践研究の連携が不可欠です。それから、地域とのつながりも不可欠です。それから、更には心理学が学問の発展とともに社会心理学、発達心理学、青年心理学、認知心理学とばらばらになったのですが、それは学問の都合であって、本来、人や子どもは一つですよ。そこを生活というキーワードでもう一回再統合していくことも必要なのではないかなというふうに思いました。最後に、「彩り豊かな、生活を創るための生活心理学」ということで、環境とつながり、生活をつくっていく、それから、人とつながり、生活をつくっていくという生活心理学の可能性としてあるだろうと思えました。

講話を受けて

富田 支援の必要な子どもが増えている。クラスで二割というのは驚きだと思うのですけれども、普通、健常者と障がい者を分けると、健常者というのは要するに多数派、これが健常者ですね。少数派は障がいという。健常の中に少数派を入れる、これが救済なわけですね。ところが、二割となってくると、そういうことでは全く追いつかない。少数派ではもはやなくなつて、一つの集団をつくるのではないかということですね。何か経済的に自立できるようにしなければいけないということですね。この辺りの問題が起こってくるんじゃないかと。

長崎 私の説明が分かりにくかったせいかと思いますが、従来の障がいは約三パーセント、発達障がいは六・七パーセント。そうすると約一〇パーセントが何らかの生物学的な障がいをもつ子どもです。あと一〇パーセントは社会文化的な支援が必要な子。そういう子どもを含めて二割が何らかの支援が必要だと。発達障がいは六〜七パーセントぐらい。ですから、もう少数者とは言えないですよ。むしろ十人集まったら一人か二人は普通にいるという時代になつてきています。



富田 これは以前からそういった同じ比率でいたのか、それが分かって目立つようになってきたのか、それとも、ずっと増えてきたのか。

長崎 自閉症に関しては、私の学生時代には一万人に一人といわれていました。五年前には百人に一人といわれて、百倍の増加です。ところが、去年ぐらいは八十数人に一人で、男性に関していうと五十数人に一人という発表もあります。本当に増えているのかというのはまだはっきり分らないのですけれども、診断が厳密になったという言い方もできると思いますし、やはり何らかの環境的な変化、化学物質とか、そういうものが関与しているのではないかと言う人もいます。それから、生活環境とかコミュニケーションしにくいような環境になつてきているということも、育ちの中でそれが負に作用しているということもあるかもしれない。原因はよく分かつていないのですが、数字的には増えているのは確実ですね。

井上 施設実習のときには障がい者とか障がい児とかいろいろ障がいをもった方との、子どもだけではなくて高齢者とも関わっていくということ、非常にその接し方が難しいという話を学生から受けるのですけれども、そういう意味では学生がその辺りのところをすごく勉強したいと待っているのではないかなというふうに感じました。

乙訓 そこで、そうしたことを大学の教育の中や演習の中でどう組み入れていくかということですが、大学になつてもそこまでやる必要もないという批判もあるかもしれませんが、それも言っていられる状況で



はないと思いますね。それも昔の大学教育のやり方とはもう違ってきていると。

田中 私自身は、大学教育が変わっていかねばならないところもあると思うのですが、学生そのものが少し様変わりした面もあるし、していないところもあるかと思うのですね。長崎先生が、「私の一番好きな場所はキッチンだ」という話で、生活の中心にあるのは、居間というのを聞き出したくて聞いたら、居間と答える学生は少なかったですね。キッチンと言うのですね。それは日本の生活状況もあると思うのですが、けれども、リビングまでない家もあるのかもしれないですけども、キッチンで、みんなで食事をしたり語らうことが多いのかなとか。その辺りで言うと、学生の感覚というのは私たちの世代とは違うところもあるけれども、学生によっては非常に常識的に捉えている。

長崎 本当にそう思うのですね。そこを何とか変えられないかと思つて、そうじゃないのだよと。それこそ一緒に考えていく、新しいものをつくり出していくということが学問の主流なのだという、本当にコペルニクス的な転回を学生に促していないから。

大学って、どちらかという先生が講義して学生は学期末に課題を出すみたいな、そんなことを大学でやっていたらやっぱりだめなのかなと思つて、新しい教育方法を考えていかないといけないと思つていたところなのですよ。どうですか、教育学の立場からすると。

乙訓 もちろん、あるカリキュラムに即した教育方法があるわけですから、それはそれなりにきちつと何年かやる必要があるかとは思いますが、また別の形でですけども、授業の中である程度のディスカッションをさせるとか、ディベートさせるとか、授業の中にもっと組み込まな

いといけないだろうと思うのですね。

田中 大学でそれをやると、学生たちは後で言いますよね。小学校時代の調べ学習とか話し合いの学習をすごく思い出すと。大学に来てやると非常に新鮮になって、例えば話し合いもそうですけれども、プリントを渡して四人ぐらいでそこから問題を提起して探し出さないなんて言うと、話し合いながら探して、ああじゃない、こうじゃないと、すごく喜びながらやっている。

南雲 今回『朝日』が珍しく教育特集を組みましたよね。一日から六日まで。すぐにそれを資料化してみたいんですが、あの中に各地方版は地方の小学校の紹介があつたのです。司会進行方式といて、四十五分の中にパーソナルワークとグループワークのクラスワークを必ず組もうと。学習形態論的ではなくて、むしろ内容を子どもたちが本当に自分たちの学習に引き付けるためには、パーソナルワークとグループワークを組み合わせたとか、全体学習を必ず組み合わせるといふことをやろうということでした。子どもたちが一年生から、司会を必ず輪番制でやるというような定型的なパターンから入つていって、従来の注入主義的な上意下達の教師がずっと講義する、先生はずっと黒板の前にしがみついているというのから離れようというのを六年間かけてやってきているのです。それで、小学校は随分変わってきていて、ただ、それを中学校まで広げられるかという、課題は幾つかあるのですけれども、小学校でもどうしても注入主義的なのというか、先生がリードしてしまうような授業形態から脱却していこうという動きは出てきているのですね。ですから、長崎先生がおっしゃるように、大学でもパーソナルワークだけじゃなく積極的なグループワークを組んで、それを全体に返していくみたいなこと

というのは、九十分の時間構成の中で、手法的には特に意識的に入れていくというのはとてもいいことだと思っております。

長崎先生がおっしゃるように、そういう場を与えれば、ほぐす力はもっていると思います。いまの学生たちも十分ほぐして再構成する力はもっている。だから、私たちが意識的にそういう場を限られた時間の中で学生たちにきちっと提供することは大切だと思います。お二方の先生のお話を聞いて、やっぱり九十分をもっともって学生たちの手づくりの時間に戻してあげるような構成を、「小学校的」だと言われてもやらないとだめだなと思っております。

水野 お話を伺っていて感じたことなのですが、多分私たちが気を付けないといけないのは、こういう形態であれば学生はこうなるというふうに安易に思っただけではないかなという事です。それぞれの授業形態の長所・短所、良し悪しがありますので、例えば講義的な感じなのでだめということでもないと思います。いまの大学の授業は主に講義で、上意下達みたいな形が多いです。ですが、その中で工夫される先生がグループワークのような形式も授業の中に取り入れていくと、多分工夫される先生だからこそ、それによって学生の教育効果が上がるといふことなのではないかなと私は感じるので、じゃあどの授業でも一律にグループ学習を取り入れれば学生が学びを深めたり学びの姿勢を身に付けることができるのかと言われると、そうでもないかもしれないと思っております。

なので、いま全国の大学、つまり高等教育で、自発的・能動的な学習形態がかなり注目されているのですけれども、教員は、何のためにそういう能動的な学習形態を重要だと思っ取り組むのかとか、どうし

てそうしたいと思うのかとか、そういう視点をもっている必要があるのではないかなと思います。

渡辺 私はいま小学校の教育に関わっていますけど、主体的に社会に関わることが習慣になっていたりするような学校教育というのをやはり考えていかなきゃいけないですし、主体的に学ぶことがやはり楽しいというような学校教育をつくっていかなくちゃいけないのではないかなというのを強く感じています。また、やはり学校が一番楽しい場所、ある意味私はファミリーだと思っております。また、ファミリーがあつて、一日楽しい思いで帰ってほしいなという思いで毎日過ごしています。私の知り合いの校長先生は中学校の先生なのですけれども、やはり不登校が問題になったときに、ペア学習を取り入れただけで不登校は減ってきた。やはり子どもたちは学校の中に学ぶだけじゃなくて関わりをととも求めているのですよね。

松田 長崎先生の資料の中に「子育て塾」という記事がありました。大学では、「人生塾」のような時間が必要かもしれません。いまちょうど生活文化学科は卒論指導の時期なのですが、学生たちはみんな非常に通しが甘くて大変です。「先生もうだめです」とか学生は言ってきますが、そこを何とか乗り越えていくことが大切で、そのようなことで人生の中の大事なことを伝えていくのかなと思っております。

また、細江先生のお話の中にロールモデルがないというお話もありました。「尊敬する人はだれ？」と学生に聞くと、「お母さんです」と返ってきたりするんですね。たしかに立派なご両親かもしれませんが、非常に世界が狭いかなとも感じます。もっと世界に目を向けていくようなことが必要ではないかと思っております。私は保育者養成に関わっていますが、

やはり保育者たちもそういう視点、広い視野をもってほしい。子どもたちのモデルになる人たちです。どう生きているかというのを、保育の中で子どもたちに見せてもらいたいと思います。本当に地をほうよな仕事だったりしますが、その中で希望をもつて、やりがいをもつて子どもたちを育てていくという姿を、子どもたちは見ますし、お母様方もきつとごらんになる。

長谷川 実習訪問に行ったときも、学生に「親対応みたいな講義もあるのですか」みたいなことを言われたことがあります。現場や保育園の方でも、そういうところも新卒で入ってくる先生に求めているのかなということを感じるがありました。音楽は実技なので、一緒にやらせるときに、すごく積極的に行ける子とできない子の差が激しいということもあって、支援を試みたりしても、自分の表現をなかなか出さずとしない学生もいます。ただ、何も思っていないわけではないので、ちょっといろいろなところから突つくと出てくることもあるので、そういった面では、自分を出すのではないですが、何かそういう表現をするということの道筋を少し見せてあげるのが必要なのかな、と聞きながら思っていました。

細江 これからまさにすばらしい生活心理という心理学、心理領域というものをつくり上げていくということなので、写真真があるわけですから、つくり上げていくのはこれからのだろうと思うので、せっかくこんなすばらしい写真真があるので、努力して、それこそ先ほどお話を申し上げました夢を現実にしていくことがとても大事なことだろうと思います。

長崎 ぜひ先生方のお考えをお互いに出し合って、それこそコミュニケーション

ションですね。そういうコミュニケーションによって生活心理を創っていかれたら良いのではないのでしょうか。

塚原 ありがとうございます。一からのスタートという感じですから、先生方と共にコミュニケーションをとりながら、生活心理というものを見えるような形で発信していけるように努めたいと思います。



—「生活」を幹として 多様な枝・
葉っぱ・果実の心理学が豊かに広がる

実践女子大学 生活科学部 生活文化学科

生活心理専攻

★2014年4月スタート★
(生活文化専攻は生活心理専攻になります)

入学定員 40名

実践の「生活心理」—3つの心理学—

生活の中での心の動き

としての心理学

生活をとおした
発達・学習

としての心理学

生活を支援する

ための心理学

資格 ・実用科課程一級実用士(心理学)
・社会福祉士(心理学) ・児童福祉士

・認定心理士 ・社会福祉士
・児童福祉士(心理学) ・養育教諭

心理学の視点から 生活課題を
分析し 解決する力のある 社会人

一級実用士
児童福祉士
養育教諭
心理系大学卒業生 など

生活心理専攻では……

3つの心理学—「生活の中での心の動き」としての心理学・「生活をとおした発達・学習」としての心理学・「生活を支援する」ための心理学を学びます。生活の営みと人間の生涯発達を総合的にとらえ、社会の変化に伴う家庭経済や家族関係、ならびに心身の健康に関する生活課題について、心理学的方法を基礎として理解、考察し、生活の向上を図る能力を養います。そして、心理学の視点から生活課題を分析し解決できる、実行力ある社会人を世に送り出すことをめざしています。

II

幼児保育専攻・特別授業から

- * 特別講義「子どもの育ちについて考える」
平成25年7月13日開催
- * 特別授業(ワークショップ)「子どもの表現世界を豊かに拓く」
平成25年12月13日開催

特別講義

子どもの育ちについて考える 26
桃井 真里子 国際医療福祉大学 副学長

幼児保育研究会
——桃井先生を囲んで 44

特別授業(ワークショップ)

子どもの表現世界を豊かに拓く 54
岩間 賢 美術家・東京藝術大学 非常勤講師

ワークショップを終えて 70
井口 真美 本学生活文化学科 専任講師

<表現>の価値と未来の享受者 72
須賀 由紀子 本学生活文化学科 准教授

特別講義

子どもの育ちについて考える



国際医療福祉大学 副学長

桃井 眞里子

皆さん、こんにちは。本日はこのような大変女子教育に伝統のある実践女子大学にお招きいただきまして、心からお礼を申し上げます。

私は小児科医でございますが、これから皆さんが巣立って職業に就かれる保育士、幼稚園の先生と同じく、子どもを育てる・育む職業ですので、同類という感じがいたします。皆さんにすばらしい先生になっていただきたいと心から思っています。

今日は子どもの育ちについてお話をいたします。子どもは、体も大きくなると同時に、体の能力も発達してくる。育ちとは、能力の発達、性格の発達ですから、その中心は脳が関与します。子どもの育ちを見守り、よりよく育てることを考えるときに、脳科学の知識があると子どもの発達が分かりやすくなります。今日は、現在、子どもの育ちに関して科学がどこまで分かっているかということをお話ししてみたいと思います。

昔からの言い伝えと脳科学

「三つ子の魂百まで」とよく言われます。昔から言われていることは、だいたい本質をついており、いま一生懸命脳科学が明らかにしていることは、昔のことわざを科学の言葉で言いかえているだけのように思います。この「三つ子の魂百まで」は本当かどうかを考えていきます。それから、「氏より育ち」という言葉もあります。「氏より育ち」は本当か。自分の血筋よりも、育つ環境のほうが大事であるということわざです。これは本当でしょうか、ということが今日の話題です。

まず「三つ子の魂百まで」これをいまの言葉に言いかえてみましょう。「三つ子の」というのは数え年です。昔は生まれた時はもう既に一歳でしたから、「三つ子」というと、一歳半くらい、幼児期早期のころの「魂」で

す。魂というのは、その人の存在そのもののような、非常に深い言葉です。その人のあり方、性格も全部含めての「存在そのもの」です。これを科学の言葉に置きかえると、「存在そのもの」というのは、脳が基本的に反応するパターンのようなものです。せっかちなのか、ゆったりしているのか、温かいのか、冷酷なのか、そのような脳の基本的な反応パターンが魂です。「百まで」というのは、生涯という意味です。ですから、幼児期早期に決まっている、すなわち、生涯持続するということを表します。

一方、「氏より育ち」というのは、「氏」は血筋を意味しますから、代々おじいちゃん・おばあちゃんのその前からずっとご先祖様から伝わっている遺伝子です。「育ち」は育つ環境です。ですから、「氏より育ち」とは、遺伝子より環境という意味です。これは本当でしょうか。お父さんが数学苦手、お母さんも苦手でも、私が数学得意なのは環境のせいかなといったように、いろいろな例が考えられると思います。こうしたことを科学の言葉で置きかえるとどのような状態かを、お話ししてみたいと思います。

遺伝子とエピゲノム

まず、「氏」というのは、遺伝子のことです。だれもが、母親から一ペア、父親から一ペアの遺伝子をも

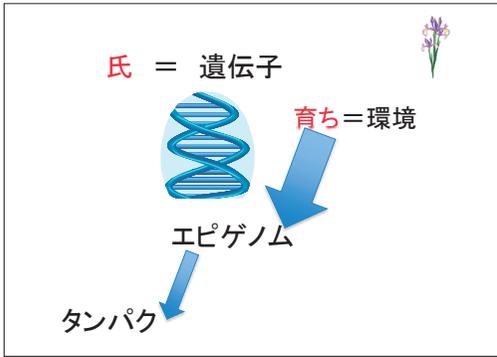


図1

らっています。それぞれ一ペアですが、兄弟は顔つきも性格も違います。一卵性双生児であれば全く同じですが、同じ父母から遺伝子をもっている兄弟でも、兄弟の顔つきが違うのは、さまざまな遺伝子のあらわれ方が違うからです。

母親の胎内の環境も含めて、育ちには環境が影響します(図1)。そして、遺伝子のあらわれ方の全体をエピゲノムといいます。最近の生命科学のトピックスです。遺伝子をゲノムといいます。遺伝子があらわれる形の総体をエピゲノムといいます。遺伝子は全て解読されて、人間の中で三万対あることが分かっています。遺伝子はいろいろな作用をします。遺伝子のあらわれ方のエピゲノムにはさまざまな環境が影響します。ですから、親からIQ一四〇の遺伝子をもっても、育ちでの環境が悪いと、果たしてIQが一四〇になるかどうか大変疑問です。このように、人は遺伝子だけで決まるのではなくて、環境がとても大事です。エピゲノムを決めてから、その人がだんだんできていきます。

遺伝子はこのように皆さんの細胞の中に全部入っていて、ヒストンと呼ばれるタンパクの周りにとぐろを巻いていて、それがたくさんあって、その周りに雲のようなタンパクがたくさんくっついていきます(図2)。一つの遺伝子の周りに何百ものタンパクがくっついていきます。そして、

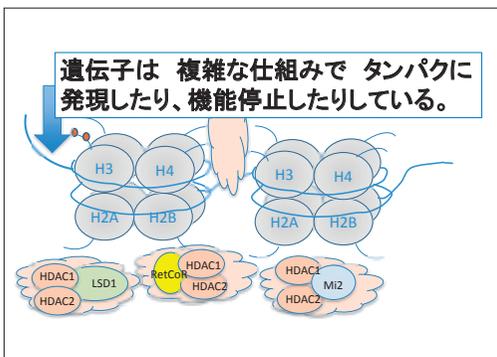


図2

遺伝子に「行け」とまれ」という具合に、いろいろな合図を出しています。合図を出している総体が、エピゲノムです。合図を出すときに、環境が大きく作用します。いろいろな合図に環境が作用することを覚えておいてください。よい遺伝子をもらっても、育つ環境が劣悪であると、大きな問題を生じます。

遺伝子をもらただけでは人間は作られていきません。遺伝子がゲノムですが、遺伝子は「行くか、とまるか」つまり、タンパクまで行き着くか、行かないかでとまるかしかありません。ゴーサインとストップサインが始終行ったり来たりします。一つの遺伝子にもゴーサインが出たりストップサインが出たり、いろいろなことをして体を決めているのです。「細胞をどんどん分裂しなさい」というゴーサインが出て、それが行き過ぎるとがんになるといった具合に、このゴーサインとストップサインがおかしくなることで多くの病気になる。糖尿病、高血圧といった生活習慣病も環境因子に非常に影響されます。このように、遺伝子だけでは物事は決まらないということがだんだん分かってきました。

こちらは、ゴーサインであればタンパクがあらわれるし、ストップサインであればしばらく遺伝子は眠っているという図です(図3)。

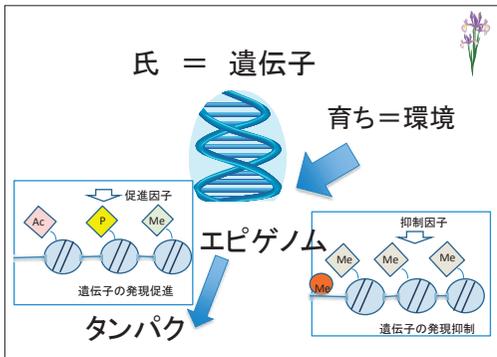


図3

エピゲノムの形を決める環境因子

遺伝子のゴーサインとストップサイン、つまりエピゲノムの形を決める環境因子はたくさんあります。例えば病気になるって手術を受けるとき、体は大きなストレスを受けます。このストレスが遺伝子のゴーサイン、ストップサインに非常に影響します。一歳半ごろに骨折でしばらく入院したら、その後に言葉がだんだん失われてくるといったケースもあります。それは脳の機能に変化が起きるほどのストレスが与えられたからです。薬や感染症もストレスを与えますから、遺伝子に大きな影響を与えます。

だれもが感染症にかかったり、けがをしたりしますから、図の左側のほうの要因はあまり制御できないのですが、図の右側の要因はわれわれの制御範囲です(図4)。例えば食事、どのようなものを食べるかは、遺伝子のゴーサイン、ストップサインに非常に影響します。

基本的に影響するのは食事です。ですから、食事はきちんと食べましょう、バランスよく食べましょうといわれますが、それがなぜかというのと、太り過ぎは糖尿病になるとか、病気になるのを防ぐことはもちろんですが、それよりもっと大事なものは、遺伝子のエピゲノムを最善の形で作

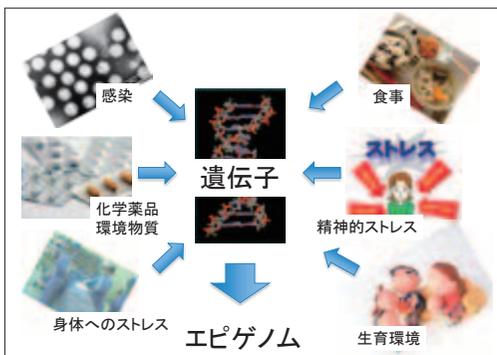


図4

るのに、食事のバランスは非常に重要なのです。糖類や脂肪類ばかり食べていると、遺伝子のあらわれ方が変わり、当然脳も変わってしまうのです。

それから、慢性のストレスがあるとうつ病になるとよく言われます。それは、慢性のストレスで遺伝子のあらわれ方、エピゲノムが変わってしまつて、脳の中のいろいろなタンパクの組成が変わることによつてうつ病になってしまいます。よく心の病といいますが、心というよりむしろ脳の病です。ストレスはうつ病のように脳の中の遺伝子を変えてしまうことによつて人を病気にします。ですから、慢性のストレスは極めてよくないのです。

それから、子どもにとつては生育環境です。これは遺伝子のあらわれ方を本当に強く変えてしまいます。小さければ小さいほど、生育環境は遺伝子のあらわれ方を変えます。ですから、親がどれほど優秀でも、育て方が悪ければ遺伝子のあらわれ方が変わります。脳の中のタンパクをものすごく変えてしまい、いろいろな問題を引き起こします。

このように遺伝子のあらわれ方に大きく作用するのは、子ども時代からの食事、ストレス、それから、育てられる環境です。不安のない環境、それから、安心感・愛情があるか、これは遺伝子をよく表すのにとても大事だということが最近分かってきました。

親からの環境の影響

その影響は、例えば、親から子どもへも影響します(図5)。受胎するときの母親の栄養状況も大きく関わります。ダイエットをして低栄養で妊娠すると、子どもは逆に大きくなってから高血圧や肥満、糖尿病に

なったりします。母親の栄養状態が受精卵に非常に影響します。子どもは病気のあらわれ方、遺伝子のあらわれ方を受精卵のところで決めてしまふのです。親の栄養状態が胎児の時に遺伝子のエピゲノムを決定づけるため、子どもにいろいろな問題を起こします。

一方、妊娠時に母親が太り過ぎだと、栄養過多状態が受精卵の遺伝子のあらわれ方を決めてしまつて、やはり、極端な肥満や糖尿病になりやすくなります。

このように、妊娠中の母親の栄養状態は、子どもが育つてからの病気に非常に影響するので、とても大事なことです。

では、父親は関係ないのでしょか。最近の研究では、受精時に父親が肥満だと、理由ははっきりしないのですが、生まれる女兒は糖尿病になりやすいという結果が出ています。女の子の受精卵に影響しやすいことが分かっています。

このように、親の栄養状態が受精卵の遺伝子のあらわれ方を決めます。特に母親は、妊娠中、栄養のバランスに気を付けなくてははいけません。正常な体重で生まれた赤ちゃんでも、その後の人生にまで影響してしまうのです。これは遺伝子のエピゲノムがこの段階で決まってしまうということの意味しています。遺伝子のエピゲノムのあらわれ方に栄養は

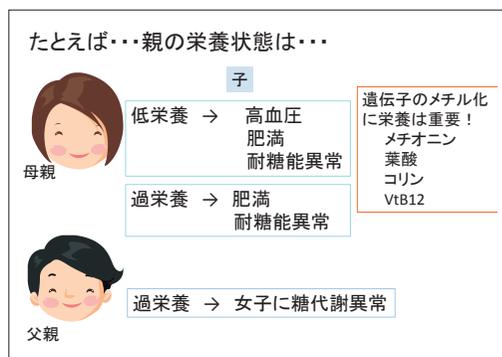


図5

すごく大事です。脳の仕組みにもとても影響します。妊娠している母親には、ぜひ、保育の専門職として、コンビニのパンやおにぎりばかり食べないで、栄養をきちんと考えることをアドバイスしてあげてください。

行動特性の決定は「氏より育ち」

さて、脳が人間の育ち・発達には最も大事ですが、ゲノムとエピゲノムについて、小さい子どもの脳ではどのようなことが起きているかを話してみよう。

これは非常に有名な実験ネズミの研究です(図6)。個体の行動特性、例えば落ち着いた行動をするのか、いらいらした行動をするのか、そういう行動特性の決定は、遺伝子よりも環境であることを証明した実験です。最近十年以内にカナダの脳科学の研究グループで行われた実験です。どんな実験かを詳しく説明したいと思います。

ラットの親子が対象です。ラットには子どもをよく世話する家系と、全然世話しない家系があります。人間と同じです。ラットの子どもの世話というのは、なめる、背中に乗せてあやす、という行為です。人間でいうと、なでてあげるとか体にタッチしてあげる、そういうことをよく

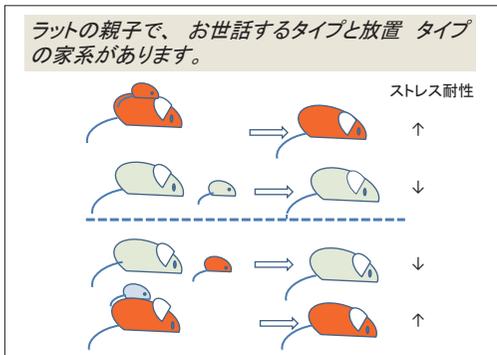


図6

やる家系の母親は、当然同じ遺伝子の子どもを産みます。次にそうして育った子どもが大人になると、やはり、よくなめて、よく背中に乗せてやる母親になるということは前から分かっています。いかにも遺伝子的でしょう。いい遺伝子をもった母親に育てられた子は、当然その遺伝子も持っているから、いいお母さんになります。

一方、あまり面倒を見ず、放っておくタイプの母親もいます。背中に乗せると、嫌がつて、投げ出してしまふ、いわゆる放置型の母です。放置型は放置型の遺伝子をもったラットを産みます。それで、育てますから、ひとりで遊んでいます。そうすると、この子どもは放置型のお母さんになる。これも前から分かっていたことです。

ですから、いい遺伝子を受け継いでいけば、いい母親になる、悪い母親の遺伝子を受け継いでいけば、悪いお母さんになる。当然そう考えられます。

でも、本当にそうなのだろうか、ということ、次のような実験を行いました。子どもを生まれてすぐに交換します。そして、放置型のお母さんに面倒見型のお母さんの遺伝子をもった子どもを育てさせました。そうすると、せっかく面倒見型の遺伝子をもっていたのに、子どもは放置型のお母さんになってしまったのです。次に、面倒見型のお母さんに放置型のお母さんが産んだラットを育てさせると、放置型の子どもを背中に乗せて、一生懸命になめて育てました。すると、本来放置型の遺伝子をもっているはずの子どもは、よく育てる面倒見型のタイプの大人になったということです。

これは、脳科学では非常に有名な論文です。これが何を意味するかというと、要するに、「氏より育ち」ということです。遺伝子より、よ

く面倒を見て育てるといふ行動の形は、育つ環境に一〇〇パーセント依存したことを証明した実験です。

ストレス耐性も後天的

この実験では、ストレス耐性についても調べました。ストレス耐性というのは、ストレスがあるとすぐに泣いてしまう子どもと、少しぐらいのストレスではびくともしないような落ち着いた子どもと、いろいろな性格があります。ストレス耐性が低いということは、ちょっとしたストレスでめげてしまう。ストレス耐性が高いということは、ちょっとしたストレスではびくともしない。何とかなるさと思つてぐつすり寝てしまう、というようなタイプです。どちらのほうが生きて自分の能力を発揮しやすいかという、当然ストレス耐性が高いほうが生きやすいですね。明日の試験どうしようといつて手につかなくなつてしまい、結局勉強できなくて、夜も一睡もできないというのではつらいですね。でも、ストレス耐性が高いと、勉強途中だけいいや、寝てしまおうということができます。そしてぐつすり寝て、翌日は実力以上發揮、というほうが得です。ですから、生きていくためには、つまり、自分の能力を一〇〇パーセント以上生かすためには、ストレス耐性は人間の脳機能のなかでもとても大事なことです。

ストレス耐性は、頭の中にあるシグナルの受容体というタンパク質で決まります。シグナルを受け取るタンパク質受容体がたくさんできていると、ストレス耐性がある。少ししかできていないと、ストレス耐性が低い。このようなことが分かっています。

この育つた子どもたちのストレス耐性を遺伝子で見ると、どっし

りした母親、よく面倒を見る母親はストレス耐性が高かった。面倒を見ない、自分のことにかまけている母親はストレス耐性が低かったのだから、自分のことにかまけている母親はストレス耐性が低かったのだから、ストレス耐性の高い遺伝子をもらつていけばストレス耐性が高いはずなのに、悪い環境で育てられたらストレス耐性が低くなりました。ストレス耐性が低い遺伝子をもっているラットが、いい環境で育てられたら、大人になってストレス耐性が高くなった。こういうことが分かっています。実際に調べてみると、脳の中のストレス耐性に関連したタンパクがたくさん作られていたということを示した研究です。

このように、基本的に大事な性格とか特性については、遺伝子のあらわれ方が環境によつて大きく左右されることが明らかにされたのです。人間ではこういう実験はできませんが、人間における実証研究としては、小さい時にご両親が亡くなつて別の育てられ方をしたりした方の研究などがあります。

大切な乳幼児期

大事なことは、このような交換の効果が出るのは、生後どのくらいまでのことかということです。すると、ラットでは、生まれて一日という結果でした。二日目以降の交換では、遺伝子どおりの性質の子どもとなりました。生まれてたつた二十四時間、一日です。論文では十二時間と書いてありますが、つまり、一日以内にこういう交換をして、いい環境に置いてあげるとよくなる。でも、一日を過ぎてしまうと、やはり悪い遺伝子をもつていたら、いくら育てても悪いお母さんのパターンになつてしまったということです。

ラットの一日が人間のどのくらいに対応するのはよく分かっているのですが、少なくともこの実験から言えることは、生後早期の生育環境をよくすることの意義です。遺伝的に面倒を見ない素因をもった子が、面倒を見る脳機能に変わったのです。変わったのは生後早期の時点である、ということが重要です。

この結果から分かったことは、脳の遺伝子があらわれるエピゲノムは環境で本当に変わる、そして環境が変わったら、その後ずっと一生そうなります、ということですよ（図7）。全部の遺伝子がそうである、とは言えないですが、性格に関わるものはそういうものが多いのです。それから、変わるには臨界期——ここまでならば環境が影響するけれども、これ以降は環境が影響しませんというライン、それが臨界期です。脳の変化が起り得る限界の時を臨界期といいます。変わり得るにはラットでは一日、人間では分かりませ

んが、幼児期早期でしょう。ですから、小さいころに強い虐待を受けると、その後、問題をもった性格は本当に変えるのに苦労します。幼児期の虐待は人間の生涯にわたって大きな傷跡を残すのです。幼児期の遺伝子発現パターンは生涯持続します。

虐待を受けたお子さんの例で、大きな事件が十年以上前にありました。ある宗教集団で女性を集めて働

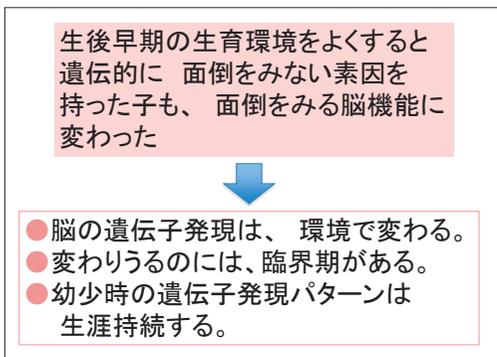


図7

かせて、その子どもを集めて、親が子どもの面倒を見ないで、子どもは子どもだけで面倒を見させた。十歳ぐらいの子どもに赤ちゃんの面倒を見させて、赤ちゃんを段ボールの中に入れて育てさせたという事件です。こうして育った子どもを二歳ぐらいの時に診察したことがありました。遮断されて、抱っこされずに育っていますから、自閉症の症状を示していました。二年たってもそれは変わりませんでした。臨界期のとても大事な時期に、親から必要な、親でなくてもいいのですが、必要な愛情をくれる方から脳の発達に必要な情報が入らなかったのでしょうか。そして、その後それは変えられなかった。少しはよくなりましたが、本質的には変わらなかったという事例がありました。

そういうことをこのラットの実験は示しています。ですから、医学的にも遺伝子の研究的にも、幼児期までは非常に大事であることがはっきりと分かるのです。

もちろん、全部が全部この時期に決定されるというわけではありません。全部幼児期に決まってしまうたら、その後の努力は意味がなくなってしまう。ですから、全部と勘違いしないでください。その後の青年期から一念発起して努力する、というのも非常に大事です。これも遺伝子の影響があります。でも、基本的な行動や情動の遺伝子のあらわれ方は幼児期早期に決まるので、ここが悪く決まってしまうと、その後その方は苦労に苦労して一生懸命変えようとする。この苦労は、ものすごく変えるのが大変だということを意味しています。それから、非常に不安になりやすいとか、怒りやすい、このような情動・行動も遺伝子で決まりますが、遺伝子のプラスアルファのエピゲノムを決めるのに、環境要因が非常に大きいのです。ですから、乳幼児期の教育環境、育て

る家庭環境は大事です。基本的な人間の行動様式に大きく影響します。基本的な行動様式は、不安が強いと能力を発揮できません。先ほど言ったように、ストレス耐性が低いと、いくらIQが高くても、不安で仕方なければ何もできません。そのようなことがだんだん脳科学で分かってきたのです。

受胎から出産後の脳の発達過程

では、次に幼児期に、特に乳幼児期に頭の中で何が起きているかをご説明したいと思います。これを知っておくと、どのような対応が乳幼児期に大切なか、自然に分かってくるのではないかと思います。

出産前の胎児、出産後、赤ちゃん、幼児期、それから、少年期と見ていきましょう。図の曲線は、それぞれの時期の神経細胞の量を示します

(図8)。出産前に赤ちゃんの神経細胞がわーっと増えて、必要ないものは消されて、必要なものだけ残ります。頭のほとんどの神経細胞は出産前にできてしまいます。ですから、赤ちゃんは頭でっかちです。頭が重たいので、よく頭から転びます。頭でっかちなため、出産の時、すごく苦労するのです。

頭が大きいのは、生まれる時に、大人になるまでに必要な神経細胞が全部できて生まれるからです。それ

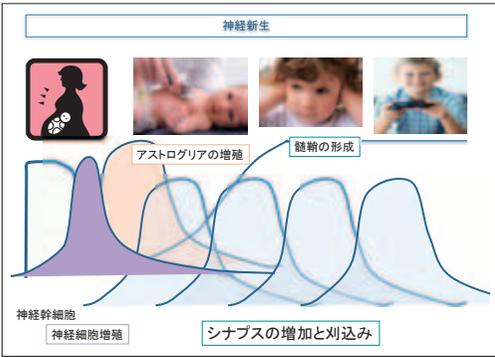


図8

ならば、例えば生まれた途端にしゃべり始めてもよさそうですが、そうならないのは、神経細胞と神経細胞がつながっていないからです。神経細胞が神経細胞とつながらないと頭は働きません。つながるのに必要なのがシナプスで、シナプスとはつながるコンセントのようなものです。神経細胞と神経細胞がつながる場所をシナプスといいます。簡単な言葉ですから、覚えておかれるとよいでしょう(図9)。

それから、生まれた後にできてくるのが、シナプスと神経の線維を取り巻く電線です。コードの周りを何かで巻いていないと、電線がむき出しとなり、いろいろなところに電気が流れてしまいます。触ると感電しますし、いろいろなところに電気が流れたら、電気器具に電気が行きません。ですから、いろいろな電気が流れないように電線のコードを巻いてあります。

髄鞘は、神経の線維、ほかの細胞につながりますよという神経の細胞の周りを巻いて伝達を速くする、高速スピードにするためのタンパクです。高速スピードにするためのタンパクは、生まれてからだんだんできていきます。ですから、赤ちゃんの脳はつながったとしても緩くつながっている。大人になればなるほど、速くつながる。訓練すればするほど速くつながります。

このように、生まれる前に神経

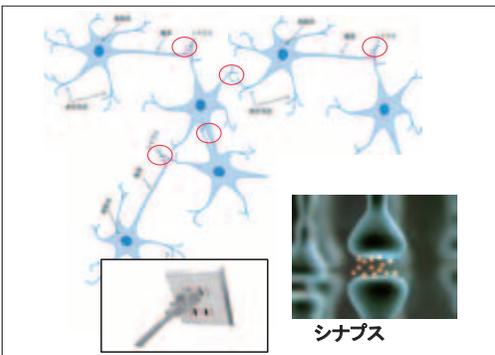


図9

細胞ができてしまうのでとても大事です。胎内で何か問題があると神経細胞が十分できず、その後はあまりできませんので、生まれる前に神経細胞をきちんと作っておくだけの栄養が非常に大事なのです。

生まれた後も大事です。この時期は、神経細胞と神経細胞をつなぐためにタンパクが非常に大事になります。生まれる前と生まれた後は、理由は違いますが、ともに大事な時期です。

赤ちゃんの脳の中の状態

では、神経細胞が赤ちゃんの頭の中でどんなふうにつながっていくかを簡単にご説明したいと思います(図10)。神経細胞と隣の神経細胞へ伝わって、「ミルクが欲しいな、手を伸ばさなきゃ」とか、「おなかがいいたな、冷蔵庫あけなきゃ」といった指令が行きます。つながりがシナプスです。ちょうどコンセントのようなものです。コンセントがたくさんあって、皆さんの脳が働いています。これがどのくらいかというところ、一つの神経細胞に千〜一万くらいつながっています(図11)。いろいろなつながり方をして、皆さんが勉強したり、本を読んだり、映画を見たり、話したり、楽しんだり、そういった脳の全ての機能が、シナプスを介して行われているのです。

このシナプスには、興奮性シナ

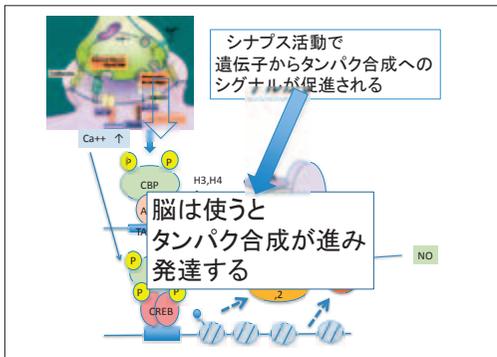


図10

プスと抑制性シナプスの二つがあります(図12)。「行け行け」だけでは、神経系はうまく働きません。皆さんも生きていくうえで、行動を抑制する心はとても大事でしょう。いまこれを言っただけとはいかないとか、そういう抑制は人間にとっても大事です。脳の中で最も大事なのは、この抑制です。「行くのをやめろ」「あまり興奮するな」、興奮するのを落着け落着けと指令を出すニューロンは実はすごく大事です。ニューロンというのは神経細胞のことです。興奮性と抑制性の二つがバランスよくできて、皆さんのバランスのいい脳ができています。

興奮性シナプスと抑制性シナプスが多様な神経伝達物質を出して、それぞれの受容体に結合して、神経が機能しています。さまざまな役割をなすものが、それぞれできる時期と場所は、赤ちゃんの頭の中で違ってきます。

そして、この神経のコンセント、

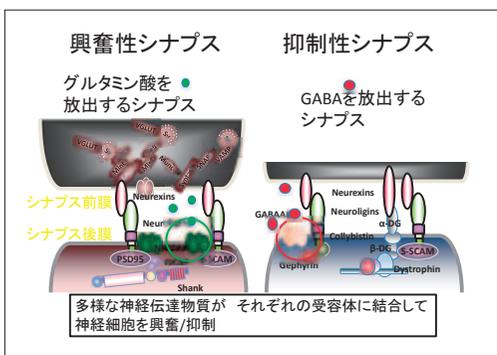


図12

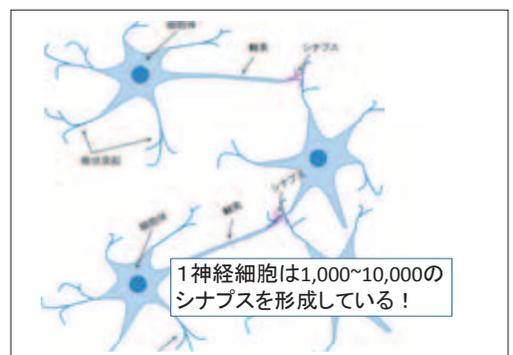


図11

シナプスは、刺激がたくさん行っているとところにはたくさんできません。刺激が全く行かないところは、いったんできたコンセントが消えていきます。コンセントが消えるばかりではなく、その先の神経細胞も消えてしまいます。つまり受け取らないと、細胞は自分には要らないのだと、用を果たさないのだと消えていってしまいます。ですから、頭を使うのが非常に大事なのです。頭を使うとどんどんコンセントができて、その先の神経細胞も生き生きするのですが、あまり刺激をあげないと、シナプスが消えてしまい、その先の神経細胞も消えてしまうのです。せっかく赤ちゃんが生まれる時に神経細胞がたくさんできていても、その後刺激しないと、その神経細胞は消えてしまうのです。ですから、頭を使う、逆に言うと、赤ちゃんにいろいろな刺激を与えるということが非常に大事です。神経細胞を生かしておくために、いろいろな刺激、触る刺激、音の刺激、いろいろな刺激を与えることは、赤ちゃんのせっかくできた神経細胞を生かすためにすごく大事です。そのことも最近分かってきました。

視覚機能の臨界期

「いろいろな」というところが大事です。いろいろな刺激でなければ死んでしまう神経細胞がでてきます。ですから、年少であればあるほど、いろいろな刺激を与えるということはすごく大事です。

いろいろな刺激を与えるのが非常に大事であることを示した、有名な実験の例をご紹介します。

これは、脳の中にある視覚領域という神経細胞がしっかりと働いて手をつなぎ合うからです。目とその神経細胞の間にしっかりと連結ができて、母親の顔が見えた、哺乳瓶が見えたというのを感じるのです。ここで感じないと、目でいくら見ても見えたことになりません。「ものを見る」というのは、脳が見るのです。

これは猫の実験ですが、最初赤ちゃんの時、左目で見たものは、右の脳半球と左の脳半球の両方の神経細胞に刺激が行きます(図13)。それがだんだん成長してくると、左目で見たものは、右の脳神経細胞にだけ刺激が行くようになります。これで赤ちゃんの視覚は完成します。いったんつながって、要らないものは消えていって、こうなります。最初はやみくもにつながって、やがて整理されてきて、完成、成熟し、きちんと見えるということになります。これが赤ちゃんの目の発達です。

猫の非常に小さい時の数カ月間、片目を見せないようにします。すると、片方の目しか刺激が行きませんから、この目の覆いを除いても、赤ちゃんの早い時期にこちらの目からのつながりができなかつたために、いくら見てもここはシナプスがたがらなくなってしまうです。ですから、赤ちゃんの小さい時に片目を遮蔽すると、弱視になったり、その目が見えなくなったりします。目では見えているのですが、眼球は機能し

視覚機能の臨界期

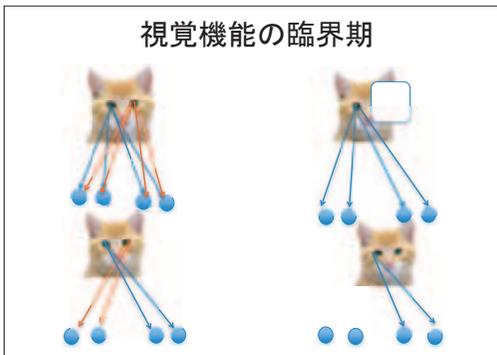


図13

ていても、眼球で見る脳が機能しなくなるのです。このように、赤ちゃんの時にはつながらなければいけない時期があります。その後いくから見えるようになって、もう時期を逸してしまおうと、それから後はできない。これが基本的な脳の臨界期です。こういう臨界期というのは、特に感覚系で非常に顕著です。

未熟な脳のシナプス回路と刈り込み

赤ちゃんの時の脳は、混乱の極みです。一つの神経細胞からあらゆる神経細胞に、シナプスが出ています。赤ちゃんの脳では、一つの神経細胞が興奮すると、わーっと興奮が伝播します。おなかがよくと、ギャーッと泣いて、手足をばたばたさせます。本当はミルクを自分でゴクゴク飲みたいのだけれども、神経細胞はまだ手だけに刺激が行かないので、おなかですいたという刺激が、全部の神経細胞にばーっと行くほどのつながりを作ってしまうのです。ですから、赤ちゃんは、ばたばたとしているのです。

これが、やがてバラエティーのある多様な刺激をいろいろ受けているうちに、だんだん使ったところは残って、使わないところは消えていきます。それが脳の基本方針で、赤ちゃんのうちに使ったところは残り、使わないところは消えて、だんだん要らないものはそぎ落とされ、成熟したシナプスのパターンとなります。わーっとつながるパターンが赤ちゃんです(図14)。それが成熟して、必要なところがたくさん残ったのが皆さんの脳です。赤ちゃんの時はいろいろなものがたくさんできて、余分なつながりがたくさんできて、そして、成熟するにつれシナプスが消えていきます。これを刈り込みといいます。木でも、あまり野放

図に枝を出しておくとも果実をつけません。花でもそうですが、要らない枝を切つてあげると花をたくさん咲かせるということがあります。神経は樹木と全く同じで、余分なシナプスが残っていると、刺激を分散してしまい、うまくいきません。しかも刺激の伝達が遅くなってしまいます。ですから、必要なところだけ残るのが、成熟というものです。逆に言うと、赤ちゃんの頭の中ではすごいことが起きているのです。

一斉にシナプスを作る時期です。作れないと刈り込みのしようがありませんから、この時期がとても大事です。それから、刈り込んでいく時期もとても大事。この二つのことが子どもの頭の中で年齢別に起きているのです。子どもの頭の中は激変です。

脳の成熟は、場所によって違いますが(図15)。子どもの脳で最初に成熟するのが視覚領域です。聴覚もそうですが、感覚領域です。急激

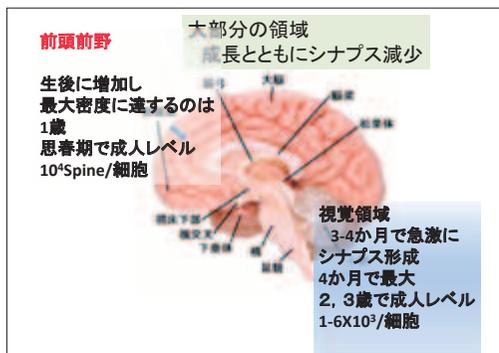


図15

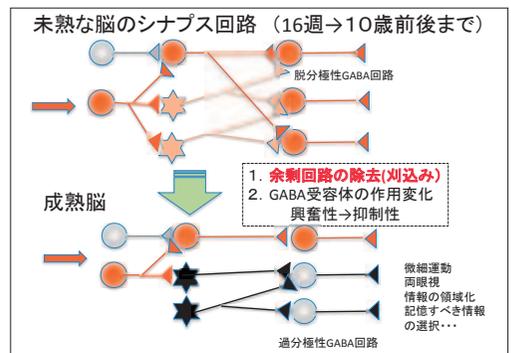


図14

にシナプスができて、四カ月、きちんと追視をして、上も下も見てというような時期です。二〜三歳で刈り込みが行われ、成熟レベルになってきます。視覚・聴覚は成熟が早期にすすみます。一番脳の中で成熟が遅いのは、人間にとっても大事な前頭前野といわれる高度の知能の領域、善悪の判断、それから、いまやっつてはいけないということを抑制する判断の領域です。また、集中するということを司るのも脳の機能で一番大事な前頭前野です。前頭前野、考える脳の一番大事なところですよ。ここが成熟するのは思春期が終わるころで、成人レベルになります。その後が増加して、つながりがたくさんできて、一歳ごろの乳児期は、つながりができすぎて頭の中が混乱状態となる。それがだんだん刈り込まれて、思春期を超えるころに成人レベルに達します。この刈り込まれる時期に多様な刺激がないと、うまくバランスよく刈り込まれないのです。

例えば、ゲームをやっている男の子の写真がここにありますが(図16)。この大事な時期にビデオばかり見ていたり、ゲームばかりやったり、つまり一種類の刺激ばかり長時間前頭前野に行きますと、そこは確実に残るのですが、ほかのところが消えていってしまう。ですから、脳が激変していてシナプスがたくさまできてうまく刈り込まれる時期に、偏った刺激を脳に与えると、その他

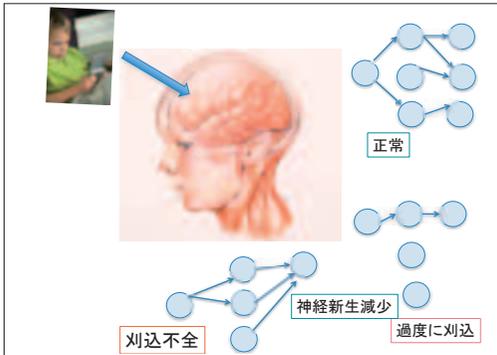


図16

のシナプスがうまく成熟しないという結果になります。携帯とかテレビゲームとか、一つの、つまり狭い範囲しか使わない脳の使い方をしていると、ほかがうまく刈り込みが行われない。つまり脳が成熟しないということになります。特に思春期は前頭前野のシナプスが刈り込まれる重要な時期ですから、幼児期からテレビゲームばかりしている子と思うと本当に心配になります。この時期にうまくいい刺激、多様な刺激をたくさん与えて、いい刈り込みを行わせないと、二十歳になってバランスよい刺激を与えても、神経の臨界期を過ぎてしまい、取り返しがつきにくいのです。取り返しがつかないというのではないのですが、取り返しにくいということになります。このこともぜひ知っていた方がいい、赤ちゃんの時だから大事なのではなく、人間の行動にすごく大事な前頭前野は、思春期が終わるころまで成熟・発達の途中であるというふうに理解していただくと、乳幼児期のみならずその後もとても大事だということがお分かりになると思います。

神経細胞は若い脳ほど新生する

さて、生まれる前に神経細胞は全部できてしまっていると先ほど申し上げましたが、十年ほど前から、生まれてからも神経細胞はできるといふことが分かってきました。最近のホットトピックです。それを少しお話しましょう。

多分私の頭の中でも新しい神経細胞がまだ、皆さんよりはすごく数が少ないとはいえ、作られています。年をとるほど新しく作られる神経細胞がぐっと減っていくことも分かっていますので、皆さんの頭の中ではまだ新しい神経細胞が、増えていくのではなく、作られていく

のです。

神経細胞が作られることを神経新生といいます。神経新生は環境に非常に影響されるということが、最近の研究ではっきり科学的に分かってきました(図17)。神経細胞のもとになる細胞を幹細胞といいます。神経に幹細胞があつて、それが頭の中にずっと残っています。皆さんの頭の中で、この幹細胞が一、二、三分裂すると神経細胞になります。

例えば皆さんの記憶を司る、頭の奥のほうに海馬という名前の場所がありますが、そこは記憶の神経細胞が密集している場所です。そこでは皆さんの頭の中でも一日あたり一万个ほどがどんどん作られています。よく作られても、そのうち機能するのは半分以下なのですが、この神経細胞を新しく作るために大事なのが睡眠ということが分かってきました。それから、年齢です。私より皆さんのほうがたくさん作られているということですね。年齢が若ければ若いほど作られています。ですから、小さい子どもは大事です。それから、神経活動も、使えば使うほど作られます。多様な刺激も大事です。種類ではなくて、いろいろな刺激を加えることで神経細胞が新生します。更に、大事なのが運動です。運動は、バランスよく頭を使う、非常にいい方法です。運動には小脳が大事ですが、大脳皮質もとても大事です。それから、基底核というバランスを司る場所も大事

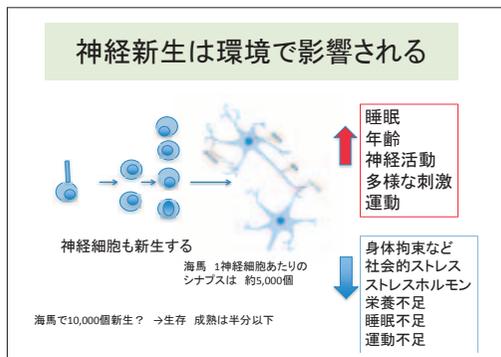


図17

です。まさに運動は体にとってプラスというだけでなく、脳全体にプラスになる活動です。ですから、若いうちほど運動することは、この神経の新生をよくするのにとても大事です。逆にこの神経が作られなくなる、もういいや、作るのやめようとなるのは、体を拘束したときです。捕虜とかそういう状態にする。運動の正反対ですね。ですから、ご年配で徘徊するからといって体を拘束すると、これはやはり脳に非常に悪いと思われまふ。それから、ストレスホルモンがたくさん出ると、神経もできなくなります。栄養が足りない子ども、睡眠不足、これらもものすごく神経の新生を悪くします。まさに環境です。環境が神経新生の遺伝子を制御して、よくしたり悪くしたりしているのです。若ければ若いほど、つまり子どもであればあるほど、この環境は大事だということが言えます。

大切な睡眠と運動(遊び)

最近分かってきたのは睡眠の重要性です(図18)。夜型で夜中の一時とか二時に元気になるという方が結構いらつしやるでしょう? それは悪くはないのですが、睡眠は脳にはすごく大事です。睡眠不足はお肌の大敵といって気にされますが、睡眠不足は脳の大敵なのです。年が若ければ若いほどです。お肌の大敵というのは、皮膚の新しい細胞がで



図18

くなるのでお肌の大敵ですね。ところが、神経新生も睡眠不足だと悪くなるのです。これは動物実験しかできないのですが、眠りを妨げた動物で見ると、記憶に大事な海馬というところの神経細胞が新しくできなくなっています。

十歳以下だと、九時間以下の睡眠の場合には学習能力が明らかに悪くなるということが分かっています。それは海馬や何かの学習に大事なところの神経の新生が悪くなるのが原因です。十歳以下では、九時間以下の睡眠だと明らかに問題があります。九時間以上の睡眠で明らかに高くなるのは、コミュニケーション能力、読み書き能力、理解力、計算力です。MRIなどの画像で確認すると、九時間以上寝た子と九時間寝ていない子を調べると、記憶に大事な海馬のサイズが一〇パーセント以上違うという結果が出ています。

このことは、ほかの動物でも共通なのです。小さい時にどんな音かしてもぐっすり寝ている犬は、大きくなっておっとりとした落ち着いた犬になるとよく言われますが、本当にそのとおりです。以前きよろきよろ動きまわっていた犬を娘がいたく気に入って、それを手に入れたのですが、本当に神経質な犬だったことがあります。やはり犬でもどしっと寝ているということは脳の発達に影響するのです。生物は全部同じです。しっかり寝ること、いい睡眠をとることが大事です。睡眠というお金のかからない生活習慣は、脳の発達、神経新生にとっても大事だということをしつかりと理解してください。

それから、運動、子どもでいえば遊びですが、これも重要だと示すラットの実験があります(図19)。実験動物を狭い箱に一匹入れて置いておいたのと、大きな箱にいろいろな遊具を入れて複数で飼ったのと比べま

した。すると、明らかに広いケージで遊び道具を入れて複数で飼ったほうが、海馬の神経の新生が増えたという実験結果があります。この中で、運動しただけではなくて、恐らく頭も使ったのです。けんかしなようにとか、あるいは、けんかしたりとか、いろいろと頭も使ったでしょう。脳全体を使ったのです。狭いところに一匹でいると、あまり脳を使いようがなくて、一匹でぐるぐる回っていただけでしよう。運動をしても、脳の全体の活動にはなっていなかったわけです。つまり運動は、子どもでは遊びですが、多様な刺激をするような多様な遊びをすると、脳血流も増えます。たくさん遊んだ後、睡眠の質もよくなったのでしよう。そうすると、さまざまな影響があつて神経新生がよくなります。このように、運動、遊び、睡眠、しかも多様な、一種類だけではない刺激は小さい子どもの成長にとっても大事です。

まとめ

最後にまとめておきましょう(図20)。今日は遺伝子とエピゲノムというお話をしましたが、神経は赤ちゃんの時にたくさんできて、うまく減って成熟します。その過程の赤ちゃんの頭の中では大激変が起きます。激変が起きていますから、時々二歳ごろ、何が何だか分からなくなつてパニッ

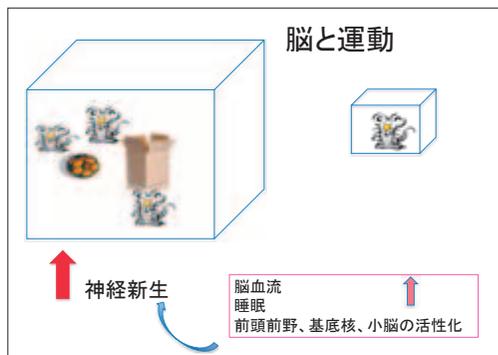


図19

クになって大泣きするようなことも
あります。ただ、そういう多様な
質のいい経験——「多様な」とい
うところを強調したいと思いますが、
バランスのよいシナプスの残り方
をすることによって、いろいろなこ
とに対応できる脳を残すことがで
きます。それぞれの方の知能を最
大限発揮する人生を送るには、い
ろいろなことうまく対応する能
力をつくらないと、社会で評価さ
れたりうまく生きていくことがで
きません。そのような意味で多様な刺激にうまく対応できる脳を作る
ためにも、生活環境、睡眠、運動、遊びが、頭の中をうまく作るのに
機能しているのです。

昔は本当に貧しいなかで行われた子育てですが、子どもが受けるい
ろいろな人や環境からの良い刺激はたくさんありました。いまの社会で
は、これは非常に少なくなっています。食事もコンビニ的ですし、睡眠
も少なくなっている。こんなところは、いまは子どもが育つのにマイナ
スな環境がたくさんあります。そういう意味で皆さんの役割は大変大
きいのです。

脳の男女差について

最後に、学生の皆さんは全員女性ですので、男女の脳の違いを少し

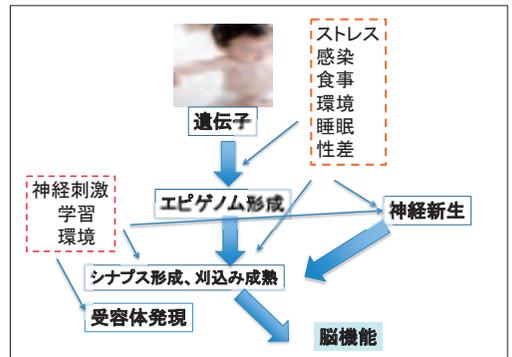


図20

ご説明しておきます(図21)。

脳の男女差はあるか。これはあります。体も男女差がありますから、
脳だけ男女差がないわけはありません。随分違います。例えば脳の大き
さも違います。体が比較的小さい女性は、一般的に脳はぐんとコン
パクトであるというふうにいわれています。それから、脳の右半球と
左半球を結ぶところを脳梁といいます。少し形が違います。それから、
あたりが太くて、女性は後ろのほうが太い。少し形が違います。それから、
シナプスの刈り込みは、男の人のほうが遅く、思春期後までのんびり
と成熟します。女性のほうが早く成熟します。脳の能力も男女差が一
定程度あります。空間回転処理のような方向感覚は、男性のほうがう
まく処理できます。言語能力は女性のほうがいいといっています。言語処
理能力は、女性は右左両半球ともよく使い、男性は片方しか使ってい
ないといわれます。一番違うのは、
女性の脳は安静時に脳血流が多く、
安静時も車のエンジンがかければな
しのような脳であるというふうにい
われます。脳血流があるという
ことは、脳が常に働いているとい
うことです。男性の脳は、ぱーっと
働いてストップ、エンジン切って、
ぱーっと働いてストップ、エンジン
切って、のような脳の働き方をし
ているらしいんです。脳の働き方が
違うのですね。



脳の男女差？



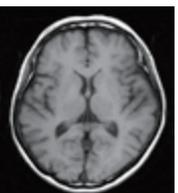
1,450g

白質の割合++
脳室>

脳梁 中部++

シナプス刈込
遅くまで

空間回転処理
能力



1,300g

灰白質の割合++

脳梁 後部++

シナプス刈込
早く成熟

両側半球における
言語処理能力++

安静時の脳血流量

図21

このように、男女は脳の働き方、特性が違うのです。これからの社会のなかでは、女性の考え方や行動パターンが強く入ってくるのが、男性脳だけでできた社会ではなくて、女性脳も入ってできた社会であることが、社会をよくするうえでとても大事です。これから巣立つ女性の皆さんへ、ぜひ女性脳の特徴を生かして、すばらしい職業人になっていただきたいと思います。

【学生たちの感想より】

・心理学の授業で子どもの育ちは遺伝と環境の相互作用によると学んだので、今回の講義でのマウスの具体例を用いた説明はとても分かりやすく、納得して聞くことができました。幼児期の基本的行動特性は大人になってからもあまり変わらないということですが、例えば、優しい子に育てて欲しい、と思うときに、親は具体的にどのような育て方によっていけばよいのか、気になりました。

(幼児保育専攻 1年)

・今回の講義で、赤ちゃんには母親に限らず、だれかからの愛情が必要なのだと学びました。赤ちゃんに対しての愛情は母親のものが絶対と思っていたのですが、母親でなくてもよいことを知りました。ということは、保育者になりたい私にとっては、赤ちゃんにたくさん愛情を注がなければいけないということになります。子どもの育ちというのは、保育者、教育者が大きく関わってくるので、この意識を忘れずに、これからの勉学に励んでいきたいです。

(幼児保育専攻 1年)

・「エビゲナム」や「シナプス」など、やや専門的な用語が出てきたりしたが、要するに、幼児期からきちんと愛情をもって子どもを育て、規則正しい生活を送ることが、脳にとって非常に大切なことだという話であったと思う。小学生のころはうんざりするほど規則正しい生活をしなさいと言われてきた。早寝早起き、バランスの良い食事、運動、睡眠……。当時は、食事はきちんと三食とじていたし、早寝早起きも毎日していた。しかし、だんだん成長するにつれて夜更かしをして、朝起きるのが遅くなってしまったり、それに伴い、一日三食から二食の生活が普通になってしまい、どんどん不健康な生活になってしまっている。本来であれば、幼少期からの生活習慣を継続させなければならぬが、それを弱く生活をする人が多くいるのが現実であろう。食事、睡眠は脳に大きく影響する。それが分かっているにもかかわらず、このような現状なのである。ただ、こうした状況は個人で改善できる場合もあるが、いまの社会のシステムを変えていく限り、生活習慣の改善は難しいのではないだろうか。個人の注意はもちろんだが、社会ももっと健康な生活というものに、目を向けていくべきだと思う。

(生活文化専攻 4年)

——ただいまの男性脳、女性脳の話に関連して、それは、進化の過程における男女の性別役割分担ということと何か関係があるのでしょうか。

桃井 それもあるのかもしれませんが、多分ホルモンの影響が脳を作るのに非常に大きいので、それがあると思います。女性のなかでも生まれた時のテストステロン、男性ホルモンですね、これがやや多いような女性はある特定の行動特性があったりするという研究報告もありますので、胎内でのホルモンのレベルが男女差を決定するという、極めて生物学的なものだろうと思います。

——脳の研究は発達障害の子どもの研究と非常に関わりが深いと思うのですが、発達障害の、例えば自閉症スペクトラムとかADHD（注意欠陥・多動性障害）などの子どもたちに関する脳科学上の知見をお聞かせください。

桃井 発達障害の中で自閉性障害（自閉症）と多動性障害は、極めて遺伝的素因が強いということが分かっています。必ずしも親からの遺伝という意味ではありません。なかには親から遺伝される方もおられますが、遺伝子の異常がかなりの方に認められます。ただ、遺伝子の異常があったからといって、それが一〇〇パーセント発症するかどうかはまた別問題で、一卵性双生児の自閉症の発症率の一致度は六〇〜九〇パーセントですか

ら、逆に言うと、環境要因が一〇〜四〇パーセントあるということになります。遺伝子要因の強さ、環境要因の強さは個々の患者さんによって違うと思いますが、環境要因が強く作動する人もあれば、遺伝子要因が極めて強い方もあるように思います。その遺伝子のなかで、多動性障害も自閉性障害も、問題は先ほどのシナプスの機能不全であることが分かっています。シナプスの機能不全をいかにピックアップするか、そして、いかにその治療法を見つけるかというのが、いまの脳科学的な一番のホットトピックであるというように思います。

——現在、施設職員として自閉症の子どもと関わっています。かなり重度で、表情も全くなく、話もできないというお子さんです。私なりに、笑顔をやさなようにコミュニケーションをしたり、歌ってあげるなどしていますが、ここだけは気を付けて接するとよい、という点があれば教えていただけますか。

桃井 大変ご苦労されていると思いますが、自閉症の子どもの四大特徴は、ご承知のように、言葉を含めてコミュニケーションができない、社会性を理解できない、こだわり・繰り返す行動が極めて強い、それから、感覚の異常があるという点です。

感覚の異常というのは、地面に立ったときの体の受ける感覚も含めてです。その異常は人によってさまざまなので、まず接するときには、そ

のお子さんがどんな感覚を嫌いなのか、苦手なのかを知ることが、うまく付き合ううえで非常に大事なように思います。どうしてもこれをやらせたいからといって、音楽の音の刺激をたくさん与えるとパニックを起こしてしまうというお子さんに、一生懸命、音の刺激を与えるのは逆効果です。どの感覚が苦手かは、本当に人によって違います。体に触る感覚も含めて、われわれと全く違う感覚の受け取り方をしますので、まずは、音の高低や声の大きさなど、どういう感覚が嫌いなのかを確かめます。苦手な刺激が入りますと、それだけでコミュニケーションができなくなります。働きかける前に、まず十分な観察をして、そのお子さんの苦手な感覚をしっかりと把握していただくことがよいと思います。逆にそれは、心地よい感覚は何かを把握していただくことになりますね。心地よい感覚を見つければ、ある程度しめたものだと思いますので、そこから環境づくりが始まっていくように思います。もちろん、親御さんの情報も大事だと思いますが、そのようなところから始めるとよいのではないのでしょうか。嫌な感覚が少しでも積み重なりますと、後からいくらいい感覚を与えても、その方とのコミュニケーションはもうだめになってしまいます。記憶力が非常にいいお子さんたちですから、そんなところが一番大事なような感じがしております。

——「多様な刺激の重要性」ということですが、先生が考えられる質のよい多様な刺激というのはどういうものでしょうか。いま、身の回りには強い刺激がたくさんあふれているような気がしますが、特に幼い時期の質のよい多様な刺激について、もう少し具体的にお話いただければと思います。

桃井 それは大変難しい。先生方にお伺いしたいくらいです。刺激には経験というのも入りますね。経験もいろいろな刺激ですので、多様な刺激、多様な経験環境というふうにご理解いただければいいのかなと思います。

どれもものにならなくても、習い事をしてみるのも経験となるでしょう。いろいろな人に会うのもそうです。いろいろな人に会えば、嫌な思いもするかもしれませんが、そういういろいろな経験、多様な種類の経験をたくさんするということは、頭の中の脳の発達のバランスをよくするうえでとても役に立つように思います。大人になれば、だんだん「これしかない」というふうにせびめていくわけですが、そんな大人の人生のなかでも、いろいろな物事に対処する能力がないとプロフェッショナルになれないわけですね。大人になると一番大事な問題処理能力を身に付けるためにも、いろいろな経験をする。いい経験も悪い経験も嫌な経験もたくさんするということが、「多様な」という意味のなかに含まれているのではないかなと思います。



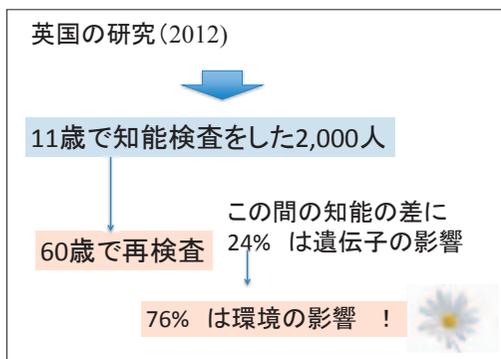
幼児保育研究会
——桃井先生を囲んで

講演後、桃井先生を囲んでの幼児保育研究会が、本学教員らをメンバーとして行われました。研究会で話題になったことをご紹介いたします。

Part. 1
桃井先生への質問

今日のテーマの「氏か育ちか」に関して、イギリスの興味深い研究があるようですが、それについて、ご紹介ください。

桃井 このイギリスの研究は五十年をかけて行うという、とても息の長い研究です。十一歳で知能検査をした二〇〇〇人の対象児に、六十歳で再び検査を行ってみたところ、知能の差をつくるのは、二四パーセントが遺伝子の影響、七六パーセントが環境要因であったことが確かめられた研究です。今日の講演で申し上げたような、神経細胞が生後ほとんど新生されることが初めて報告され



たのは十五年前ですが、恐らく、この細胞の新生ということと関係があるのだろうと思います。

人間の生体は、「余分につくって減らす(最適にもっていく)」という仕組みになっています。われわれの手の形も、最初は水かきがあつて、それがなくなっていくます。どういう仕組みで減っていくのかはまだよく分かっていないのですが、余分につくって減っていく、大人になって使える状態となって生まれてくる。それに加えて、成長の過程で新生する部分もある、という仕組みになっているのがわれわれの体です。生まれた時の神経細胞の数のほうが圧倒的に多いです。新生する神経細胞の数はたかだか一日に五千個〜一万个で、そのなかで生き残るのが数千個です。少ないけれど、全体に比べては少ない。このイギリスの研究からもいえるのではないかと思います。

育ちに遺伝子が支配をした部分が二四パーセント、という数字は、当然だろうなという感じがします。この調査の実施年齢の十一歳は、脳の

脳は青年期まで発達し
成人後も神経細胞は新生されている

- ① 幼児期は シナプスの造成年
- ② 幼児期以降は、シナプス刈込み期
バランスよく刈り込まないと機能に問題
偏った入力、修正不能かもしれない
- ③ 多様な刺激環境(友達、大人、遊び、自然、
空間、学習)は、神経新生を促進する
- ④ 睡眠、食事は脳発達に多大な影響



前頭前野が完全にできていないところです。情感的な土台は十一歳で完全にできています。前頭前野とか記憶、そういう高度な知能に関してはまだ成熟していない段階が十一歳です。その段階を基準として比べると、変化を及ぼす環境要因が強い。科学的な研究の結果としてこのように示されたのですが、確かにいろいろな人の人生を見ると、七六パーセントが環境要因というのは妥当な感じがします。われわれが日常的に感じていることが、研究で実証されたのですね。だいたい経験的なことが先で、それを科学が後付けしていくという関係です。そして、このようなことですらも、科学的に報告されるのが二〇一二年ですから、まだまだ経験値を科学の言葉に置きかえられていない、ということを示しているという感じがします。

——生まれたばかりの赤ちゃんは、親の声を聞き分ける聴覚や嗅覚が非常に優れているといわれます。その後、それらは衰退し、シナプスの刈り込みが何回にもわたって行われ、社会生活を営みやすいようになっていく。その中で失われていくものもあると思います。子どもの側に立ってみると、世界認識のあり方も違ってくるように思います。

——小さいころは、全体を捉える力が強いと思うのですが、やがてものを分けて考えるようになる。そういう能力が社会生活では必要だからということだと思えますが、子どもが学ぶ過程のなかで、世界全体と自分とのつながりの関係性を捉えていくという視点をどうもたせていくのかということが、実は教師として大事なのではないかと思えます。

桃井 感覚、視覚、聴覚、嗅覚、特に嗅覚は非常に発生学的に古い領域ですから、シナプスができるのは非常に早いです。刈り込まれて、だんだんその感覚は落ちていく。全部仕組みは同じと考えてよろしいと思います。

おっしゃるように、赤ちゃんの感じ方とわれわれの感じ方とは、恐らく随分違うのでしょうか。何を聞いていても、見ていても、随分違うのだらうと思います。どう違うかは評価のしようがないので分かりませんが、おっしゃるとおり違うと思います。

——臨床発達心理士として心理相談員をしておりますと、発達障害の子ども達の脳がありようとして、刈り込みがうまくいっていないようなことを感じるのですが、その辺りのことで何か科学的に分かっていることはあるのでしょうか。

桃井 一部の研究者は、シナプスの刈り込み不全は、統合失調症、自閉症に見られるとしています。ただ、本当に科学的に正しいかどうかは疑問で、まだそういう説があるという段階です。そういうふうを考える」と説明しやすいところだと思います。

ですから、シナプスの刈り込みに本当に異常があるかどうかはまだ証明されていないのですが、シナプスの受容体に複数の異常があることは確かです。知能障害もADHDも自閉症も、統合失調症もそれに近いです。受容体の発現に複数あるいは多数異常がある。脳の領域に特異性の異常があることは確かです。その異常が刈り込み不全によってできるのか、別の要因でできるのかは分からないのですが、多分刈



り込み不全は二次的な現象だろうと思います。というのは、基本的に遺伝子の異常がありますので、遺伝子の異常があつて、受容体の発現異常があつて、その結果として刈り込みの異常ができてきてもおかしくないのです。二次的な現象だろうと思います。二次的な現象であつても、それは頭の中で起きていることに違いないのですが、順序としてはそのようなのだらうと思います。統合失調症も似たような病態パターンでいま考えられていて、脆弱性のある遺伝子をもつたほうが、強いストレスで統合失調症を発症します。似たようなことが自閉症でもっと前に起きているし、統合失調症では後で起きるといふふうに考えています。

——薬物治療については、どのようにお考えですか。

桃井 基本的に、子どもがその症状で、あるいは、その病気で損をしていけば薬物治療を行います。子ども自身が本当に損をしていけば、その損は消してあげたほうがいい。子どもの人生にとってですね。ですから、成績を上げるとか、六十点を集中させて八十点にするとか、そう

いう目的ではなくて、子ども自身が、自分のもっているものに比べて損をしていけば使つてあげたほうがいいと思います。親御さんにもそう説明をしています。年齢的には、基本的に六歳以上です。

——ADHDや発達障害の人は、増えているということでしょうか。

桃井 基本的には遺伝子の異常——異常というよりも、ぜんそくに
なりやすいとか糖尿病になりやすいというのと同じようなことです。あるいは、高血圧の遺伝子をもつていたり、みんなそれぞれ遺伝子の特性をもつています。そういう遺伝子の特性は、百年ぐらいで変わるものではないので、そういう意味では、先進国の社会全体が、社会性があまりなくても生きていけるようになっていっていると思います。幼少期に社会性の訓練をあまりしない社会環境になって、コンビニに行けば、人と関わらなくても必要なものは買えます。われわれの世代は、お店のおばさんと話をしなければ物が買えないという時代でした。そうすると、どれほど無愛想な子どもでも、お店のおばさんから何か言ってもらえていい気持ちになつたりなどしたのですが、そういう地域社会のコミュニケーションがほとんどなくなりました。田舎でも、そういう雰囲気は少なくなっています。コミュニケーションのツールがほかにできて、社会全体で人と人のフェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーション機会が減つていく。その中で、そうした遺伝子傾向をもつた方は、社会化される訓練がなされないために、よけいに発現しやすくなつてくるというのが本当のところではないかと思えます。ですから、恐らく社会機構の問題が大
きいと思えます。昔もおつちよこちよいの子どもはたくさんいましたし、

養成教育の課題への視点

問題になる子どももいくらでもいましたが、社会の側に受け入れるだけのおおらかさ、曖昧さがあって、そういう子どもが二人や三人いようがどうしようがびくともしない、というおおらかさがあつたような感じがします。それがいま、なくなってきたところがある、問題が顕在化していることなのでしょう。遺伝子異常も増えているのかもしれないませんが、いま申し上げたような環境要因のほうが大きいだろうと思います。医学生にコミュニケーションの仕方を教えなければいけない時代になってきたということでしょう。

——教員も、コミュニケーションが不全とまではいかなくとも、コミュニケーションが苦手な人が教員になっている面があるように思われます。そういう人が、子どもにコミュニケーションを教える立場に立つ。そこが難しいところで、子どもの課題と併せて自分自身の課題にも向き合って、教師自身がしっかり学ぶことが求められると思います。

——今日のお話で、子どもの発達過程の中で多様な経験が大事とありましたが、同じことが学校の先生にも当てはまると思っています。しかし、いま、教師になるためのカリキュラムが非常にタイトになっていて、幅広く目を向ける余裕がないように思います。教育の技術的なことも大切ですが、もう一つ基礎に、多様性を経験して、いろいろなことに柔軟に対処できることが、教師としての能力に求められると思います。本学での小学校の教員養成では、

その辺りのバランスをとりたいと考えているのですが、いろいろな制約があつて、なかなか難しく感じています。

——まさしくそのとおりだと思います。教育とは、いわゆるスキルのノウハウ的なものではなくて、大人にとっても自分が成長していく学びと随分重なってきます。授業研究などで子どもの学びをみると、教師の課題も併せて見えてきます。そのようななかで、教師の側がどう幅を拡げるかが大事でしょう。そういう問題意識をもつ基礎をどう作るかが大事なのだと思います。

——発達障害の子どもについては、幼稚園や保育園などの保育の現場でも「困り感」があります。しかし、桃井先生のお話からすれば、もしかしたら、寛容さ、柔軟さというような態度や姿勢を現場がもつことができれば、その困り感が「子どもの個性」として捉える見方に変わるかもしれません。発達障害を特定できるようになってきたことは大切だと思いますが、教育や保育のあり方を少しおおらかに見直すことも必要だと思います。保育の専門の立場に立つと、「遊びを活用して何かを育む」と、遊びにも「目的」をもって活動を考えますが、本来は遊びは自由なものです。ですから、自由な遊びと、保育者がねらいとする遊びとどのように両立させていくか、ということなども大切になると思います。

——現場の先生方も、発達障害の子どものことは非常によく勉強されていると思います。それだけに、それらしい子どもがいると放っておけなくて、何かしなくてはいけないということになります。その結果、より狭い見方

となつてしまい、より苦しい方向に行つてしまふ、ということがあつたのではないかと思ひます。

――発達障害ではないですが、幼稚園や保育園では、四月生まれと三月生まれの、ほぼ一年歳の違ふ子どもが同じクラスになります。一年違ふと発達にかなり差が生じるし、個人差があることも当然なのですが、担任保育者としてはどうしても気になつてしまい、知識や熱意があるほど「この時期にはこうでなければいけない」と一生懸命になつてしまふ。そのことが、子どもにとつてもお母さんにとつてもストレスになつてしまひます。

――それは小学校でも同じで、成績表もありますから、なおさらです。もともと学ぶということは遊びと近いところがありますが、学校教育になると「勉強」になつてしまふ。本来の遊びに近いような学び、それが実は本当の学びだと思ひますが、それを可能にするためには、教師も「どれだけ遊べるか」ということが必要と思ひます。そのような人材をいかに育成できるかが課題と感ひします。

桃井 先生方がおっしゃつたとおりで、診療室からみていますと、多動性障害のお子さんの診療は、言葉は悪いのですが、いい加減な先生だとうまくいくところがあります。熱心な先生ほど、何とかしたい、解決しなければと躍起になつてしまふのですね。解決しないで放つておいたほうがいい問題もたくさんあるのです。外来でお母さん方と話すのは、「この問題はいま解決しなくても大丈夫です」という安心感を与えることです。あまりかりかりさせないということが大事です。学校でも熱心な先生ほ

ど、低学年のうちにごこまでは達成してあげなければという思ひが非常に多くて、逆に困り感をつくり出しているという、それは事実だろうと思ひます。先生方は信念をもつてやつておられますから、こうしなければという思ひがおりになるのでしょうか。まじめで信念の強い先生ほど、うまくいかないということはしばしばあるでしょうね。

Part. 3 スキンシップと言語習得

――今日のお話のなかで、エピゲノムがよりよく発現するために、ストレスがなくて安心感のある環境が大事ということでした。そのなかで桃井先生はスキンシップということを取り上げられましたが、やはりそれは、生物にとつて、哺乳類にとつて大事なことでしょうか。

桃井 哺乳類にとつては不可欠でしょう。ラットの実験を見ても分かるように、感覚というのは非常に大事です。どの動物の実験を見ても、特にストレス耐性は極めて大事です。グルココルチコイドホルモンというのがストレスホルモンですが、ストレスが上がると出てくるホルモンで、そのホルモンの受容体があつて、受容体が多いほうが耐性が高いのです。受容体が少ないと、そのホルモンに対して別の反応を起こしてパニックになつたりします。その受容体の数を決めるのはエピゲノムです。数を決めるのは結構乳児早期で、気付いた時にはもう決まつてしまつています。それが「三つ子の魂百まで」の一つの例だとよくいわれます。ですから、触るとか直接話すとか、そういう直接の入力というのがどう

も哺乳類には大事らしいですね。

少し話が違いますが、言語獲得、特に第一言語はビデオからは獲得できません。これはよく知られていることです。直接フェイス・トゥ・フェイスでなければ第一言語は獲得できません。第二言語はビデオでも大丈夫なのですが、第一言語と第二言語は入る場所が違うので、人の言葉を聞くことで、その第一言語の音声の獲得ができます。大事なことは、生の声であるということです。声の雰囲気などいろいろなものと同時に入力されるのです。そこには、音だけではなく、表情や息遣いなども関わるとはいますが、目が不自由である場合には表情が入ってきません。その場合は、音の聞き取りパターンが少し違うのだろうと思うのですが、一般的にはやはり言語はフェイス・トゥ・フェイスでなければなりません。

これは有名な話で、脳の外傷を受けた人が、第一言語は消失しても第二言語は残っているとか、反対に、第二言語は消失するけれども、第一言語は残っているということがあります。同じ場所でしたら両方とも消失するはずですが、外傷を受けた脳場所によって、第一言語が残ったり第二言語が残ったりする例がたまたまあるらしいのです。ですから、獲得の仕方が第一言語と第二言語は違うのです。いくら幼少期であっても、ネイティブではない人の発音をいくら聞いても、バイリンガルにはならないのです。ネイティブなバイリンガルが話す環境でなければバイリンガルにならないので、語学についてはあまり早期教育はしないほうがいいと思います。

——母親の母語が日本語ではなく、しかし、日本の保育園や幼稚園に子どもを入れるというときに、何を第一言語にするか、ということが問題に

なります。子どもをバイリンガルにしたい場合に、何歳ぐらいまでにどのような教育環境があるとよいか、というようなことはまだ分からないのでしょうか。

桃井 バイリンガルは教育ではできないと思います。少なくともバイリンガルのネイティブの話が常に同じ量行われている環境—それは必ずしも家庭でなくてもよいのですが—に置かれなければ、本当のバイリンガルには頭の中であっていかないということが分かっていきます。両親がバイリンガルの家庭環境であれば、バイリンガルになります。教育でバイリンガルにするのは難しいです。家庭で日本語が第一言語状況ですと、第一言語獲得の脳になっていますから、そこに教育として時間数の圧倒的に少ない学校で学ぶ外国語を入れてもバイリンガルにならず、第二言語として入る。あまりに早期の第二言語は、第一言語の獲得を混乱させ



るといふこともいわれています。ですから、同等の刺激が常に入る環境でなければ本当のバイリンガルはできません。早期の英語教育をいくらしても、第二言語の獲得にすぎないというふうにいわれています。また、あまりそれが早期である場合には、第一言語の獲得のマイナスにもなり得るので、慎重にしたほうがいいと思います。

——第一言語の獲得は、言葉の獲得だけでなく、母子関係そのものに関係するのではないかと思います。母語が日本語ではない母親の場合、第一言語を日本語にすると、母親と子どもの関係性に不具合が生じるということはないでしょうか。

桃井 それについては、私の友人で、ニュージールランドで子育てをしたご夫婦がいます。妻は主婦で家庭にいらして、英語はあまりうまくないのですが日常生活に困らず話せます。でも、英語で話すのはあまり好きではなく、発音もいいとはいえない。ただ、ずっとニュージールランドにいる方針でしたので、家庭のなかの言葉は英語にしました。そして、そこで子どもが生まれたのですが、次男・三男は、家庭のなかで英語です。それから、英語が第一言語で、第二言語は日本語です。そこで、あまり上手とはいえない母親の英語と息子さんの上手な英語とでコミュニケーションするわけですが、それで母子関係がおかしくなるかという点、それはおかしくならないので、言葉だけではありません。ですから、どちらを母語に決めるかはそのご家庭の判断で全く問題ないと思います。

——第一言語の臨界期はあるのでしょうか。

桃井 それは明らかにあると

いうことは分かっています。少なくとも幼児期です。論文によって随分違います。言葉は音声から入ります。音声をたくさん蓄積して、話したり書いたりすることへと発展していきます。音声に関しては幼児期に明らかに臨界期があるとされます。第二言語の音声の臨界期は十歳ぐらいまでです。だから、バイリンガルではなく、ネイティブな第二言語を話したいときには、十歳ぐらいが耳のほうの臨界期です。でも、それは個人によって随分違いますから、大人になって留学されて非常にきれいな英語を話す方もいらつしやいますが、音声に関しては臨界期は第二言語にもあります。ただ、読み書きは知識の問題ですから、臨界期はあまりいわれていません。発音の問題ではなく、話す内容が問題です。

——肌と肌のスキンシップということに戻りたいのですが、親としてスキンシップをとること自体が苦手な親御さんもいらつしやるかと思えます。人間は実験のラットとは違い、子どもを交換することはできません。スキンシップが苦手な親御さんについては、どのように考えればよいのでしょうか。



桃井 一番極端な例が、虐待でしょう。適切な距離感のとれない親によって虐待がなされます。虐待をする大部分の親御さんは、自分の親から適切な保育を受けておらず、マイナスの環境で育っています。よく連鎖するといわれますが、そういう方に適切な育児を理解させるのはなかなか難しいと思います。もうそれはでき上がっているものです。親だけに全てを期待するのは非常に酷なことです。昔もスキップが苦手な親はいくらでもいただろうと思います。居候のおじさんがいて、嫁にいかないおばさんがいて、おじいちゃん・おばあちゃんがいて、そういう大家族のなかで、だれかが面倒見てくれた。得意な人がいたのですね。そういう環境が失われているために、なかなかうまくいかない面もあると思います。ですから、そもそもできない親に対して何とかできるようにするというのは、至難のわざですから、苦手な親であれば、やはり別の形で子どもを支援するという方策をとったほうが有効でしょう。

どうしても、子どもを育てるのが苦手という親はいます。また、育てにくい子ども（デイフィカルト・チャイルド）もいます。双方が組み合わさった場合はとても悲劇ですが、自分は子育てが嫌いとかが、子どもは嫌いというお母さんでも、昔は、曖昧で寛容なところがあって、何となく周りの人がサポートしたり、あるいは、補充したり、そういうところがあった。いまはもう全く一対一のなかで、本当に子どもとお母さんだけで、そのお母さんが、子育てしない毛づくろいしないラットのような状態であれば、何らかの形で支援が必要だと思えます。それがなかなかいま、得られにくい状況があるのでしょう。それで虐待という問題も生じます。子育てを楽しい母親もいるということを認めていくことが必要でしょう。昔から母親は子どもを一〇〇パーセント好きかというところ

そんなことはなかったように思います。それを補うものが何か働いていたのでしょ。

「母性本能は全員にあって、子どもをかわいがるのは当たり前」というのは違うと思います。いろいろな親がいます。「生まれながらに母親」というものではなく、「子どもと一緒に母親になっていく」というものだと思います。

私もよくお母さん方と話すのですが、いまの親は、「この子の全責任を負うのは自分だ」と思う意識が非常に強いように思います。これはすごいストレスです。安全の面でも、学校の成績のことも、子どもの行動も、子どもの将来にも、全責任を負うのは自分だというふうに思うのは猛烈なストレスです。親にそこまで責任を感じさせる社会のなかで、親は偏った情報をもっておかしな方向に頑張ってしまうがちです。これは、教師も同じなのだろうと思います。先生も社会から過度の責任を負わされて、母親と教師が両方とも同じような状況にあってストレスを高められているように、外から見ると思います。ではそこをどうしたらいいかというところが大きな問題と思いますが、発達障害の場合には、両方の調整をしながら、診療の面から親の不安を取り除いて、先生ともコミュニケーションをとって、という形でやっていきます。でも、普通のお子さんたちの場合ですと、育児をする親の過度なストレスと学校への過度な期待をどうやって調整するのか、なかなか難しい問題でしょう。先生方のお話を聞きたいところです。

——先ほどのラットの話で、放任に比べてお世話するタイプの子どもはうがストレス耐性が高いということでした。でも、いまのお話を伺って思

うのですが、現在のよくな核家族社会で、とりわけ母親の役割が非常に大きくなっていると、逆に責任を感じて過干渉になる可能性があると思います。現実的に、過干渉による家庭不全というケースがたくさんあります。その辺りが難しい課題です。

桃井 確かにそうですね。「放任より過干渉のほうがはるかによい」という考え方もありますが、過干渉の起源は不安だと思えます。親の不安を医者の方が受けとめて不安を解消してあげると、親の態度が随分変わってきます。親の不安をどのようにして解消させるかというところは、過干渉の親には一番のキーポイントです。本来は夫がやらなければいけないので、過干渉になることをやめさせるというよりも、母親の抱える不安に気がついて、その不安を取り除いて、ということが解決の一つの道筋と思います。子どもが本心に心配、というよりも、子どもを心配する自分の責任が不安、というのが多いような気がします。

——最後に、ご聴講の方から、「幼児期早期から思春期の子育てがとても大事だということが今日のお話で分かりましたが、このような子育てができなかった家庭の子どもが大人になって社会に出たとき、一緒に働く者はどう理解し、どう接すればいいのかについて、教えてください」という質問をいただいています。いかがでしょうか。

桃井 そうでしょうね。なかなか難しい。よくいわれることですが、アスペルガーやADHDの方だと周りが大変困ると思いますが、本人も

実は困っているのだという視点で見るとよいのではないのでしょうか。本人は何に困っているのだろうかという見方で見てあげられれば、それが一番いいかなというふうに思います。私の患者さんでも、親御さんが苦労している以上に本人が困っているのだという事に気がつく、大分親御さんの視点も変わってきます。大人の場合にはでき上がっているのが極めて難しいですし、本人が気付くには精神科医の力が必要だと思えますが、少なくとも周りが困った時には本人はそれ以上に困っているだろう、いったい何に本人が困っているのかという視点で見ると、本人の困り事に対処してあげる方策が見つかるかもしれないと思います。

社会全体の価値観が狭くなってきたことは確かですね。私は東京の下町で育ちましたが、近所に棟梁がいて、棟梁の下に若い衆がたくさんいて、非常におちよこちよいの若い衆がいっぱいいて、でもそれなりに役割を果たしていて、割に満足感のある社会でした。それが、いまの社会はお金の価値観になってしまっていますから、どれだけ得するかという価値観で非常に狭くなっている。こういう価値観の社会のなかでは、発達の偏りをもった人は極めて生きにくいと思いますね。昔を思い返してみると、いろいろな多様性を受け入れやすい社会だったと思うのです。そのような社会のあり方を思い起こしながら、接していくということではないでしょうか。

(構成 須賀 由紀子)



特別授業(ワークショップ)

子どもの表現世界を豊かに拓く



美術家・東京藝術大学 非常勤講師

岩間 賢

司会 今日の日画工作の時間は、特別講師として美術家の岩間賢先生をお迎えしました。これから、先生にワークショップを行っていただきます。何をやるのか、皆さんもわくわくしていると思います。普段の私たちの物の見方や考え方の凝り固まっている部分を解きほぐしていただけるような、いい時間になることでしょうか。ぜひいろいろなことを考えて吸収してもらえたらと思います。

岩間先生のご紹介ですが、大変多岐にわたって活躍なので、一言では難しいです。今日のワークショップの中で、ご自身の活動の紹介を含めながら進めていただくことになっていますので、ぜひそういうお話からも得るものを探してほしいと思いますが、一つだけ、「岩間先生らしさ」が感じられることをご紹介します。先生、いまお住まいはどちらですか。

岩間 神田です。

司会 東京の真ん中の神田にお住まいでしょうかでしたが、どのような形のお家なのでしょうか。

岩間 あまり皆さん知らないかもしれませんが、「セルフビルド」といって、家を自分でつくるのです(図1)。いまの家は五坪です。ですから、畳八枚分ぐらいしかありません。木造で上に三階積み上げてあって、四方は全部ビルに囲まれています。ビルの中に、ぼつんとある



図1

家です。五坪というのは、入り口が三メートル六〇センチで、奥行きが四メートル二〇センチしかありません。劇的なビフォー・アフターの世界ですね。

世の中で「八坪の家」という本が売られているのですが、多分、五坪はないです。僕は文筆家ではないので本にはなっていないのですが、五坪です。

司会 その前には中国ですと芸術の勉強をされていたり、また、日本に戻られてからも日本各地で、ご自身の芸術活動はもとより、ワークショップや、地域の方々と手をつないで芸術的な活動をされていたりと、本当に多岐にわたって面白いお仕事をされています。そのようなお仕事の内容もスライドを通してお話をさせていただきながら、ワークショップで学びを深めてもらえたらと思います。では、岩間先生、よろしくお願ひします。

岩間 紹介していただきました岩間賢です。普段は美術家として、作品づくりをいろいろしているのですが、今日はワークショップを主体として、その中で僕の活動について、少しずつ散りばめて紹介していきます。

今日のテーマは、「偏りと拡がり」です。主語が抜けているのは、後で皆さんに考えてもらいたいと思います。先ほど説明があったように、思考とか視覚、聴覚、言語、そういうことについて、皆さんがいままで習ってきたことや考えていることを、少し違う視点で捉えてもらったり、あるいは、皆さんは卒業後に「教える」という立場に入っていく方々だと

思いますので、そのときに少しでも役に立ったり考えてもらえたらいいなという内容にしております。

ワークショップ①—導入

それでは早速いきなさいと思います。まず、この二行を黙読しておいてください(図2)。僕自身はいわゆる「環境アート」と呼ばれている分野のアーティスト作品をつくっているのですが、話すときの言葉は、だれでも通じ合える部分がたくさんあると思います。

例えば動物を飼っている人、どのくらいいますか？ 手を挙げてもらえる？——いますね。それでは、金魚を飼っている人は？——いますね。金魚も、もしかしたら何か言葉を発しているかもしれないですが、われわれには聞こえてきませんよね。でも、何か訴えかけていることがあると思います。犬や猫ならば、それが分かりやすかったり、愛着も増えてくると思います。では、ここに「いつもわたしは、動物の息遣いが、途方もない新しいことばとなることを期待している」と書いてありますが、これは言葉だと思って考えてみてください。では早速、聞きますから発声してください。例えば犬といったら、何と言います？

学生 ワンワン。

岩間 そうそう。じゃあ猫。

いつもわたしは、動物の息遣いが、
途方もない新しいことばとなることを期待している

図2

学生 ニヤアー。
岩間 ゴウ。
学生 パオン。
岩間 一致しなくてもいいですよ。
馬。

学生 ヒヒーン。
岩間 アヒル。
学生 ガア。
岩間 じゃあ、金魚。
学生 ぱくぱく。
岩間 ああ、なるほど。では、カラス。

学生 カー。
岩間 分かりました。では、いま言ったことをこちらの図を見ながら考えてもらいます(図3)。○(マル)の大きさは、音の大きさをイメージしています。いい？ では、一番大きいマルを見ておいてくださいね。そのときに、これは最大の音だと思ってください。

では、犬の声を自分の一番大きい声で、一斉に言ってください。自分の、今日一番大きい声で言ってくださいね。いい？ 準備できたかな。いいかな？ いきますよ。はい、せーの。

学生 ワン。
岩間 いいですね。ではゾウでいきますよ、ゾウで。せーの。
学生 パオン。
岩間 まだ少し声が出ていないね。では、真ん中のところには○(マ

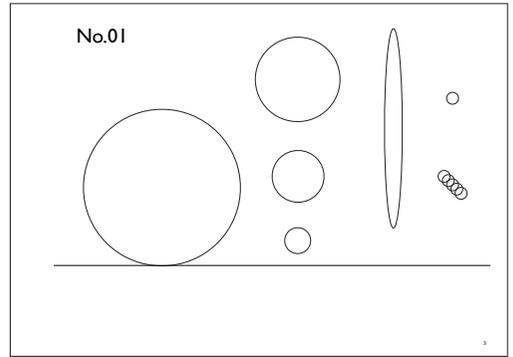


図3

ル)が、大・中・小三つありますが、もう分かるよね。シンブルに音の違いをやってみよう。犬だと面白くないから、変な言葉にしようか。「ガグゲゴ」とかの「ギー」とか「ガー」とか「ジー」とかの濁音の言葉を言ってください。下からだんだん大きくなっていくイメージで、最初は小さく、二番目はちよつと大きく、三番目はだんだん大きく上がっていくような感じでいこう。「ギ・ギ・ギ」と上がっていくような感じで、それをしっかり強弱つけて、下からいきますよ、せーの。

学生 ガ。
岩間 どんどん、とんとんとんって。自分の中で一、二、三と上がっていく感じです。はい、せーの。

学生 ガ・ガ・ガー。
岩間 ほかにもつとない？ ガイガイとかまざっていいから。自分の中で音は選んでいいですからね。もう一回いきます、せーの。

学生 ワーア。
岩間 その調子で次にいきます。右端には細長いマルが描いてあります。これに合わせて、息が続く限り発してください。いくよ、せーの。

学生 ガアーアーアー。
岩間 いまのワークは、最初の入りなので、あまり深く考えなくてもいいのですが、要するに、言葉を発するのにも強弱いろいろな大きさがある、ということですよ。皆さんが普段日常で話すことと、これから子どもたちに対して発するときの声の大きさや表現の仕方は、恐らくいろいろあると思います。例えば、小さい声で犬とかゾウと言って絵を見せても分からない子どもに対して、言葉でも教えられないし絵でも教えられないというときに、どうしても言語という音の発声が必要になってきます。

そのときに強弱を変えるだけで——単に抑揚なく「うれしい」と言うのか、大げさに「うれしいー！」と言うのかということでも違うでしょう？ そういうところを、少し心に留めてほしいと思う。一対一で話すときと一対二十で話すときの違いも同じです。

では、今日は向かい合わせに座っているの、真向かいにいる相手に何か投げかける言葉を一言、言ってください。会話をせずに、思いついた言葉をぼんと言ってみてください。

もっと大きい声でどんどん続けてみて。もっともっと大きい声でどんどん。じゃあ今度は小さい声で、聞こえるか聞こえないくらいの声で相手に投げかけてみてください。

このくらいにしましょう。以上が導入、まずは、さわりです。

岩間ワールド①

さて、ここで少し僕の話をしませう。普段僕はその土地の土や素材を使って、屋外で野外彫刻と呼ばれるものを作っています。特に、自然環境の中で作品をつくっています。これは四メートルぐらいの土の彫刻です。中は竹なのですが、このような日本古来の文化の技術を使って作品をつくっています。こういうのが僕の代表的な作品です(図4)。

これをつくるにあたって僕が大事

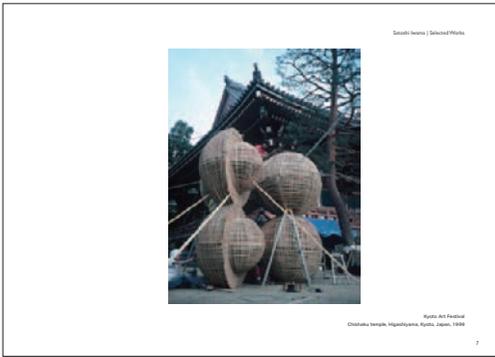


図4

にしていることが幾つかあります。ものを見るという見方の中に、例えば、この感じの違いは分かるよね。特に僕たちのような、ものをつくる人間は、どちらかという、さつき導入でやってみた言葉よりも、ものをつくって見てもらうという感覚のほうが大きいのですが、その中で「視点」が非常に大事になってきます。

ここに富士山が写っている二枚の写真があります。この二つを見比べてみて(図5、6)、どんな違いに気付くかな。

学生A 近さ。

岩間 そうそう、そういう感じ。

学生B 見え方。

岩間 見え方。どういう見え方かな？ ほかにどうかな。

学生C 見える範囲が違います。

岩間 見える範囲が違う。具体的にどういう見える範囲が違うのかな？ こちらは？

学生C 頂点。

岩間 こちらは？

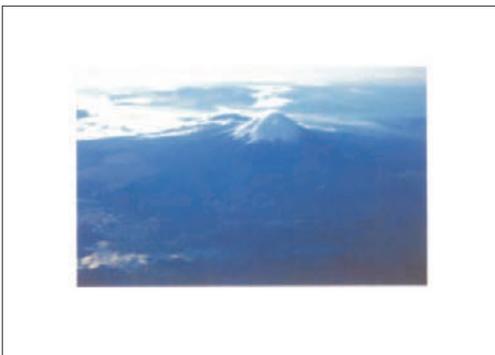


図6

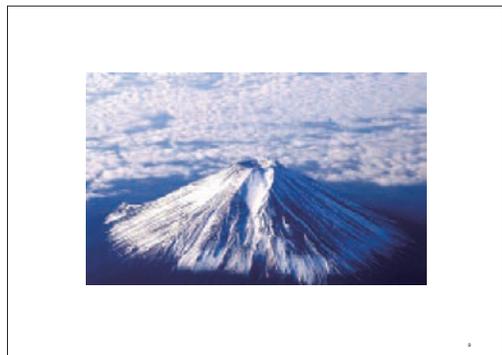


図5

学生C 裾野。

岩間 まあ、そうだね。これは何かというと、周辺視といって、近くで目が合ったりして見る感覚ってあるでしょう？ それと同時に、感覚としてこの辺りの背景や気配、その周りを見るところの違いです。同じものを見ていたとしても、切り取り方次第で、近くで撮る場合と離れて撮る場合があるよね。これと、いま次のものがつながってくるのだけれど、もの見え方と周辺視というところを少しさわっていきますね。

ワークシヨップ②

次の図は、何を表しているかというと、縦線が人もしくは自分だと思ってください（図7）。右側のもも同じです。ですから、これは二人いるということですよ。これは視点です。視線ね。さっき最初にちよつと触れたこの「見る」という部分の視点の意味を表しています。目の位置です。

じゃあ早速、自分の目を、鉛筆でこの絵の下の棒線の下の部分に描いてください。自分の目を、両目、この下に描き入れてみてください。シンプルに考えて。大体毎日朝起きて鏡ぐらいいは見ているよね。自分の目を描いてみて。少しリアリティーをもつて描いてくれるとよいい。上手に描こうとは思わなくていいので、自分の目ってこんな目だったかなと



図7



いう目を描いてください。描けた？ あと二分ぐらいいちよつと頑張つて描いてみようか。自分の目だよ。相手の目ではないよ。

はい、それでは、大体描けました？ 朝起きてから一日生活する中で、恐らく皆さん一度は鏡を見るでしょう。そのときに鏡の中の自分の目を凝視して見ることはありますか。

続けていきます。もう一つ、その自分の目を描いた隣に、大きく描いた人はその余白でもいいのですが、向かい合っている相手の方の目を描いてください。できたらデッサンのにしっかりと描く気持ちで、きちんと相手の目を見て描いてください。できる限り凝視するような感じで相手の目を見てほしいです。相手の目を小まめに見てくださいね。描き終わった？ はい、それでは、一回手を休めてください。

これから一つやってみようことがありますが。ペンはひとまず置いておいてください。適当にしておいていい。大体向かい合わせ、もしくは、隣同士で相手はいるよね。

それではお互いに相手の顔を凝視し合ってください。目線を外さないように、どこまで近づけられるかな。はい、それぐらいにしておきましょうか。

多分皆さん友達同士だから相当顔見知りだと思っけれども、人の顔を凝視するということは、ほとんどしないでしょう。

この「相手の目を見る」ということは二つの意味があって、一つは何か感じ

られる部分もあるけれども、すごく嫌にならない？ それは、その距離感が非常に怖くなるというか、気分が悪くなること、ないですか。

ここでやりたかったことは、実はその距離感のところを考慮してもらいたかったのです。上手に目の絵を描いてほしいというのではなくて、距離の話です。今日、家に帰ってからでいいですが、普段、自分の目をそれほど凝視していないと思います。非日常になったときには、かなりいろいろなことを凝視して見ることもある。ものをつくる僕たちは、割合そういう非日常のところをいつも一生懸命探して歩いている人種ですが、先ほどの写真に戻ると、右の富士山の写真は、いわゆる凝視をするイメージです。左の富士山は、俯瞰的な目。割合距離をもつて、デテールまでをのぞかない距離感です。こっちはどちらかという目の中まで見るようなものですね。例えば、いま皆さん目を描いてくれましたが、意外に目の表面は描いているけれども、映り込んでいる自分の姿まで描いた人はいますか？ 描いていないでしょう？ そういう距離感をひとつ考えてほしいのです。

岩間ワールド②

さて、僕の話と活動と、ワークショップを順番に交互に盛り込みながら進めていきます。そのつもりで捉えてほしいのですが、この距離が多分皆さんにとっても重要な問題になってくると思います。



図8

僕自身は、実はこのような、と

ある新潟の十世帯ぐらいしかない山奥の中で、古民家を修繕したり、棚田をつくっていたりしています（図8）。学生時代から関わったので、もう十七年ぐらいやっています。こういう山あいで生活をしたりします。僕が付き合っているお父さんやお母さん方は、大体八十五〜八十六歳で、皆さんお子さんがいますが、この集落には一人も残っていないようなところなんです。こういう棚田、里山と呼ばれているところを、いろいろな仲間や個人で開墾しながら暮らしたり、田んぼをつくったりしています。

こういう場所での生活経験は、皆さんのような幼児教育の現場に入る人には、今後とても役立つと思います。こういうところで求められている若い人のニーズも、いまとてもあつて、よくアートプロジェクトといわれますが、各地の農村地帯とか海辺などで、展開されています。

僕はこういうところで米づくり



図10



図9



図11



図12

もしながら公園づくりもやっついで(図9、10)、泥んこプールのよ
うなことをしたり(図11)、あるいは、
棚田を直して活動しています
(図12、13)。冬になると積雪は五メー
トルぐらいあります。
皆さんは卒業してこれからのい
ろんな道に入ると思いますが、僕自
身がこうした現場に関わっていると、
教育の現場は今後、非常に多岐にわ
たつていくと思います。最近の流れ
はそういう傾向にあります。ですから、



図13

保育士という仕事にだけ凝り固まらないで、こういうところにも目を向
けて過ごすのが大事ではないかと思えます。そのときに起きてしまうの
が、「距離感」ということなのです。こういう地域に関わっていると、ど
うしてもいろいろな方々の関係の中で物事が進んでいきます。皆さんの
仕事もそうでしょう。ご父兄の方との付き合いもあるでしょう。いろい
ろな問題が多分出てくると思えます。そこで大切なのは距離感というこ
とで、その辺りのことを考えるきっかけになればいいなと思えます。
相手の目を見るという言い方はたくさんあると思えますが、その見
方も、「観察をする」という見方もあるし、「ずっと眺める」とか、「見入る」
などもあります。いろいろな見方があります。一言で「観察」といっても、
いろいろ距離感があるので、その辺りのことをより強く意識しておい
てほしいと思います。

ワークシヨップ③

では、次にこちらの写真を見て
もらいましょう(図14)。左はご存じ
のスカイツリーです。ところが、こ
のスカイツリー、少し何かが違いま
す。分かりますか。

学生D 本物ではない。

岩間 そう、正解。早かったですね。

これは開発当時に発表されたCGで
す。よく分かったね。なかなか気付
く人はいないのですが、コンピュー

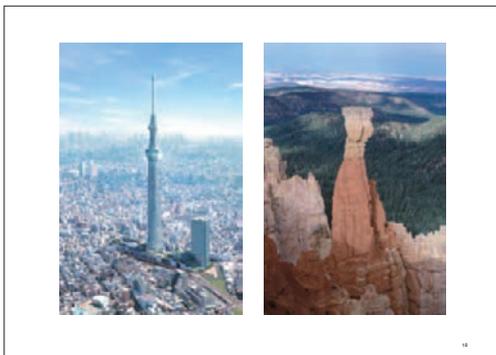


図14

ターグラフィックでできています。どちらが好きか嫌いか。感覚的に。僕自身は、右ですが、皆さんはどうですか。左のほうかな、右かな。後でみんなで一斉にやるワークショップをするのですが、左のほうは建築物として機能性とか機能美から求められた形です。右のほうは、いわゆる自然環境の中で、歴史的な時間を積み重ねて自然にできた形です。ですから、どんどん変化していきます。左のほうはスカイツリーなので、いわゆる人の意思というものが多分に入ってきてでき上がってきているものですね。

どちらがすぐれているとか、すぐれていないとかいう話ではなく、これが次にやることに関わってきます。

幼稚園・小学校・中学校と思い返してもらって、これまでに、制作途中で先生に手を入れてしまったという経験はないですか。何か自分でつくりたいものがあっても、手が入られてしまったという経験などあるでしょうか。例えば、四時半でお迎えが来るから、それまでに完成させてあげなくてはいけない、そういうときによくありますね。

絵画教室や図工教室に通っていたという人はいますか。一人、二人かな。意外に少ないんだね。

それでは、もう一つ質問です。小学校のときなどに、絵や工作で褒められていい思い出がある人はいますか。書道でもいいです。教えることを目指していたり、ものをつくるのが好きな人って、小学校や幼稚園のときに褒められていたり、いい思い出があったりする人が多いと思います。

ちなみに、僕は子どものころ、幼稚園のときから、園内で午後の時間にやっている図工の教室にずっと行っていました。ちょうど家の仕事

の関係があり、預けられていたのです。それで、ずっと夕方までそこにいました。

ワークショップ④

さて、それではここで糸を配ります。一列ごとに考えてください。先頭の人が一番端を持って、そのまま横つながりで一番後ろに回していただく。一番後ろの人は糸をぎりぎりのところで切ってください。できましたか？

先ほどの図でイメージできると思いますが(図15)、縦線が人で、真ん中の線が糸をイメージしています。先頭と一番後ろの人以外は手を離しておいてください。では、先頭と一番後ろの人が引っ張ってみてください。引っ張った？ やり合わなくてもいい程度に、ある程度引っ張っておいてね。今度は、その間の人たちが、片手で構わないのでつまみまじ

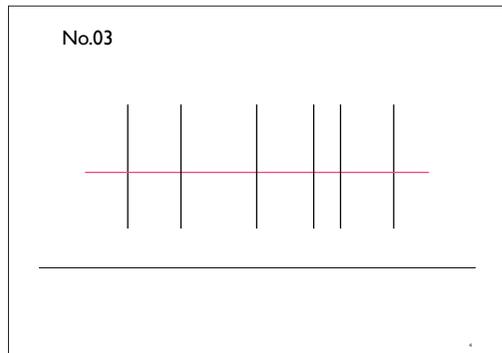


図15

た？ それでは、その状態で、僕が言う言葉に合わせ、考えて自分で動きをつくってね。では「引っ張ってください」「引っ張ってください」……なるほど、そういう引っ張り方もあるのか。じゃあ強く引っ張ってください。もつと強く引っ張ってみてください。はい、じゃあ少し弱めてください。今度は隣同士、左右を意識しながら、チュッチュッチュツという感じで引っ張り合ってみてください。自分が右寄りに行くのか左寄りに行くのかを考えながら引っ張ってみて。どっちに行こうかなというバランスの中で。はい、ではおろしておいてください。

その感覚をもつたまま次にいきます。同じように回して行ってください。そのまま先ほどの糸と同じように持ち上げて、もう分かっていると思いますが、切れない程度にお互い引っ張って行ってください。できる限り張るようなイメージで、かつ、引っ張ってみてください。微妙にキープしている？ なるほど、上手です。じゃあ自分の中でもう少し無理してみ。無理するというのは、怖いところまで考えて動かしてみよう。もう少し頑張つて。まだ四チームぐらいは切れないでいる？ もう少し限界までいけるかな。ここ、バランスいいね。はい、おろしましょうか。

いま、何をしたかという、皆さんの思考と感覚のずれや共有性を感じてもらうという内容です。つまり、お互いの力関係とバランスがつながってくるのですが、恐らく、教える側になると、いろいろ考えまです。全体をコントロールしなくてはいけないとか、統率をしなくてはいけないとか、あるいは、どこまでたがを外しておいていいとか、そういうのがあります。そのバランス感覚は恐らく、生理的な関係の中で拒否をする関係も生まれるかもしれないけれども、先ほどの距離感と同

じく、バランスを保てるような力感覚はつくっていかないといけません。例えばクラスの中でも、いまのように一本のひもを持っていても相手との関係性が生じます。僕は、お互いに引っ張り合う関係があるかなと思っていたのですが、意外に自分のほうに引く力、引いたり押すという関係をもっている人が多いので、少し驚きました。僕が接している東京藝大の学生だと、あまり協調性がなく、お互いに最後にバーンと引っ張って終わるのです。でも、皆さんはお互いに押したり引いたり関係でしたので、横の流れと縦の関係が分かっている素晴らしいなと思いました。

ワークシヨップ⑤

それでは、次に最難関をやってみます。ここにトイレットペーパーがあります。この一個のトイレットペーパーを、全員で先頭から、蛇状に回して行ってください。今度は相手の顔も見えなくなつてきてしまうので怖いですね。コーナー大事だよ。

学生E これ、怖いね。

岩間 怖いよね。じゃあそのまま

全員立って動きを激しくしましょう。はい、立って、持ちましたか。全員持っていますか。はい、じゃあ先ほどと同じように、引っ張るということを、でも、なるべく切ることを考えないで切らないように、でも、引っ張るように。はい、ではやってみましょう。





引っ張ってみてください。張っている感じがあるかな。あまりゆとりがないようなぎりぎりの引っ張り具合ですね。そうそう、隣とのバランス感覚が大事だね。隣同士のバランス感覚。では、皆さん両手でやっているとと思うのですが、片手にしてみてください。今度片手だけで維持してみてください。はい、じゃあ、せーので思い切り引っ張ってみましょうか。せーの。はい、座りましょうか。お疲れさまでした。

岩間ワールド③

では、ここで、また少し僕の話をしませう。僕のいろいろな表現世界の一つに、「ちんどん屋」があります。いろいろな方々と、いろいろなところをめぐるります。これは新潟県松之山の震災復興で四十余りの集落を一日で全部回りました。こういうところに行くと、大体ドン引きに遭い

ます(図16、17)。

ここはその集落の一つに高齢者福祉センターがあつて、そこのおじいちゃん・おばあちゃんたちのところで迎え入れてくれて、いろいろなショーや踊りを見せたりしています(図18)。子どもの教育の現場に携わると同時に、こういう高齢者福祉センターなどで一緒にワークショップをしたり、活動する機会というのも、実は多くなります。子どもの勉強だけでなく、ぜひ、こういうところへもボランティアなどに出かけてほしいと思います。

僕はもともと油絵科に入学したのですが、大学では一回しか絵を描きませんでした。あとは遊んでいました。その中の一つに、僕自身は舞台美術をやつていて、実際にはこういう作品ですが(図19)、神社やその土地の何か象徴的な場所や森の中で、舞台をやつています。



図16



図17



図18

舞台は総合芸術で、踊りや音楽、あるいは、映像を駆使し、身体を使って表現していきます。いわゆる美術と呼ばれる分野にとどまらず、僕がそこから離れて多岐にわたるようになったのは、こういう舞台の影響です。絵だけではなかなか表現できないことがあって、それを音楽に求めたり踊りに求めたり、そういうふうになっていったのです。みんなで合宿して、三十日間ぐらい一緒に寝食をともにしてやっていくのです



図19



図20

が、大体一時間半ぐらいの公演をつくります(図20)。

皆さんは課題で、授業を組み立てることをするでしょうか。多分、自分で課題をつくったり、プログラムをつくると思うのですが、そのときに絵とか立体とか、例えば秋だと何か拾いに行つて何かつくりましようというのが大体おおよそのパターンとしては想像できるのですが、それらを本当につなげて何か一つのものをつくるということは、いまの教育の中だとあまりないのではないのでしょうか。僕から一つ期待しているのは、そういうふうにいるいろいろつながっていくようなプログラム、音楽だけで切るのではなく、音楽の先生と一緒にそういう舞台をつくってみるとか、絵を描くときに音を入れてみるとか、音を聞きながら絵を描くとか、体育の先生と一緒にできる身体を使った動き方というものもあると思うので、そういうカリキュラムづくりをぜひ頑張つてほしいなと思っています。

ワークシヨップ⑥

では、もう一つ、ワークシヨップをしてみましよう。

ここに、「□+□=10」と書かれた紙があります(図21)。この□の中にあてはまるものを書いてください。書けましたか。大体書けたかな。じゃあいいですかね。

書いたものは大体「9+1」とか「8+8」、「6+4」、「5+5」とか、そん

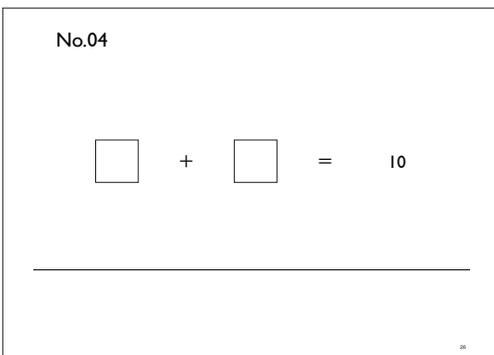


図21

な感じかな？ それ以外のものを書いた人いますか。

学生 F はい。「10+10」。

岩間 それは数字だから、一緒かな。ほかに。もう少し工夫したものはあるかな。「10+20」、分数。そういうのもあるね。

僕は、「□+□」の中に書いてくださいと言っただけなので、当然数字以外のものを書いてもいいのです。ここに数字しか思い浮かばないのは、皆さんのものの見方が、常識的に固まってしまっていることを示すでしょう。□の中はもつと自由に考えてください。例えば数字を知らない小さい子に10個のものを数えさせるとき、どうやって習ったかな？

学生 G ミカン。

岩間 そうだよな。ミカンとかリングとかの絵を見せたりするね。おはじきとか。ということは、この□の中に、当然絵で表現することもできるね。もつと高度に数学的に考えれば、別にここに「5×2」を入れてみてもいいわけだし、分数をもつてくることもできるよな。

じゃあもう一回、数字以外で思いつく、「10」にたどり着くための□の中にあてはまるものを考えて書いてみてください。

数字以外のもの「10」という数を分からせるためにはどうしたらいいか。要するに「10」という解答を求めるために、どういう□の中を考えれば



音から、卵とフライパンの絵を入れて、「じゅう」と読ませる。なるほど。

学生 (拍手)

岩間 一番最初にやった音の話があったでしょう。「10」というのは、見たときには数字の「10」で表されるものだけでも、いまの先生のように、もし目を閉じていて「じゅう」と聞いたときに、一気に解放されるよね。数字とか数にこだわらなくてもいい答え方に変わってくるのだけれども、何かできたという人、いる？

ああ、そういうのもあるよね。オクトーバー。ただ、単元としては一つになってしまいうから、『何とかと何とかを足して「10』という関係になるもの、なんだろう。

ああ、こちらの学生さんのもの、面白いね。鉄砲の「銃」と「弾丸」を描いて「じゅう」だということだよな。うまいね。

いいかということだね。珍解答でもいいのです。

一つ面白いのが出ましたね。左手と右手を出すことで5と5で「10」だと言っている人がいますね。そういう感じで柔軟に考えられるといいのだけれど、どうかな、工夫して。

ああ、今日のゲストとして参加してください先生から面白いのが出ました。「じゅう」という音を、数字として捉えないで、「じゅう」という

さて、ここが今日の大きな一番のポイントです。最初に「アー」とか「ウー」とか声を出しました。ひもを引つ張ったり、トイレットペーパーを回してみんなでつないで引つ張ってみたり、というのは一つの伏線です。それは、何となく頭の隅に置いておいてほしいなと思っていることです。結局ここが今日の大事なところですよ。子どもの保育や教育で、何か目的をもってカリキュラムや課題を多分つくるはずですね。そのときに求められる進め方は、まずだれもが思いつくのは、先ほどの数字のよなものを入れるパターンです。でも、少し音が変わって、例えば視覚を失った場合には音で「じゅう」と聞くことになる。「じゅう」の捉え方が音に変わる。すると、全然違うものが発想されていきます。今日の最初のワークシヨップで、「犬」と言ったら皆さん「ワンワン」と答えていましたが、「ワン」といったら、「1」ということでもあるよね。でも、犬の話をしているから、「ワン」は犬と結びつく。それは最初に「犬」という言葉を強く何回も言っていたから、イメージが植えつけられてしまったわけです。いまのワークでも、最初に「10」を見せてしまい、おのずと何らかの簡単な足し算のような計算式に見えてしまっているから、当たり前のように数字が入っていきます。

ここのトリックをきちんと理解していると、カリキュラムをつくるときとか伏線をつくる面白さが非常に広がってきます。つまり、当然もう一つの見方として、例えば、粘土を渡したときに、自由な発想でということになれば、いろいろなものを子どもたちはつくる可能性があります。そうすると、同じ素材を渡しても、答えはどうなってくる？ 多様になってくるね。多様になるかもしれないし、重なる、似たようなものをつく

る子どももいるよね。隣の子が描いていて、まねしてしまおう、ということもあるでしょう。一人だけはみ出して描く子もいるかもしれないし、この□のイメージで言うと、みんなが共同して一緒にやってみようという関係もあると思います。

このバランスということも、今日、特にもち帰って考えてほしいと思います。一言で言うと、実は目的と思っているものが目的ではなくて手法であったり、それをつくるためにありとあらゆる方法があつて、そのことをどうつくっていくかというのが大事ということなのです。

岩間ワールド④

では最後に、僕が最近気にしていることと考えていることを話します。これは、日本地図です(図22)。これはどこでしょうか？ これは地図を

くるっと回している状態です。これがよくいう「見え方」です。今日の課題とは離れるのですが、最近僕はいろいろ物の見方を考える例として、この話を皆さんによくします。ここは日本です。ここが中国大陸。ここが日本海。この見方が僕の中で増えているのはなぜかというと、僕は二〇〇六年から五年間、震災直前まで中国で暮らしていました。いわゆる大陸にいたのですが、そのときに思いついたのがこういう見方だった



図22

のです。こちらは北海道、アイヌ、こちらは九州になりますが、大陸から見て、文化が伝わる流れというのは小学校・中学校のときによく習ったでしょう。普通に考えて近道したくなります。そうすると、何となくこの大陸から一番近いところに歩いてくる感覚とか、九州に文化が生まれてきた話とか、この辺りが京都ですが、京都は日本海とつながっているので、奈良のほうに入っていく場所なのですが、そういう文化が生まれたら歴史が生まれていくような地形図になっている。こういう図を僕はいま一生懸命考えています。そうすると、東京は、いま日本の真ん中の首都のように思われていますが、実は一番突端で、一番最後に発展したところではないかと思われてきます。それから、同時に太平洋から見るときに一番最初にぶつかる場所だから発展したのかなと思います。日本海は、皆さん海と思っているでしょうが、こうやって見ると、たかが小さな湖のようにも見えるでしょう。ところが、こう捉えたときには日本海って何か大きいなとずっと思っていました。太平洋は更に大きいです。これは、自分の子どもを見ていて思いついたことなのです。子どもが地図を遊んで見ていた。見方など分らないでしょう？ 文字も読めないから、適当に広げて色遊びか何かしていた。そのときに思ったのです。上下左右の関係をなくして物事を見ると、意外と面白い発見があるなど。先ほどの□のほうは、僕なりに論理立てた話が幾つかあったのですが、この瞬間に感覚的な話がすごく解放されて、じゃあ自分が生きてきた場所はどういう場所だったのかなとか、そういうことをすごく考えるようになって、いろいろなもの調べているのです。こうやって見て調べると、ちよつと地図の見方が変わっただけで、意外につじつまが自分の中で合っていなかったのが合ってきたりとかします。自分なりの考えている見え

方が疑問に思ったときは、意外にその疑問はすごく正しかったりするの
で、その周りのチャンネルを自分で
勝手に変えてしまおうとピントが合っ
たりします。こういうことを、ぜひ知っ
てほしいと思います。

最後に、僕の作品を幾つかご覧
いただきましょう。旅をしている中
でつくっているものです(図23、24)。
この小さいのが作品です。ちなみに、
左下の、これ、大きいアマミと同じ
ものをつくらうと思って、でも、砂
漠なので水がないのです。水をため
るのにもすごく苦労していて、制作
は十分くらいのものですが、水をた
めるのに一日かかっている。こんな
形で作品づくりをしてきました。昆
虫とかのふんとか。こういう山あい
の中で一生懸命穴を掘っているの
ですが、こういう風景をつくる仕事
をしているのです(図25)。こうい
うところでひたすら模様がついて
いるのが壁画です(図26)。削って描いて



図24



図23

いるのです。いわゆるクレヨンを重ねていって、ひっかいていく形です。あれと同じやり方で、要するに石にはもう積層があるので、歴史があるので、それを削っていくことで中を見せるという発想です。ですから、紙の上でクレヨンを重ねて、よくひっかき絵をやると思うのですが、逆に自然の素材を削ると、面白い色とか柄が出てきます。そういうのも課題のワークショップとか自分でやる中で入れておくと面白いかなと思います。よく素材を勉強するといっていますね。

多分皆さんの中では、ワークショップを子どもたちと行う機会がたくさん出てくると思いますが、僕の手がけてきたワークショップを少し紹介したいと思います。僕のワークショップでは、基本的に公園づくりとか広場づくりを一つの目的にしてやります。特に子どもたちとやるときは、先ほどの「□+□=10」の「10」の部分は、僕にとって「公園」

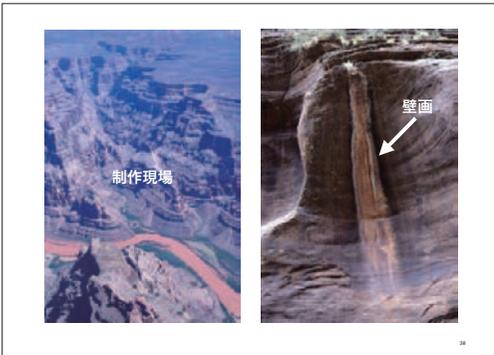


図26

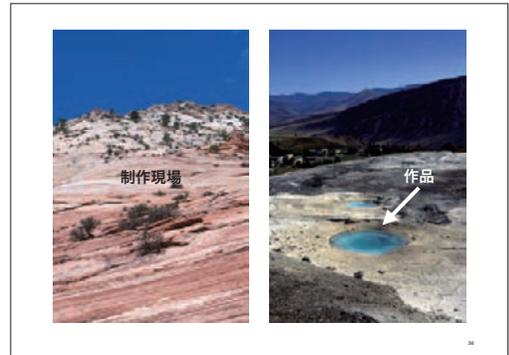


図25

です。このように、泥んこのプールをつくって、みんなで公園づくりというのが必ずある。これは沖縄ですが、絵を描いたり、いろいろな手法を使いながらやります(図27)。

これは早稲田の初等部の一・二年生を担当していた時期がありまして、



図27

そのときにやっていた活動です。

もう一つ、これが最後の画像ですが、中国で僕は五年間ほど、調査や活動を行っていたのですが、やはり、欧米の方等もたくさんいたので、そういうところで水墨という技法を使って絵を描いたりする機会をつくったものです(図28)。恐らく、皆さんがいま教わっていることは、国内での勉強の仕方や方法、だと思いうのですが、これからはほとんど外に出て行く機会が今後増えてくると思います。



図28

まず、教育の現場もきつと海外にも広がっていくと思いますし、現地の日本人学校で先生になるということもあるでしょうし、日本でインターナショナル・スクールに勤めるということもあるでしょう。あるいは、いま、企業などでも、子どもたちのためのプログラムをいろいろやっているところがあるって、教育の機関をつくったりしてやっています。ですから、子どもと関わるといういろいろな場所があります。学校とか園とかに限らないで、意外に視野を広げると、職の現場というのはたくさんあると思います。いまはネットで何でも調べられる時代ですから、保育をする場も考え方を少し変えたと、そういう海外で自分が学びながら教えるということも結構あったりすると思います。ぜひ、そういうところに三年でも五年でも行ったりして、また日本に戻ってくるというのも、僕の経験からいって、一つの方法かなと思います。その辺りも、早い段階

から考えておくとよいと思います。海外に行くのは大学出たぐらいがちょうどいいと思います。二、三年ワーキングホリデーとか使いながら行って、そうすると向こうのほうは割とそういう受け入れがたくさんあるので、また、求められていてというのもあるので、ぜひいろいろ探して、世界を拡げてほしいなと思っています。皆さんの活躍を期待しています。

おわりに

司会 岩間先生、どうもありがとうございました。最後に一言。今日の授業は、私もすごく考えさせられるところがありました。幼児保育で勉強している皆さんは、往々にして「いい子」であろうとしたり、枠にはまりがちだったりすることも多いのではないかと思います。そういう意味で、岩間先生の自分の思考の見方を変えるというのはとても大事なお話でした。現場で実際に子どもに出会うと、きつとびっくりさせられたり、こうあらねばならないと思っていたことが、「あつ、自分の考え方ではいけなかったな」と反省させられたりすることが、しばしばあります。今日のお話は、ある意味抽象的な部分もあって、皆さんにとっては何となく自分の中に入ったような、入らないような部分も多かったかもしれません。しかし、私は今日の内容はすごく大事なことだな、と思いつながら参加させていたっていました。ぜひ、子どもにも出会ったとき、もう一度思い出してほしいと思います。先生、今日はどうもありがとうございました。

(司会 井口 真美)

ワークシヨップを終えて

本学生生活文化学科 専任講師 井口眞美

岩間先生の豊かな感性と多様な経験に裏打ちされたワークシヨップを、
本学の学生たちはどのように受け止めたでしょうか。授業終了後には「岩
間先生の授業、とても面白かったです」「抽象的などころが新鮮で、こ
ういう授業好きです」と新しい世界との出会いに満足した学生たちが感想
を述べにきてくれました。

ここでは、ワークシヨップに参加した学生二名の感想を紹介し、今回
の特別授業をふり返りたいと思います。

幼児保育専攻 学生A

今回、お話を伺ったことで、物事の考え方は一つではないというこ
とに気付かされました。また、いかに自分の考え方に柔軟性が足りな
いかを思い知らされました。特にそのことを感じたのが、□の中に答
えを書き込むというものでした。

配布されたプリントには「□+□=□」と印刷されており、その□
の中に数字を入れ、なおかつその答えに自分で満足していました。そ
のときは「皆はどんな数字を入れているのかな」と思うだけでした。
しかし、来校していた先生の答えを聞いて、驚きを隠せませんでした。
それは、「10」という数字を音に見たてて式を組み合わせるというもの
でした。このとき、いかに自分が常識にとらわれ、凝り固まった考え
方しかできないのかということに気付かされました。その後、自分な

りにいろいろな答えを発見することができ、一つの問いに対しても、
さまざまな考え方や思考があるということを学ぶことができました。

幼児と関わるうえで避けることのできないものが、子どもの予想外
の考え方、発想、行動です。子どもは多くの世界を知らない分、子ど
も独自の思考回路や想像力をもっています。そのような子どもたちの
柔軟な思考についていけるよう、今回のように物事をいろいろな角度
から見るということを忘れずに、今後も学んでいきたいと思いました。

「□+□=□」の答えとして、学生A同様、4と6、5と5等、数字の
組み合わせを何通りか書き込み、できたと考えてペンを置く学生が少な
くありませんでした。この実態を見て、「学生たちは、岩間先生が冒頭
でお話しになった『偏りと拡がり』というこの授業のテーマを頭の片隅に
おきながら、目の前のワークをしていないのでは」と、正直ちょっと嘆
かわしい気持ちにもなりました。しかし、参観された先生の発想やユニ
クな友達の考え方をきっかけにして、学生たちは「そういうのもいい
のね」「ほかの答えがあるかもしれない」と、再度、問題に向かい直す機
会を得ることができました。

確かに、学生たちの様子を見ると、別の視点から物事を見たり、
多様なアイデアを生み出したりすることを楽しむというよりは、「間違っ
ていないかな」「上手に描けてるかな」等、「正しい答え」や「上手な絵

を求めたがる傾向があるように思えてなりません。その一方で、ワークシヨップ一つ一つを嬉々として楽しんでる学生たちは、まだまだ成長の途上
にあり、たくさんの可能性を秘めた存在であることにも気付かされました。その意味でも、今回のワークシヨップで学んだ「もの見方・考え方」
を、学生たちが今後思い起こし、自分の直面する課題の解決に役立てて
くれることを願っています。

幼児保育専攻 学生B

・プリントNo.01(図3参照)の丸が書かれた紙を見て、最初は丸の中に
絵を描くのか、それとも丸を使って何に見えるか考えるのかなと思っ
た。でも予想外に、音の大きさを表していて、一番大きな声を出す
とか、丸と同じくどんどん声を大きくするとか、長くのばす等であ
り、実際にやってみても楽しかった。プリントの一番右に丸が重
なっている絵があるが、いま気付いたことだが、重なっている丸と一
つの丸は同じ大きさなのに、自分で表現したとき、なぜか一つの丸
のほうが自然と声が大きくなっていった。人それぞれ固定概念とい
うものがあり、大人になるとそれが普通だと自分自身の中で決めつけ
ているのかもしれないと感じた。

・No.02(図7参照)では自分の目と前の人の目を描いたが、目をじっとみ
つめることが普段の生活ではあまりなく、新鮮な感じだった。また前
の人だけと先生は言っていたが、自然と近くの人を目を見ていた。目
を見るとという行為だけでコミュニケーションがとれるのだと思った。ト
イレットペーパーや糸を引っ張ったり押ししたりしたとき、私たちのも
のが切れなかったのは、みんなの様子をみんながうかがっていたから
だということを学んだ。それは、コミュニケーションをとる方法の一

つというか、これがコミュニケーションの始まりなのかなと感じた。

・日本がどこにあるかを探す地図を見て、向きが変わるだけで一瞬
混乱してしまった。頭の柔軟性が足りないことを思い知らされた。
「□+□=□」でも、絶対数字だと思い、4と6を入れたが、これも
柔軟性が足りないことを知った。でも、先生の「何でもいいんだよ」
という言葉かけがあるだけで、いろいろな答えや案がばんばん
と次々に出てきた。柔軟性が足りなくても、適切な言葉かけがある
だけで、すぐに柔らかくなるのだということを教えてもらった。保
育者の言葉かけがいかに重要かを学習した。
いろいろな見方をするだけで世界や視界が広がった感じがした。

トイレットペーパーや長い糸を切らないように気を付けながら、みん
なで引っ張り合う……仲間との共同作業を得意とする幼児保育専攻の
学生たちは、互いの様子をうかがいながら力を入れたり抜いたり、自分
の動きを調節していました。周りの状況を感じ取りながら行動する、言
葉でなく行為を通して仲間と気持ちを通い合わせるといった協同性は、
保育者、教員として求められる資質です。学生Bが述べるように、自分
たちのよさに気付く有意義な時間となったようです。

シンプルかつユニークなワークの数々は、どれもとても楽しい内容でした。
更に、「行為を通して、その背景にある観念的思考を理解する」という
岩間先生の授業スタンスにより、とかく具体的な思考に偏りやすい保育
者養成のカリキュラムの弱点も指摘していただけだと考えています。学
生にとっても教員にとっても、深い学びの機会をいただけたことを心よ
り感謝しております。

〈表現〉の価値と未来の享受者

本学生活文化学科 准教授

須賀 由紀子

一 はじめに

美術家として活躍される岩間賢先生。「作品を創作し、それを皆さんに見ていただく」という活動にとどまるのではなく、アートをコミュニケーションのつながり、人と人のつながり、人と土地(地域・自然)のつながり、人と歴史のつながりをつくり、意味ある時間・空間の共感の環を拡げていく。そこに集まる共感者と、ゆるやかな関係性をもちながら、関わりをもった人々の中で心地よいコミュニケーションが形成されていく、そのような「次の時代のライフスタイルのかたち」を先取りしていくような生き方を感じさせられます。

一人の美術家である岩間先生ですが、その創作活動の「根底にあるもの」の中に、これからの暮らしを豊かにするためのヒントや考え方、方向性を得ることができないのではないか。これからの時代の生き方、ライフスタイルを見つめてみることもできるのではないか。そのような思いから、ワークショップ授業のあと、岩間先生が、これまでどのような活動を展開され、現在はどうのような問題意識をもちながらご自身の活動に取り組まれているのか、詳しく伺いました。ここにそれを紹介し、そこにどのような視点を学べるかを考察してみたいと思います。

二 美術家としての〈表現世界〉

まず、ワークショップ授業の中でも一部ご紹介がありました。美術家としてのこれまでのお仕事や、岩間先生の言葉とともに、「五つのステージ」に分けて紹介します。



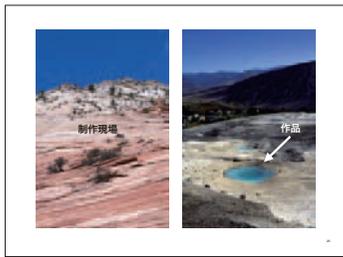


図6



図3

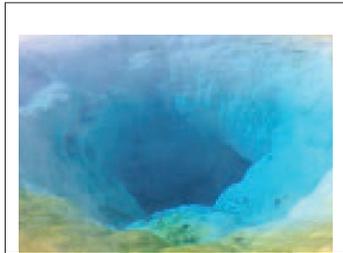


図7



図4



図1

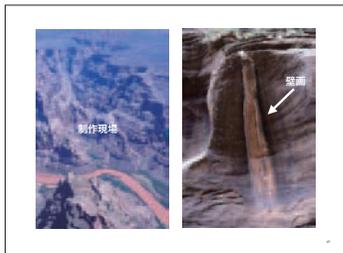


図8

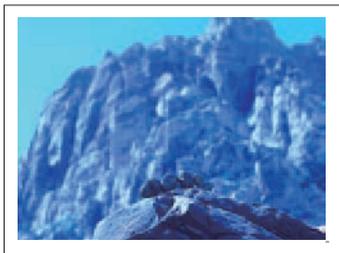


図5

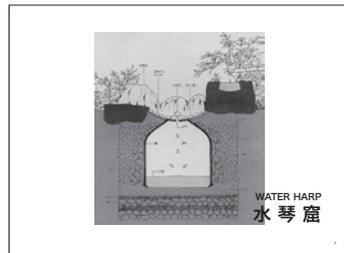


図2

stage 1
環境芸術

「東京藝大の油絵科に入学しましたが、学生時代は絵画ではなく、いわゆる環境芸術と呼ばれる分野で作品をつくっていました」

「この作品は『水琴窟』と呼ばれている仕組みのもので、竹の円形の中に、水滴の音が鳴るような仕組みをもつ作品です」(図1〜3)

「土の彫刻も創りました。これは山形の新庄平野で十二体の高さ二〜三メートルのものを日時計のように並べた作品です」(図4)

「旅をしながら、そこで集めた昆虫のふんや死骸を固めて、小さな作品にしたりします」(図5)

「この地層は石灰層と呼ばれるもので、とてもすてきな白い大地なのです。ですから、そこを掘って水を溜めると水鏡のような青い世界をつくることができます。アメリカのイエローストーンがこういう地層です」(図6、7)

「こういうところで一カ月〜二カ月、いわば放浪しながら、自分が気に入った場所、何か感じたところで、壁画の技法を使って、その表層を削って中の色を出すという創作活動をしてきました」(図8)



図12



図13



図14

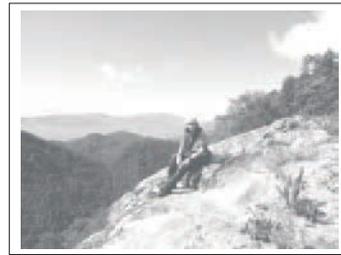


図9



図10



図11

stage 2

目に見える「モノ」の歴史性と現代アートとの融合

「こうした放浪を経て日本に戻ってくると、日本の、例えば一つの器の背景にある文化や歴史に自分自身の興味がいくようになり、日本の庭園、盆栽なども熱心に調べるようになりました」(図9)

「真ん中にあるのは僕なりの盆栽です。下の黄色いのは全部パウダー調の石の粉末です」(図10)

「おしろいのような細かい粉末のもので、ふーっと息を吹きかけるとふわっと浮くような粉末を、茶こしで会場にまいていきます。それを溶かしたものを後ろのほうに塗って作品にしたものです」

「いわゆるインスタレーションという現代アートの作品です」(図11)

stage 3

総合芸術としての舞台(演じ手として)

「こういう作品をつくる中で、やがて絵を描くとか彫刻をつくるなど、いわゆるつくってものを見せるということだけでは、自分の表現が収まらなくなってきたように感じてきました。自分の中では、音楽と踊りの比重が非常に大きくなり、いわゆるパフォーマンスというものを、仲間を集めて活動し始めました」

「これが今日のアート・プロジェクトのきっかけになる、いわゆる地域づくりにつながっていく初歩の初歩、最初の出来事です。もちろん、当時はそういうことは全く考えてはおらず、自分の表現をいかに見てもらいたいかとい



図15



図16



図17

うのを求めて、社会の現場に入りたいと考えて活動をしていました」(図12)
 「舞台はいわゆる総合芸術で、音楽や衣装、それを支える裏方、踊り手、照明などいろいろな要素が複合的に絡んでいます。当然、これを行う地域が関わるので、風土というものへの意識も強くなります」(図13、14)

stage 4

自らの根源を支える「棚田の風景」

「自分にとって、原点となっている場所があります。新潟県十日町の坪野です。大学四年生のときに、本当に不思議な縁で始まったつながりです」(図15～17)

「ここで、約千坪から二千坪の広大な棚田の再生と、そこに付随する古民家の再生、そして、地元の人に教わって、米づくりや野菜づくりをしていました」

「棚田を直したところで、泥んこプールとか、無農薬の米づくりをしています」

「初めて通ったのは一九九七年からですが、偶然二〇〇〇年からここで〈大地の芸術祭〉Ⅱ越後妻有ビエンナーレという国際芸術祭が開催されることになり、そこに関わるようになりました」

「これが起爆剤となって、全国各地で、いろいろな芸術祭やアート・プロジェクトが同時に発生していきます。いわゆるアートによって地域の活力をひらくというのですが、そこで次のステージが拡がることとなります」



図23



図20



図24



図21



図18



図25



図22



図19

stage 5

アート・プロジェクトのプロデュース

「茨城県取手市に東京藝術大学の取手校があることが縁で、ここの地域活性化を目指す『半農半芸プロジェクト』に関わりました」

「農業と芸術をつなげる活動が何かできないかという地域プロジェクトで、ちょうど僕自身が里山とか農業に関心をもっていたこともあって、それを一歩進める形で、初めて行政や地域と大きく関わるきっかけになった活動です」

「ディレクションと呼ばれる立ち位置で、企画とか運営をする立場で関わり、いろいろな作家やデザイナーなどが加わって活動してきました」
 「食のワークショップを開いたり、学生と一緒に鶏を飼育してさばいて食べるという一年間を通した一連の活動や、産市マルシェのような活動、養蜂家の方を呼んで、蜂の視点から土地の風土とか環境を調べることを企画するなど、いろいろなプログラムを行ってきました」(図18～25)

こうした岩間先生のこれまでの活動プロセスの中で、私が大変興味深かったのが、「東京藝大の油絵科に入学したけれども、当時から基本的に絵はほとんど描かず、いわゆる環境とか外のフィールドワークと呼ばれている分野で作品をつくっていた」というお話です。「ピオトープなどに関心が寄せられ、のちにサステイナブル(持続性)という言葉が出てくる」その先駆的な時代に、その息吹を感じとって作品が生み出されていきます。そして、その原点に、日本の棚田の風景の中で、自分が生かされたという経験があった、ということ。美しい棚田の風景、冬の深い雪、恐らく厳かなほど美しい四季の移り変わりの風景の中で、地元の人との関わり、地元の生活文化との関わりの中で、自然・人・地域・文化・農といったキーワードがその後の〈表現〉を貫く大切なものになっていきます。土と水、風と空気、そしてその中の「人」の営み、そして手作りの仕事は、〈表現〉の根源の力となることを感じます。これを保育の場に引き寄せて考えてみると、自然の中の遊びが、どれだけその子どもの表現世界を拓くことになるかということをお話させていただきます。創造の源に、自然と一体となる経験をたくさん積むことが大事なのではないでしょうか。

岩間先生の手がけられた「環境芸術」の中で、スケール感を感じさせるのは、実際にアメリカや中国大陸の大自然の中に行つて、大自然と一体化する中で創作をするということです。そこには何の見返りも評価も期待するのではなく、ただ、自然と一体となる、そのことに価値がある。そういう中で自己表現する時間に価値がある、という体験です。感じる風と一体化して描く、目の前に見た大いなる山と一体となって、その山の内なる声を聞くかのように、同じ形の山をオブジェとしてつくる、あるいは、堆積した地質の歴史の時間の中に入り込んで山肌をけずる、というお話がありました。その作品は、だれが見るのでもありません。だれかに見てもらうためのものでもありません。写真に収めるものもわずかで、ほとんどのものは、つくつたらその場で自然に戻す、そして、作家自らの心の中の思い出として残るのみ、というものだということなのです。われわれはつい「それって何の意味があるのだろうか」と言いたくなってしまうが、恐らく、それが「表現する」という営みの原点にあるものなのでしょう。

このお話は、本当にはつとせられるものでした。われわれは、とかく「評価」や「成果」を期待して、それを目的としがちですが、そういう小さな領域を超えて、もっと大きなところに、表現の源泉はある。「自然」というフィールドは、そういう感じ方を引き出す力があるのでしょうか。そして、小さな子どもの表現の原点も、ひたすら心の中から表出されてくるものではないでしょうか。その原点に心寄せることができる大人であることは、子どもに寄り添う立場として大切な資質であるように思います。人が人間らしく豊かに生きることの原点に、自然がなくてはならないものであることのひとつの証となるお話でした。

こういう海外での経験を経て、日本に帰国後、日本人の暮らしの中で作られてきた「モノ」の背後にある文脈(コンテクスト)を意識していくようになります。そしてその伝統の文脈を踏まえて現代アートを表現する一伝統とモダンの融合—ところに作品が意味と深まりを見せていくと思うのです。更には、音楽や照明も含めた総合芸術としてのパフォーマンスへと表現世界を展開します。こうした展開の根っこにあるのは「本来のもの(Nature)」を求めたい」という、より根源にさかのぼっていく気持ちなのでしょう。

「自らが求めてというよりは、自然体である自分が引き寄せられて」、そこで必然性ある〈表現〉が生まれていく。岩間先生のようなプロの芸

術家としてではなくても、われわれ一人ひとりも、自分なりの表現世界の楽しみを人生にわたつてもつことができます。そのときの心のもちょうを示している言葉のように思われます。

その岩間先生ですが、現在はどこいうところに関心をおもちなのか、次に伺っていきましょう。

三、現在の関心事について

■ ■ アート vs デザイン

「最近、生産×加工×販売で農業の六次産業化という話がありますが、それをアーティスト自らやる。つまり、耕し、生産し、加工し、自分の作品をつくるということ。それを同時に地域の中にもどういふふうに出していくかを徹底的に進めています。」

ここで、アートとデザインの違いが問題となります。恐らくデザイナーとかデザインというのは、今後地域の活力づくり、問題解決をしていくために非常に重要なキーワードとなるとも思いますし、ニーズになるでしょう。アーティストは、どちらかというと、自分で好きなことをしたいし、地域の人にとっては触れられたくない負の遺産も掘り立てて作品にしてしまったり、写真に撮って発表してしまったりするかもしれません。一方、デザイナーというのは、地域の問題を本当に真摯に受けとめて、いかにクリアにして解決して、それをまとめていくかというスタンスです。昨今の大きなアート・プロジェクトや地域再生の問題は、にわかアーティストが前面に出過ぎて、結局地域の活力にはつながっていかず、続かなくなってしまうことがあります。アートとデザインの線引きができなくなってしまうについて、更に混乱を招いているように思われます。そこ



図26



図27



図28

が大きな問題になっています。その線引きをコントロールしていかなくてはいいけません。次の時代にそれを考え動き出すことのできる若い世代の力が、非常に各地で求められているのが現状です」

■ ■ 日本の文化の源流へ

「僕自身の現在の活動は、十人くらいの規模で年間を通して、茅葺きの茅刈りなどしながら、田植えをしたりしています。規模を広げないようにして、なるべく長く続けていける仕組みづくりにすごく力を注いでいます。ある研究者の方とは、棚田を直すのであれば一緒に、ということ、宇宙に持つていく宇宙メダカも一緒に勉強をしています」(図26～28)

「日本人の文化の根底にあるものはいったい何かを考える勉強会もしています。その中で、僕らが一番大きくテーマとしているのは大麻です。大麻というと驚かれるかもしれませんが、オオアサゲですから大麻です。もちろん大麻を扱うには大変厳しい制約がありますが、そこをクリアして、麻文化に非常に注目をして、いま取り組んでいます。麻は日本の神



図29



図30



図31

社・仏閣で使われてきましたし、一般庶民の着物にも使われてきました。伊勢神宮の式年遷宮に必要な布は全てこの大麻でできていて、古代の文化へとつながる重要なものの一つです。これを根底に、食や住居や衣類に全部つながる広がりと、そこにあったであろう日本人の感性を探りたいと思っています」(図29)

「それから、植物の色素から絵の具をつくる」という、全く新しい絵の具づくりを研究しています。絵の具はそもそも鉱物、石からつくりますが、この研究では、自分で育てた植物を乾燥させ、ある方法を使って抽出して絵の具をつくります。江戸時代にさかのぼると、日本の浮世絵の青い部分が、藍染めと呼ばれている藍でつくられる絵の具なのですが、そういうものの再現を試みています。

これは、遊休地や耕作放棄地、竹林などの環境整備活動の中で、伐採したものを廃棄するのではなく活かす方法はないかという発想から生まれた研究です。建材としての使い方もありますが、それだけではなかなか賄いきれないので、いろいろとひもといた中で、絵の具づくりをす



図32



図33

るようになったのです。これはいろいろな美術館や学者も一緒に取り組んでいて、地域おこしから始まった仕事ではありませんが、結果的にこういう活動を長くしていくことで、ある地域の土地を改良していくとか広がりをつくっていくとか、そういう部分もあって、相互作用が起きています」(図30、31)

■ 地域プロジェクトのいろいろ

「地域プロジェクトでは、こんな活動もあります。屠殺の現場や工場は、なかなか地域にとけ込めない部分がありますが、そこを逆手にとって、薫製などを地域の人と一緒にづくり、おいしい食の提供をイベントにする、あるいは、豚のふん尿を堆肥化して地域で活用していくという仕事もしています。これは高齢者チームのNPO団体などと一緒に行います。こうなると、何がアートで何がデザインかというのは実際にはよく分からない状況です。地域の事業に関わるということは、あれやこれや、どんどんつながっていきます」(図32、33)

「地域の活動では、『探検隊』という地図づくりもよく行います。ある地域でいろいろな人が集まって何か活動を始めるときに、まずはその地域の地図づくりをいろいろなフィルタでつくります。非常に効率的かつおすすめの方法です。一般的な白地図を見て、どこにどんな建物があのかを調べるだけでなく、同時にそこで何が植生としてあのか、どういう生活をする人がいたのか、ある家の前の道や水路はどうなっているのかなど、いろいろな視点でその土地を見て、写真やスケッチ、メモをとってどんどん重ねて地図をつくっていきます。その土地の見えなかつた姿や歴史を詳しく知ることができます。地域のことを調べるには、図書館の本を利用したり、人の話を聞くという方法がもちろんありますが、子どもからその土地のお父さん・お母さん、おじいちゃん・おばあちゃんも一緒に参加してもらって、その地域の地図づくりをすると、自分の地域が自分の目を通してよく見えてくるので、おすすめています。学校の活動として取り組めるものではないかと思えます」(図34)

「また、土日の単発のイベントではなく、旧暦に合わせて、例えば新



図34



図35

月に動く活動などもしています。新月伐採といって、新月のときに木を切る、あるいは、竹を切ると、もちがよくなったりします。実際には重力や引力の関係で、木から水が抜けているという原理があるそうです。木は冬に切るといいといわれます。枯れているときに切れば切りやすいのですね。ところが、春先ですと木は元気になっていて、新芽を出しますから大地からどんどん水を吸う。そうすると、元気なので、切るのが難しい。そういう意味でも木を切る時期は決まってくる。そう考えていくと、田植えをする時期も全部決まってきました。そうすると、自然のリズムに合わせて地域の活動をするのにも、必ずあるサイクルが発生するはずで、そのサイクルをまず探るといのが僕らの活動の一つです。ただ企画をつくって単発でボンと何かやりましたよ、というのは違う種類の活動です」(図35)

「東日本大震災の被災地支援の活動も行っていますが、いろいろ行った結果、一つのキーワードになったのが『お祭り』でした。地域の祭事を守る事が確かな地域づくりにつながるというのは、確たる自信というか実証できたことです。お祭りがあれば、人がそこに集まる機会がつくれるのです。これは被災地に限らず、地方の限界集落にも同じことがいえます。地域・ローカルにお祭りがあることが、密度の濃い、豊かな時間・環境の価値を生みます。ところが、都会では、果たしてそういうお祭りや出来事が本当にあるのか疑問です。人が多いからといって豊かであるかという点、それは違うのではないかと最近強く感じています。ですから、なおさら、地域・ローカルと呼ばれている土地で、何かできることを考え動いていることのほうが多くなっています」

■ ■ 新しい学校づくり「市原アート × ミックス」

「このように、結局、僕なりに作品づくりをしながら、ある土地に開きをもつ」ということを大事にするようになりました。それによって見えてきた出来事があった、だんだんそれが膨らんでいきました。ちょうど、〃地域おこし〃、〃まちづくり〃が時代の流れとしても起きて、それにアートとして結果的に関わっていったというふうな総括してみることができると思います。

その中で、いま一番新しい取り組みとしては、二〇一四年三月に千葉県市原市の南東部・月出というところの、ある山間の廃校になった小学校を使って、新しい学校をスタートさせることにしました(図36)。結局、固定的な場所がないと、いつも、いろいろなところに生成しては消滅するというのを繰り返すばかりでストックにならないのですね。それで、活動の拠点をもちたいということから始めています。

「遊」「学」「匠」「食」という四つのテーマをもって、この学校を運営していきます(図37)。学校といっても子どもだけが対象ではありません。



図36



図37



図38



図39



図40

子どもから大人まで、学生や地域の方も含めて、多様な形で受け入れる受け皿を考えていて、この四つのテーマに合わせて、僕が招聘している美術家やデザイナーと一緒に取り組んでいます。(図38、39)

学校の改修にあたっては、新建材には全く頼らないで、僕がこだわっていた土や瓦や竹、土地の田畑を耕すことによって得られる藁、そういう土地の素材を使って改修を進めています。また、地産の食材を提供して、カフェの機能もたせませす。地元のお母さんたちにも参加してもらってカフェ運営をしたいと考えています。それらがアレンジされて、デザイン力を増して、魅力ある場所をつくっていくことを考えています。

校舎の二階では、国内外の作家を招聘して、創作や発表を予定しています。いわゆるレジデンスと呼ばれるもので、作家にこだわらず、例えば小説家や研究者、あるいは、そういうジャンルは問わず、ここでしばらく過ごしたい、生活をして学びたいという方々を受け入れる教室をつくりまます。

外には、巨大な四メートルほどの大きさのかまどをつくって、地産地

消の食材を提供したり、和紙づくりをしたり、いろいろなイベントも考えていきたいと思えます。これが、最近僕が力を注いで手がけているものです」(図40)

「環境芸術」の作品づくりを原点として、現在では、人と自然と地域と文化と、さまざまにつなげる機会をプロデュースするアート・プロジェクトのプロデューサー兼制作者として、多彩な仕事の世界を広げられています。基本的に「楽しいこと」「面白いこと」からサステイナブル(持続可能)なありようを求めて、意味あるつながりを創り出す活動を展開されていく岩間先生のセンスには、これからの私たちの暮らしにさまざまなヒントがあるのではないのでしょうか。

このような多彩な活動の中で、もちろんご苦労も多いはずですが、ご自身の活動の中で、いまだのような問題を感じておられるのかを次に伺いました。

四 「これからの時代」に向けて期待されるもの

須賀 ご紹介くださったようなアート・プロジェクトを、仕事として考えることに関心をもつ若い人たちがいるでしょうが、でも、それで食べたいけるかが不安だと思えますが。

岩間 職業として食べていけるかという点、また難しいと思えます。ただ、いま各地で、こういう芸術祭が行われたり、行政が入って地域活性化を行っている場所がたくさんあります。そこで何が足りないかという点、きちんと目配りが利いてマネジメントできる人材が不足しているのです。

イベントでも何か企画をつくる人はいるのです。ところが、それを動かしてマネジメントできる若い方が、決定的に不足しています。その担い手として期待されるのが、まさしく、いまの学生の皆さんの世代です。非常に不足しています。それを僕たちも育てなければいけないという話がありながらも、どう育てたらいいのか、育てたとしても生活できるだけの場所をつくっていけるかというのが課題になっています。そうした場所を、確かに作っていききたいという思いで、僕のいまのプロジェクトはあえてトライしています。

須賀 本当に必要とされていますよね。アーティストと、それから、こういうスペースをどういうふうにデザインするのか、ここに来る人たちの時間をどういうふうにデザインするのかということの見方を知っていて、それが実際運営できる人材は、いま本当に必要ですよ。

岩間 そうですね。そういう意味でのデザイナーが非常にいま求められています。単にものをつくるのではなくて、コトをつくるとか人をつくるというデザイナーが、多分いま一番足りない部分です。これから求められる部分です。建築家の方などは、手がけている人もいますが、やはり本職ではないので、アーティストもそうですが、何か自分の仕事が発生してしまうと、やはり関わりきれなくなるのです。アーティストとともに共同してやっていけるデザイナー、あるいは、マネージャーを本当に欲しています。

須賀 そういう人に求められる素養や知識というのは、どういうものなのでしょうか。作りの側からみて、こういうセンスをもっているといなど思われることはありませんか。

岩間 作り手側から思うのは、いかにやる気にさせてくれるかとい

うことです。要するに、作り手としては、自分がやろうと思ったら、全部やれてしまうというところがあります。実際に動き出していきます。そのときに、本当にやる気にさせてくれるようなタイプのデザイナーというか、マネジメントできる人というのはやはり重要です。ほとんどの方が何か消極的で、顔を見ながらやっていってしまうので前に進めない。まずはそこかな、と思います。人的魅力ということでしょうか。

須賀 それはそうでしょうが、多分それは、作り手側の気持ちに共感できる、ということが恐らく大事なポイントではないかと思えます。そこを理解できれば、と思うのですが、例えば岩間先生は、本当に多彩に活動を展開されていられているのですが、その源にあるクリエイトする力、それそのものを支えているものというのは何でしょうか。このような形で展開しなくても、全く違ったありようもできるのに、こうならざるを得ない源にあるもの、それは何なのでしょうか。

岩間 大体「反〇〇派」なのです。制度があるとまず壊したくなる。枠の中にいるのがつらいですね。変えていきたいなということを思います。

須賀 やはり新しいものをつくってみたいということなのです。いろいろなものを融合させながらでき上がってくる何かを求めていく、クリエイターのマインドですね。

岩間 もう一つは、学校の中ではなくて、実際に僕が学んだ経験からいうと、地域で出会う人と、その土地の文化の力、そのものにやはりあるんですね。そこへの共感の心だと思えます。生活の知恵もそうですし、人との本当のつながりとか、もちつもたれつ感とか、あんばいとか、挨拶ひとつでも、土地の人から学ぶことが本当に多い。ぜひ学生の皆さん

にも、そういうフィールドに出てほしいと思います。

須賀 もう一つお伺いしたいのは、享受者の問題です。地域でアート・プロジェクトを展開するときに、地元の人々の意識の問題があると思うのです。つまり、一方的にアーティストの側がいいだろうと表現しても、それを受けとめる市民の方の盛り上がりが必要ならば、長続きさせるのは難しい。そのあたりの感触はいかがでしょうか。文化の創造には、享受者はとても大事ですが。

岩間 アート・プロジェクトでよくある例が、立ち上げ当時はよくても、継続という形に入っていく段階でバランスが非常に崩れていくことです。いろいろな問題を抱えていきます。ですから、アート色といわれる部分は一切排除したかたちで地元と関係性をつくり、地域の人に理解をしていただいているから、少しアートと呼ばれているものを取り入れていくという段階を踏むのも一つの方法とやっていきます。また、アート・プロジェクトは、一般的に活動自体、まだ本当に小さいということも事実です。報道に出るような大きな芸術祭でも、たくさんの方々があつたようにいわれても、それはダブルカウントであって、実際の来場者数はそれほど多いとはいえないというケースも多いです。ですから、享受者層がいるかという点、何とも言えない。ただ、こうしたアート・プロジェクトがいろいろな意味で起爆剤になるのは確かです。問題はその後の継続です。

須賀 問題は、やはりそこなのです。その後の継続、という課題です。

岩間 その後の継続をだれがやっていくかという話になります。起爆剤は多分つくれるのです。そして、継続に結び付けるためには、早い段階で地元の人に移行しないといけないのですが、それにしても、そのと

きに必要になってくるのが、先ほど言ったような、ものを続けていくことを考えられるマネジメントできる人ということに帰着します。いま日本では、百以上のアート・プロジェクトが動いていますが、残るものはわずかではないかとされています。

須賀 これからの人作りの課題ですね。恐らく、そのマネジメント力のある人というのは、生活におけるアートの価値を知り、自らもそれを楽しむことのできるマインドをもち、人と人をつなぎ、〈表現〉することを楽しめる人材ということなのでしょうね。そういう人材育成について考えるということは課題が大きそうですが、これからの日本社会が、本当の意味で成熟した豊かさのあるライフスタイルを獲得していくには、必要なことなのでしょうね。

五. おわりに

岩間先生が、現在いろいろ創造されているプログラムは、保育や教育の中にも、児童館や福祉施設などでも、アレンジして取り入れてみることができそうです。例えば、お話の中にあつた「探検マップ」や「旧暦に合わせた暮らし」「お祭りを大切にする」などは、工夫してみることでできそうです。大切なのは、そういうマインドをもてるかどうかです。そこに気付きがあれば、機会を作ることへと向けていくことは可能なことではないかと思えます。

子どもに関わることを仕事とする大人にとって、子どもの表現世界を拓くとは、未来の享受者づくりに携わるといふことと捉えられます。そのためには、子どもが自らの育ちの中で、どのような楽しい〈表現〉の経験ができるかの積み重ねが、本当に大切なことだと思います。それは

一方で、保育者・教育者自身が、〈表現〉を楽しむ時間をどれだけ豊かにもてるか（少なくとも、そういうマインドをもてるかどうか）とも関わるのではないのでしょうか。そうであるならば、保育者自身が、自身の〈表現〉を楽しむ暮らしを自分自身の生き方として志向していくことが、子どもの表現世界の豊かさを拓くことにもつながるように思えます。そしてそのことの価値に気付いたとき、実は、いま暮らしの周りには、自らの〈表現〉を楽しむ拡げる場が、いろいろと拡がっている。アートは〈美術館〉の中心だけにあるのではなく、視野を広げてみると、今回ご紹介いただいたアート・プロジェクトのように、暮らしのいろいろなところで、いろいろな楽しい場がある。そういう場に出かけていって、活動に参加したり、継続に協力していくことが、自分の〈表現〉を拡げ、子どもたちの表現世界を拓くことにもつながるのではないのでしょうか。

人は文化的に生きる存在です。文化的に生きる土台を作る幼児期に何が必要か。その幼児期を見守る大人としてどうあるべきか。そのようなことを考えるヒントを与えてくれるものとして、岩間先生の営みに学ぶことが多いように思えます。

Ⅲ

生活文化学科の学びの風景

授業紹介 保幼小連携・地域連携型授業…………… 86

「水辺の楽校」を知る

—授業「生活」の取り組みから—

松田 純子 本学生活文化学科 准教授

平成25年度卒業生の卒業論文から…………… 92

授業紹介：保幼小連携・地域連携型授業

がっこう
「水辺の楽校」を知る
—授業「生活」の取り組みから—



本学生活文化学科 准教授

松田 純子

生活文化学科・幼児保育専攻の専門科目である「生活」は、幼児教育と小学校教育の連携の視点から、小学校低学年科目「生活科」の教師として、また幼稚園教諭としての実践的な知識や指導力を身に付けることを目標とした科目です。履修者は、小学校教諭・幼稚園教諭免許の取得をめざす学生たちです。

平成二十五年度前期に開講された「生活」の授業では、生活科の教科目標にある「具体的な活動や体験を通して学ぶ」や「自分と身近な人々、社会及び自然との関わりに関心をもつ」ということを、学生自身の実際の学びと重ねて体験できるようにとの意図から、授業担当者の一人として淡水魚類研究者の君塚芳輝先生をお招きしました。国や自治体、市民団体、教育現場の環境に配慮したさまざまな取り組みにも詳しい君塚先生の具体的かつ実践的な授業により、学生たちは、身近な地域資源について、特に自然環境に関して、その教材としての可能性のみならず、自然保護や環境問題の重要性へと目を開かされ、実り多い学習を行うことができました。

ここでは、授業の一環として行われた「水辺の楽校」の実地見学を中心に紹介します。

「水辺の楽校」とは

「水辺の楽校」とは、河川などの水辺と学校を近づけることを目的とした、国土交通省・文部科学省・環境省が連携して行う事業の呼称です。もう少し詳しく述べると、市民団体や河川管理者、教育関係者などが一体となって、地域の身近な水辺（「子どもの水辺」）における子どもたちの環境学習や自然体験活動を推進するために、国土交通省、文部科学省、

環境省の三省が連携して『子どもの水辺』再発見プロジェクト』に取り組んでおり、『水辺の楽校プロジェクト』は、子どもたちが安全に水辺に近づけるための水辺整備など、「子どもの水辺」での活動を推進するために必要なハード面からの支援を行うものです。

(※詳細は国土交通省ホームページ参照 www.mlit.go.jp/common/000191303.pdf)

水辺の楽校は、その活動形態により次の三つのタイプに分類されます。

①密着型 学校に面した河川などの水辺を、校地と一体的に整備する

②訪問型 学校近くの水辺を定期的に訪れて活動する

③日常活動型 学校内にビオトープ(生物が生息しやすい場所)や水族館(室)等を整備して活動する

授業では、「密着型」の例として日野市立潤徳小学校、そして「日常活動型」の例として府中市立南白糸台小学校の二カ所を訪ねました。

日野市立潤徳小学校

潤徳小学校は、全国で初めて流れる水路をワンド(池のようになっている地形)として校内に取り入れた、水辺の楽校プロジェクトの先駆的事例の一つです。実地見学では、副校長先生の説明を聞き、実際に学校内のワンドに降りて水辺の生きものに触れたり、その後、学校裏を流れる水路(向島用水親水路)に沿って周辺を見学して、さまざまな環境整備の実際を学びました。

見学のポイント

一. 学校内の水辺環境

- 校内の二連のワンド
- ワンドに降りる二つの階段
- 生きもの解説看板

二. 向島用水親水路周辺

▼浅川から学校まで

- 浅川の用水取水口付近

〔水衝部を利用した江戸時代からの巧みな取水方法〕

- 学校裏の石垣(練石積み)、左岸のミニワンド

- 路面以外を照らさないホテル灯(光害防止の工夫)

- 水辺の看板(柔らかな表現やデザイン)

- 高欄(欄干)に座れる『ほほえみばし』

- タヌキのトンネルの跡(交通事故防止)



ワンドへは自由に降りることができる。



学校の対岸には一般の遊歩道がある。放課後や休日は魚採りをする子どもたちや親子連れの様子が。

▼学校から下流

- ・柔らかな木片チップまき舗装
- ・水路上に張り出した散策路(空間の工夫)
- ・上流とは違う空石積み護岸(生きものや水循環への配慮)
- ・復元された水車小屋
- ・モノレールとの景観の対比



潤徳小学校横にある“ほほえみばし”(子どもたちが命名)欄干は子どもたちが座れるように低くなっている。



「とんぼ池の仲間たち」(校内にある生きもの解説看板)



復元された水車小屋



「ようこそ向島用水親水路へ!」(日野市 緑と清流課による看板)

【学生たちの感想より】

- ・水辺の楽校の一つとして潤徳小学校を見学し、学校の日常生活において水辺が身近な存在であることの素晴らしさを、自分の目で確かめることができました。
- ・全国でもっとビオトープが増えるように行政も協力すべきだと思います。幼い時期の生きものとの関わりを大切にすべきだと思いますし、自分も子どもの好奇心を尊重できる保育者になりたいです。
- ・「水辺の楽校」、とても良い字と響きだと思います。川が近くにあり、触れ合つことで、子どもは良い意味で変わり成長していくことができるのだと感じました。安全性の問題等、保護者の心配は尽きないと思いますが、なんとかして川と触れ合えるよう私たちは努力していく必要があると思います。現代にもこのような環境があるのかと感動しました。もっともこのような子どもたちが当たり前前に自然と関わることをできる環境が増えるべきだと思います。
- ・学校の近くに水車があったり、自然がたくさんあって、私もあのような小学校に通いたかったなとつらやましく思いました。水車を見たのは生まれて初めてだったし、水車の近くは大変すずかったです。オイカワという魚は、私ほっと大きい魚だと思っていたのですが、実際に見てすぐくびくびりました。写真や図鑑などで学ぶこともいいですが、生きている本物を見ることは大切だなと思いました。実際に見ることでオイカワは小さい魚だと気づくことができましたし、新しい知識が身に付いたと感じました。

府中市立南白糸台小学校

南白糸台小学校の校内ビオトープ『せせらぎ広場』は、二〇〇三年の学校創立三十周年記念事業として作られたもので、「循環」をテーマとして、元々あったワサビ田が復元され、更に水田、小川、池などが作られています。風車とソーラーパネルによる自然エネルギーで地下水を汲み上げ、ワサビ田→魚道→小川→池→水路→水田と流れて、近くの水路へと放流されています。池には、投網クラブの子どもたちが自分たちで多摩川から採ってきた在来魚を放し、在来の水辺植物が植えられています。

実地見学では、せせらぎ広場の維持管理を行っている大間努氏に説明・案内をしていただきました。

見学のポイント

- 地域の高齢者を集めてかつての校地周辺の様子をヒアリングして作った地図を元に、湧水、ワサビ田、せせらぎ池、田んぼなどを復元した手法
- 児童がどのようなビオトープを作りたいか、複数回行ったワークショップ『循環の広場』をテーマに、水循環や物質循環にこだわったビオトープの考え方
- 風車とソーラーパネルで地下水を汲み上げ、流末は付近の水路に戻す、土の散策路には木を削ったチップをまいて路面の柔らかさや透水性（水循環）に配慮しているこだわり
- 在来種にこだわり、投網クラブの児童が校区内の元漁師の方の指導で魚を採ってきてビオトープに投入している
- 児童が多摩川で本物を見てきて作った、日本一小さいハーフコン魚道



風車とソーラーパネルで発電



体育館の屋根から雨水を取水する“天水樽”。天水樽の下にはビール箱と砂利による雨水浸透槽が手作りされている。



水源に設けられたワサビ田。採れたてのワサビを子どもたちはそのまま食べてみることもある。



ビオトープがある場所は、かつては学校の裏の廃材置き場だったという。



手前は寒冷紗がかかったワサビ田。その奥の寒冷紗内にはホタルが生息している。



水路の脇の散策路には木のチップがまかれていて、柔らかく透水性もある。

- ・ 児童が自分たちで採ってきて作った校内水族館

- ・ 体育館屋根の雨水を貯溜再利用するためのタンク、天水樽の活用

《学校やせせらぎ広場の維持管理者に何う内容》

- ・ 在校生だけでなく、地域や卒業生がビオトープの維持管理にどのよ
うに携わっているのか

- ・ 予算に制約を受けないように三十周年記念事業の一環としてバザー
で諸費用を集め、更に行政・企業・団体の寄付や協力によって自由
にビオトープを作った過程

↓舗装の透水性タイル(東京都水再生センターより無償譲受)

↓発電装置、蓄電池(ユーズド品を格安で譲受)

↓雨水タンク(趣旨に共鳴した製造者が自ら設置)など

- ・ 現在の学校でのビオトープや水族館の活かし方や授業との関連のさ
せ方

※残念ながら、校内水族館はその維持が難しく、現在は休止中とのこと。

【学生たちの感想より】

- ・ 南白糸台小学校の見学では、いままで自分が見たことのないような風景を
見ることができたので勉強になった。太陽光発電のソーラーパネルが設置さ
れていたり、ワサビ田を復活させたり、木のチップが埋められた道があっ
たりと環境のことを考えているところや、子どもに自然について考えさせ
るようにしているところがいいなと感じられた。

- ・ ビオトープを作ったり管理するのは大変だけれど、子どもたちが笑顔であ
ることで頑張れるなと思いました。また教師たちのモチベーションも高く
ないとだめだと思います。

- ・ 南白糸台小学校の児童たちは、学校に水の循環の設備があるので、身近で
学ぶことができいいと思った。ほかに、ソーラーパネルや田んぼ、(い
まはやっていないが)しいたけ栽培、ワサビ田作りなど、全て学校の中で体
験することができて、とても恵まれていると思う。また、学校と地域との
結びつきも強く、とても理想的なものだと感じた。卒業生が後輩たちのた
めに活動してくれることや、それがずっと続いているということは素晴らしい
ことだと感じた。

- ・ 南白糸台小学校では、学校でホタルを見ることができるといのが素敵だ
と思う。自分が小学生のころは、ホタルの観察をして楽しんでいたので、
いつの間にかそういうことに興味や面白さを感じなくなっていたので反省
したい。

- ・ ワサビ田の水がとてもきれいだったことが印象的でした。また、あのビオト
ープに毎日触れることにより、植物の少しの変化にも気づくことができ、自
然を身近に感じるができるなと思いました。

実地見学の意義

はじめにも触れたように、生活科の教科目標の一つに「具体的な活動や体験を通して学ぶ」があります。このことは、保育や児童教育では当然のことながら、大学生の学びにおいても大変大きな意義をもつことが、二回の実地見学を通してあらためて強く感じられました。毎回の授業の学生によるリアクションペーパーを追ってみると、実地見学での新鮮な驚きや気づきのインパクトの大きさとともに、講義内容との関連づけやその理解の深まりも文面に表れているように思われます。そして、多くの学生が「子どもにとって実際に体験してみることがいかに大切か身をもつて分かった」という内容のコメントを記していました。君塚先生の映像を用いた大変分かりやすい講義においても、映像を見るよりも更に実際を見ることの効果を、学生たち自身が実感したのでしよう。「百聞は一見にしかず」の意味を、学生たちはあらためて深く理解したことでしよう。

今回の実地見学でもう一つの収穫は、地域資源についての具体的なイメージをもつことができたのではないかとこの点です。保育や教育という営みは、地域と無関係ではいられません。また、保育所や幼稚園、学校が立地する地域には、さまざまな資源、自然や人や文化などが存在しています。その豊かな資源を、保育や教育の場で活用しない手はありません。それらをいかに活用することができるか、つまり地域の資源を知り、地域と連携しながら、それらをどのようにコーディネートして、子どもの成長発達や学習に資することができるかが、これからの保育者・教師に求められる力の一つと言えるでしょう。その意味で、今回の実地見学で訪ねた二つの小学校の取り組みは、その課題も含めて、とてもよ

いモデルとなるでしょう。

最後に、今回の実地見学では、身近な資源を活用するための視点やセンスを養うことの必要性とともに、ある事業や活動を継続していくことの意義と難しさを学ぶ機会にもなりました。これは、やはり現場を肌で感じてみなければ分からないことではなかったかと感じます。学生たちには、物事に取り組む真摯な態度と忍耐強さも学んでほしいと思います。

※本稿中の「水辺の楽校」についての解説や「見学のポイント」は、君塚芳輝先生が作成された授業資料を基にしています。



平成25年度卒業生の卒業論文から

生活文化学科では、四年間の学びの集大成として、卒業論文を作成します。
平成25年度卒業生の卒業論文のなかから、学外の学会等で発表したものの要旨を紹介します。

日本家政学会 関東支部
第16回 家政学関連卒業論文・修士論文発表会
平成26年2月22日 於：埼玉大学

阿部 華乃

楽観性・悲観性の作用 一 月経周辺期で気分の変化に影響するか一

相笠 愛実

女子大学生の集団生活における同調行動についての検討

全国保育士養成協議会 関東ブロック協議会
第27回 学生研究発表会
平成26年2月21日 於：大妻女子大学

山岸 史佳

わらべうたと子どもたちのつながり

一 幼児期の発達から見るわらべうたの必要性一

新井田 佑香

日本人にとっての年中行事 一 自然ある暮らしの伝統一

楽観性・悲観性の作用

―月経周期期で気分の変化に影響するか―

生活文化学科 幼児保育専攻 阿部 華乃

【研究概要】 楽観性・悲観性という異なる二つの感情と、月経時に現れる月経前症候群（PMS）について、月経周期期で現れる気分変化の症状が、互いにどのように影響し合うかについて検討した。

【方法】 質問紙調査法と面接法により行った。調査対象者は女子大学生一七〇人（平均一九・七一歳）、面接対象者は女子学生七人（平均二〇・五七歳）であった。質問紙調査では生活習慣・楽観性・悲観性の割合・月経周期期での変化を検討し、面接では生活習慣とストレス・月経周期期での気分変化のエピソードについて検討した。

【結果・考察】 楽観性・悲観性の割合は一七〇人中八十五名ずつと半数ずつの結果となった。また、生活習慣が不規則な学生が多く、それに伴い月経周期期での気分変化が多く引き起こされていることが明らかとなった。面接結果では、PMS症状の精神症状が激しく現れた対象者（三名）は悲観性が高かった。この結果から、楽観性・悲観性の要因だけで月経周期期の気分変化が現れるのではなく、生活習慣も月経周期期での気分変化に影響を及ぼしている要因の一つであることが分かった。

【結論】 面接結果から楽観性・悲観性の影響は明らかとなった。しかし、質問紙調査の結果では、不規則な生活をしていると月経周期期での気分変化がよく現れていたことから、生活習慣も気分変化が現れる要因の一つではないかと考察された。

女子大学生の集団生活における同調行動についての検討

生活文化学科 幼児保育専攻 相笠 愛実

【目的】 本研究の目的は、女子大学生の集団生活における同調行動についての検討を試み、「他者に自分がどう思われているかを気にしている人は同調しやすい傾向にあるのか」ということについて調査を行い、考察することである。

【方法】 質問紙法と面接の二通りを用いた。質問紙法では女子大学の学生の一〇四年生一〇九名に質問紙を配布し、有効回答は一〇六名（平均年齢一九・七五歳、平均年齢の標準偏差〇・七九）であった。面接の調査対象者は、女子大学の学生の二〇三年生五名（平均年齢一九・四歳）である。質問紙法では（一）上山・米澤（二〇一〇）の他者による自己評価意識尺度、（二）葛西・松本（二〇一〇）の同調行動尺度を用いた計二十九項目の質問紙を作成し実施した。面接では同調行動に関する質問を十項目作成し実施した。

【結果・考察】 質問紙調査の結果から、自己評価意識や他者意識の高低、きょうだい関係にかかわらず、女子大学生は集団生活において相手に同調することが分かった。更に、仲間への同調傾向よりも自己犠牲・追従傾向のほうが全体的に高いことが明らかとなった。また、面接の結果から、被調査者である彼女たちが考える同調行動とは「協調」や「社会性」の表れであり、集団生活や社会における人間関係、友人関係をうまく築いていくために必要な手段であると考えていることが分かった。彼女たちが考える同調が「協調」または「社会性」であるならば、同調を別の角度か

ら考えたときに見える自己犠牲・追従は「抑制」または「依存性」と考えることもできた。したがって、女子大学生の集団生活における同調行動の実際は、仲間へ同調して相手に賛同するのではなく、自己を犠牲にし、相手へ追従していると考察された。



阿部さん



相笠さん



発表を終えて

わらべうたと子どもたちのつながり

― 幼児期の発達から見るわらべうたの必要性 ―

生活文化学科 幼児保育専攻 山岸 史佳

一. はじめに

私は、以前わらべうた講習会に参加する機会があった。それは保育者を対象として行われたものであったが、三歳ぐらいの女の子が母親についてきていた。女の子は同じ教室の端でずっとごっこ遊びを楽しんでおり、遊びに夢中になっているように見えたが、ふとそれまで大人が練習していた『ほたるこい』を歌った。その女の子は、この講習会で『ほたるこい』を初めて知り、聞いていただけで歌えるようになった様子だった。このことから、わらべうたは子どもたちにとって、想像以上に自然で親しみやすいのではないかと考えた。

わらべうたとは、「子どもたちが遊びなどの生活のなかで口伝えに歌い継ぎ、作りかえては歌い継いできた歌」、「歌という意識もないほど自然に出てきたメロディーが子どもたちの間で遊びながら歌われてきた歌」、「作者は問題にされずに遊び仲間によって集団的に伝承されてきた歌」とされている。本論文では、わらべうたを「遊びと歌が密接につながった、子どもたちによる伝承歌」と定義した。

二. 研究目的

子どもたちの音楽的発達とわらべうたの音楽的特徴を比較し、子どもたちにとってわらべうたが親しみやすい理由や子どもたちとわらべう

たのつながりについて明らかにすることを目的とした。また、いまの子どもたちのわらべうた遊びの様子や現場で働く保育者のわらべうたへの意識など、わらべうたの現状についてアンケート調査を行い、これからの保育や子どもの遊びにわらべうたが必要かを子どもたちの発達の点から考察した。

三. 研究方法

先行研究の調査とアンケート調査を行った。アンケート調査の方法については、以下のとおりである。

- ・ 時期 二〇一三年十一月～十二月
- ・ 対象 東京都H市公立・私立幼稚園・保育園 合計二十三園の保育者及びフリー、介助員一四九名

※「わらべうた保育」など特別な保育を実施している園は対象から除いた。

- ・ 調査方法 アンケートによるアンケート調査
- ・ 質問事項 ①保育経験年数など保育者自身について ②園内で見られるわらべうた遊びの様子について ③保育者のわらべうたに対する意識について ④わらべうたについての自由記述

四. 結果及び考察

(一) 幼児期の音楽的発達とわらべうたの音楽的特徴

作曲家のコダーイ・ゾルタンの弟子であるフォーライは、子どもが自然に自分で能動的に音楽をはじめるのは、歌うことであり、音楽を享受することの基礎が歌うことの中にあるとした²⁾。本論文では、幼児の声域に着目し、そこから幼児に適した音楽を考えた。

武田道子・加藤明代「乳・幼児の歌唱能力の発達に関する一考察」

「声域調査の分析を通して」と『新訂 音楽教育学概説』にあるレベツによる声域の発達調査から、個人差や男女差があるため絶対ではないが、幼児期は高音よりも低音の発音が著しいということがわかった。そこで、声帯がまだ未熟で生理的音域で歌うことの多い幼児にとって、低音が主体となっている歌のほうが発達には適しているのではないかと考えた。

また、わらべうたには、言葉との結びつきが強く、言葉がもつリズムやイントネーションがわらべうたのメロディーとなる特徴がある。また、半音が含まれておらず、多くのわらべうたが二・三音という少ない音で構成されているという特徴もある。わらべうたの特徴を子どもたちの発達に照らし合わせると、少ない音で構成されていることから、声域が狭い子どもたちにとって口ずさみやすく、音程も取りやすいことが考えられる。また、幼児には理解が難しいとされる複雑なリズムも言葉との結びつきにより理解が促され、より馴染みやすいことが推測される。このような点から、わらべうたは子どもたちの発達に適していると言えるのではないだろうか。

しかし単に子どもの発達に適しているという理由だけで、長い間わらべうたが存続してきたとは考えにくいだろう。なぜ、わらべうたが存在し続けたか。それは「遊びと歌が密接につながった」もので、ただ歌という音楽的なものとして存在していなかったことによると考えられる。わらべうたで遊ぶ際、友達や身近な大人と手や身体を触れ合わせて楽しむが、この「人の存在を必要とする」という点がわらべうたの最大の魅力であり、子どもたちに大きな印象を残すのではないかと考えられる。また、羽仁協子は、わらべうたの単純なメロディーが子どもたちに安心

感を与えるとしている³⁾。このような心身の安定を遊びのなかでもたやすことができるわらべうたは、子どもたちの健全な成長発達にとって重要なのではないだろうか。

(二) わらべうたの現状——アンケート調査

園内で子どもたちの間でわらべうた遊びが見られるかという質問に対して、半数以上の保育者が「はい」と回答をした。乳児のわらべうた遊びでは、まだ発達の関係上、子どもたち同士で遊ぶことはできないが、成長と共に保育者の動作や歌をまねをして楽しんでいくという回答結果を得た。一方幼児では、同年代や異年齢の友達同士でわらべうた遊びを楽しんでいるという回答結果であった。しかし、わらべうた遊びを子どもたち自ら始めるという姿はあまり見られず、保育者が遊び方を伝えたり遊びに誘ったりということが中心になっていた。これは、始めに述べた「子どもたちによる伝承」というわらべうたの定義に反しているように思われる。

次に、現在の子どもの姿を見てわらべうた遊びはよく遊ばれていると思うかという質問に対しては、半数近くの保育者が「あまり思わない」と回答している。この回答結果は、園内でわらべうた遊びを楽しむ子どもの姿は見られるかという質問に対する回答と矛盾した結果となった。この回答に関して、「園で遊ぶ姿は見られても園以外の場所でわらべうたを楽しむ機会があまりないため、子どもたちに遊びを伝えてもなかなか子どもたちの身につかない」という保育者の意見がいくつも見られた。この保育者の意見からもうかがえるように、園以外の場所でも継続的にわらべうたで遊ぶことがなければ、子どもたちの身につく前に消えてし

まうと考えられる。その結果、現在の子どもたちの遊びからわらべうた遊びが減っているのではないだろうか。また、子ども自身がわらべうた遊びをやりたいと望んでいても、わらべうたを楽しめる環境がなかったり、わらべうたよりも魅力的なおもちゃが充実していたりなどにより、わらべうたへの興味が薄れているのではないかと考えられる。ただし、現代の子どもたちにわらべうたは浸透させやすいと思うかという質問に対しては、「とてもそう思う」「そう思う」の回答を合わせて半数以上の結果を得ている。

最後に、今後もわらべうたがあり続けてほしいと思うかという質問に対しては、九割の保育者があり続けてほしいと回答した。さらに、あり続けるためには、どのようなことが必要かという質問をすると、「保育者の直接的な伝承」が最も多い回答であった。この結果から、保育者の「わらべうたを伝承していこう」という意識の強さをうかがうことができた。

五. おとめ

幼児期の音楽的発達とわらべうたの特徴を比較してみると、わらべうたは子どもの発達に適しているだけでなく、遊びとの結びつきが強いいため、身体の発達を促す効果も期待できる。しかし、わらべうたの最大のメリットは、人とのつながりを自然にもたらしめてくれるという点にあると思われる。子どもたちは、遊びのなかでさまざまな人と触れ合いながら、人として生きていくうえで必要なことを多く学んでいくだろう。実際、アンケート調査の自由記述で、わらべうたは「単なる遊びとしてだけでなく人とのコミュニケーションをとる手段として活かせる」という保育者の意見が多くみられた。しかし、遊びの主役はあくまでも子どもたち自身

であり、遊びの主役が子どもたちである限り、楽しさや必要性を感じる遊びでなければ、子どもたちの遊びのなかにわらべうたを残していくことは難しいのではないだろうか。そのような点から考えていくと、子どもたちに本当にわらべうたは必要なのだろうか。

わらべうたには、いまの楽しみ方に合わせて微妙に変化しているものもあれば、昔と比べてほとんど変わらずに存在しているものもある。このことから、年齢を問わずだれとでも楽しむことができると考えられる。つまり、お年寄りなど異なる年代とも容易につながる可能性があるのではないということである。都市化や核家族化によって、地域とのつながりが薄くなりがちな時代になってきたからこそ、人とのつながりが欠かせないわらべうた遊びは、子どもたちが生きていくうえで必要な経験になるのではないだろうか。また、大人にとっても子どもと一緒に日本の伝承文化に触れることができる機会になり、大人にとってもわらべうたは必要なものであると思う。

〔引用文献〕

- 1) 『日本音楽大事典』平凡社、一九八九
- 2) フォライ・カタリン、セニ・エルジュエーベト『コダーイ・システムとは何か ハンガリー音楽教育の理論と実践』全音楽譜出版社、一九九五
- 3) コダーイ芸術教育研究所『わらべうた わたしたちの音楽 ―保育園・幼稚園の実践―』明治図書、二〇〇八

〔参考文献〕

- 木村はるみ・蔵田友子『うたおう あそぼう わらべうた 乳児・幼児・学童との関わり方』雲母書房、二〇〇九
- 武田道子・加藤明代「乳・幼児の歌唱能力の発達に関する一考察Ⅰ ―声域調査の分析を通して―」静岡大学教育学研究報告 第三十五号(二四七―二五八、二〇〇四)
- 浜野政雄『新訂 音楽教育学概説』音楽乃友社、一九九五

日本人にとっての年中行事

—自然ある暮らしの伝統—

生活文化学科 幼児保育専攻 新井田 佑香

一. 目的

最近では、情報化、国際化が進み、私たちの生活はすっかり便利になり、いろいろな国の文化を楽しむことができるようになった。一方で、日本人としての生活文化を営み、自ら生活を豊かにしていく力は薄れているのではないだろうか。その一例に、日常生活のなかで季節を感じて味わうことを電子機器を使って簡易的に行う人がいるが、その姿には疑問を覚える。日本は、季節の節目ごとに年中行事があり、それを行うことで大切な心が継承されてきたのではないだろうか。そこで、本研究では、日本人が生活文化として大切にしてきた年中行事である正月に着目し、その意味を考え、本来の意味に根ざして年中行事の心を楽しみ味わう暮らしの価値について考察する。そして、現代社会に生きるわれわれだけではなく、次の世代にも、日本の年中行事を心待ちにできるように伝えていくための提案を行うことを目的とする。

二. 方法

民俗学の文献をもとに、年中行事の意義を捉え、考察を行った。

三. 年中行事「正月」とは

農耕生活が行われていたころ、農耕行事や人生の折り返しに行う人生儀

礼に伴う祝儀など、非日常的な特別にあらたまった日のことを「ハレの日」と呼んでいた。そして、「ハレの日」以外の「ふだん」のときを「ケの日」と呼んでいた。「ハレの日」は、「遊び日」とされたが、それは神事に關わる日なのであった。神事とは、「翁が舞ったり、鬼が宴をすることも遊びであり、この世のものではない存在が、現世に出現する現況は、神事なのであり、祝事や祭事とされていた」(宮田、二〇〇六)とあるように、

日常的な労働を中止して、神事に参加するのが神遊びの本来の意義であった。つまり、年中行事は神事に参加するための「遊び日」であった。しかし、「遊び日」の語とともに「休み日」という語が使われ、神事と関わりなく、日常の労働をただ休むことを目的とする日となるにつれ、神事を行う「遊び日」としての年中行事の取り組みは薄れてきた。以上のことを、現在でも多くの人が行っている「正月」について調べてみた。その結果、「正月」は確かに神遊びに励む「遊び日」であり、年神様を迎えて神と一緒に遊ぶ日とされていることが分かった。その年神は、先祖の神や稲霊とされていた。われわれがここに生きているのは先祖がいたからと考えれば、先祖の神を感じ、感謝することは現代でもできるだろう。しかし、農耕生活が行われないうま、稲霊として年神を感じることは難しいのではないかと。年神を感じられなければ、神遊びとして正月行事を行うことはなくなり、「遊び日」としての本来の価値も感じ取ることができなくなってしまう。年中行事を形として継承していくだけではなく、薄れかけている「遊び日」「神遊び」という本来の意義も含めて継承していく必要がある。

四. 福島県会津地方の「正月」

次に、都心よりは身の回りが自然にあふれ、農耕生活もまだ行われ

ている福島県会津地方の正月行事に、「神遊び」の様子の実際をとらえ、その意義について、より具体的に考察した。ここでは正月の神遊びの形として「団子さし」「歳の神」「初市」を例に取り上げた。しかし、神遊びとして現在も行われているように見えたこれらの行事も、形だけ継承され、自然豊かな会津地方でも「遊び日」「神遊び」という根底にある価値は薄れていることが明らかになった。その薄れている心を今一度取り戻すために、日本人がどのように自然を感じ取って来たのかを確かめていく必要があると考え、次に日本人にとっての自然とはどのようなものであったのかを検討した。

五. 日本人にとっての自然

「日本の自然崇拜は、必ずしも、お社を造営したり、そこで周期的に捧げ物をしたりという、いかにも宗教というスタイルにはなっていないかもしれない。むしろ、人々は、常に自然のイメージを心に抱き、そのイメージと関連させる形で、生きていくスタイルを作り上げてきました。ですから、日本人の自然崇拜は、日本人の精神の根底にあつて、生活と文化の総体を形成してきた根本思想だということができます」(保坂、二〇〇三)とあるように、日本人にとって自然とは、木々や草花から感じ取ることができる風合いや、趣きなどを含む。こうした伝統に根ざす日本人は、自然にじかに触れて感じ取るだけでなく、日常生活のなかでも自然を感じられるような営みを重ね、自然への思いをより豊かなものにしていったと考えられる。そして、このような経験を積み重ねることで、自分のなかにある自然を感じる心も大きく育つのではないかと考えた。このように自然がわれわれにもたらす影響の大きさから、自然は、

日本人にとって心の拠り所と言えるのではないだろうか。このことに気がついたとき、自然のなかで生かされていることに感謝できるように。農耕の営みから離れても、このような自然を感じる心を育てていくことで、稲霊を理解することができるようになるのではないだろうか。それが、「ハレの日」「神遊び」を心待ちにして過こしていくことにつながる。したがって、自然を感じる心を日常生活のなかで大切に育んでいく日々の営みが、年中行事を楽しむ心も育てると考えることができる。

六. 年中行事の暮らしの構築

以上のことから、日本人は年中行事や自然から大切なものを感じ取ってきたことが明らかになった。そうであるならば、その根底となる大切なものを現在の暮らしのなかで再び根を張らせ、育てていくことがこれから生活を送るうえで変わらざ大切なことであり、年中行事を心待ちにでき、自然を味わう喜びを知ることにつながると思える。これらは、われわれだけの問題ではない。これからの社会を育てていく次の担い手である子どもたちがいる。われわれが次の世代へつなげていく必要がある。しかし、産業化が進み、農耕生活の営みから離れてしまった現代社会においては、社会のなかではもちろん、家庭でもその心を伝承していくことは難しい。そこで、保育者がそのような価値観をもち、子どもたちに伝えていくことが、最後の砦として大切ではないか。では、年中行事をどのように取り入れていけるだろうか。ここでは、「先祖の人たちがおまつりやしきたりにこめた願いや心がたたくつたわるようにくふうした」という、かこさとしの絵本『こどもの行事 しぜんと生活』に取り上げられた正月行事の活かし方をいくつか考えた。一月は正月行事と

して餅つき、二月は豆まきなどと一つの行事を、ただ切り取って、「その時期になったから」と機械的に行うのではなく、園生活の流れと年中行事の流れを感じながら生活の一部として取り上げていくことで、一連の流れに見通しが持てるようになる。そのことで年中行事を心待ちにできるようになる考えた。

年中行事が来るたびに積み重ねることは、われわれ自身の心をより豊かなものとしていくことにつながる。年中行事の楽しさを子どもたちに伝えるには、やはりわれわれ大人自身もその大切な価値を感じられる心を育ててゆかなくてはならない。そのために、日常生活のなかから自分にあつた自然の取り入れ方を見出し、生活の一部として大切なものを感じ取り、育んでいくことが大切になっていくだろう。

七. おわりに

さまざまなことが便利に行える社会だが、何でも簡単に行えばいいということではない。いま、周りにある山や木々も何年もの時を経ていまの姿になつている。そうして、われわれと同じ時間を生きているのだ。生活も何年もの時を経て現在の生活になつている。そして、われわれの生活が未来につながっていくのである。いまが良ければいいという考えではなく、これからの未来をより心待ちにできるように生活を営んでいきたいものである。本研究では、暮らしのなかに年中行事、自然があることの大切さとは何か、また、それらが持つ本質的価値とは何かについて考えてきた。それらを今後の社会も見失わないように、われわれ自身ももう一度見つめ直すべきだと考える。自然を感じ取る心が生活に深く関わっていることの真髄を見つめることが大切なのではないだろうか。

そして、それらを感じられた喜びや感謝の気持ちを、日々の暮らしや年中行事を通して多くの人と分かち合うこと。そのことが、一人ひとりの生活を、より豊かなものにしていくのではないだろうか。現在の生活の良さと、昔からある、変わらぬ良さを融合させていくこと、生活の担い者として、われわれ自身が生活を作っていくことが大切になっていくことだろう。また、生活を送る一人の人として、そのような生活を切り開いていきたいと考える。

〔参考文献〕

- かこさとし『子どもの行事しぜんと生活』小峰書店、二〇一一年
- 保坂幸博『日本の自然崇拜、西洋のアニミズム』新評論、二〇〇三年
- 宮田登『暮らしと年中行事』吉川弘文館、二〇〇六年
- 宮田登『民俗学を支えた人びと』吉川弘文館、二〇〇七年
- 柳田國男『年中行事覚書』講談社、一九九七年



発表を終えた新井田さん・山岸さん

実践女子大学 生活文化フォーラム 第18号

平成26年3月10日発行

編集者 生活科学部生活文化学科
発行者 (ホームページ <http://campus.jissen.ac.jp/seibun/>)
〒191-8510 東京都日野市大坂上4-1-1
TEL 042-585-8918
FAX 042-585-8919
実践女子大学ホームページ <http://www.jissen.ac.jp>

〔編集企画〕協力・印刷所

日野テクニカルサービス株式会社
〒191-8660 東京都日野市日野台3-1-1
TEL 042-586-5062
FAX 042-586-8944

生活文化フォーラム
第十八号

新生・生活文化学科誕生へ

実践女子大学
生活科学部生活文化学科

実践女子大学 生活科学部生活文化学科
〒191-8510 東京都日野市大坂上4-1-1
042-585-8918 (fax. 042-585-8919)
<http://campus.jissen.ac.jp/seibun/>

